三魔王異世界珍道中

ヤマネコクロト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二人の少女に召喚された魔王・・・・・・・・・その魔王がなんの因果なのか、召喚されたのが一人じゃなかったら・・・・・・・？

短編でやってみたら思ったよりも好感触だったようなので連載してみることにしてみました

基本的にリアル事情で更新は遅いですが何とかエタらないよう頑張りたいと思います。

ちょっとギャグ色が強いかもしれません（だってこいつらチートの塊ですし）

なお文才については（ｒｙ

目次

召喚された魔王が三体だった件 ―― 1
検証と把握 ―― 15
反省とこれから ―― 31
城塞都市ファルトラ ―― 44
魔王の考察 ―― 57
魔術師協会 ―― 70
それぞれの事情 ―― 85
〝わがまま〟 ―― 102
〝アインズ・ウール・ゴウン〟 ―― 116
シエル先生が一晩でやってくれました 127
〝怪力戦士〟 ―― 143
一難さってまた一難 ―― 159
初クエスト ―― 174
一泡吹かせてみる ―― 186

召喚された魔王が三体だった件

◆◇◆

～星降の塔

【ｓｉｄｅ：レム】

何が起きたのでしょうか・・・・・・？

私、『レム・ガレウ』はひどく困惑しています。私は自身に課せられた宿命に抗うべく、ここ『星降の塔』の祭壇で召喚の儀式を行い、強力な召喚獣を喚び出そうとしました。

「ね、ねぇ・・・・・・何かすごい事になってるんだけど・・・・・・？」

……まあ、儀式の際変なエルフと一緒にやることになってしまいましたが今は目の前の状況です。

本来、召喚の儀式で呼び出される召喚獣は一体が基本。それが常識でした。ですが、今目の前にいる召喚獣は三体。

一体は人型で恐らく『混魔族（ディーマン）』でしょうか？男性でそれっぽい特徴はあるのですが角のような物が生えているので判断が付きません。

もう一体は・・・・・・なんでしょう？ゼリー状の球体がそこに鎮座しているのです

がスライム種でしょうか。私の知識にこのような種がいた覚えはありません。
そして最後の一体は、一言で言えば骸骨でした。立派な漆黒のローブに頂辺にいる宝玉を咥えた七匹の蛇が特徴の黄金の杖を持っています。見た目から察するにリッチ種・・・・・・それも上位に位置すると思われます。
……それにしてもあれから立ち込めるどす黒い赤色のオーラが人間の苦悶の表情に見えるのですが・・・・・・気にしないことにします。気にしたらダメな気がします。
とにかく、召喚の儀式に成功した以上召喚獣なのは確かでしょう。さっさと隷従の儀式をしないと
「うぅ・・・・・・あの骸骨さっきからこっち見てるんだけど大丈夫だよね？大丈夫なんだよね？」
言わないでください、見ないようにしてるんですから。視線からは敵意を感じませんが慎重に行きましょう。まずは混魔族の男性からです。そこの骸骨と違って眠っているので好都合です。立ったままだったら届かなかったでしょうし・・・・・・
「あ、ちょっと！抜けがけはずるい!!」
……うるさいエルフですね
◇◆◇
【ｓｉｄｅ：モモンガ】

……なんだこれは？

俺、『モモンガ』こと『鈴木　悟』は目の前の状況が飲み込めずにいる。確か俺はＤＭＭＯ―ＲＰＧ『ユグドラシル』のサービス最終日に、その最後を飾ろうと拠点である『ナザリック地下大墳墓』の玉座の間で連れてきたＮＰＣ達と、仲間たちと作り上げたこのギルド武器『スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』と共に、ユグドラシルの終わりを見届けるはずだった。

そして、終了時刻深夜０時まで後１０秒というところで明日の事を考えながらカウントダウンを始め、カウントが０になった時にそれは起こった。玉座の間の景色から一瞬で青空が見える祭壇、恐らく塔の上か。そんな場所に変わったのだ。そして目の前にはエルフと思われる少女と猫耳・・・・・いや豹耳か？まあ、それを生やした獣人の少女がいた。何だかこっちを怯えた表情で見てるが

一瞬、『ユグドラシルⅡ』が始まったのかと思ったが運営からの告知もなかったし、仮にそうだったとしても記念すべきオープニングがこれというのもひどいの一言に尽きる。そして苦情を出そうにもコンソールが開かず、これではＧＭコールはおろかログアウトもできないクソ仕様。

……訳が分からない、一体何が起きたと言うんだ。考えが纏まらない中、目の前の少女二人に動きがあった。横で寝ている男性に近づいていく。近づいている途中、エルフ

の少女のたゆんたゆんの胸に一瞬視線が泳いでしまう
……何故か仲間の一人である翼人族の彼が小躍りしている幻覚を見たがきっと気のせいだ。あ、二人揃って彼にキスしちゃったよ
（情報が足りなさすぎるな。余り気が進まないが、彼女達がチュートリアルキャラである事を祈るしかないか）
ＮＰＣに話しかけるなんてイタい人にしか見えない行動だがここは割り切るしかない。俺は意を決して彼女達に話しかける
「えーと、すみません。そこのお二方、少しよろしいでしょうか？」
「ひゃっ、うそ!?喋った!?」
「・・・・・・・っ!?驚きました、言葉を話す召喚獣がいるなんて」
……あれ？喋っただけで驚かれてる？ていうか召喚獣？
「あー・・・・・いまいち状況が把握できてないので詳しい事情を聴きたいのですが・・・・・とりあえずここはどこなのでしょうか？」
「・・・・・・・ここは『星降の塔』といい、召喚獣と契約するための『隷従の儀式』を行う為の場所です。そして貴方は私、『レム・ガレウ』が喚びだした召喚獣のはずですが」
「違うし！あたしが喚びだしたんだよ!!あ、あたしは『シェラ・Ｌ・グリーンウッド』っていうの」

……つまり俺はこの女の子達に召喚獣として喚びだされた、と。何だか一昔前に流行ったラノベ見たいな展開で突拍子もないが、状況としては何となくしっくり来る。

先ほどからごうごうと吹きすさぶ風の感覚、空に浮かぶ雲にその上から照らす太陽の光。電脳法で五感を制限されているのに現実に等しい感覚を感じている以上、≪ユグドラシルⅡ≫という結論はあり得ない（ホントはＢＡＮされるか試したいけど流石に見ず知らずの女の子に対してそんな事する度胸はない）

まあ仮にマジでゲームだったら「クソシナリオ乙」とスレ立てしてやるところではあるが。

そうなってくると魔法って使えるのか？俺は死霊系魔法詠唱者（マジック・キャスター）、魔法が生命線だ。いざというときに使えなければ話にならない。ここは一つ、悪いとは思うが寝ている彼にちょっと魔法を使ってみようか。心の中で謝罪しつつ、俺は使おうと思った魔法を思い浮かべる

……うん、詠唱時間、効果範囲、待機時間（リキャストタイム）、全て手に取るように分かる。ユグドラシルと同じように、それも正確に魔法が使える事に俺は歓喜し、寝ている彼に魔法を唱えた

《道具上位鑑定（オール・アプレイザル・マジックアイテム）》

……あれ？俺の装備が鑑定された？どういう事だ？今度はエルフの少女の服を鑑定

してみよう。
　ふむふむ、身体能力強化に魔法耐性・・・・・・他にもまだあるな。大体【伝説級】といったところか。
　魔法は確かに発動したがなんでそこの男性には通らなかったんだ？考えられる事と言えば・・・・・・・・
「・・・・・・どうやらあなたが強引に私の召喚を乗っ取ろうとしたせいで、不具合が生じてしまっているようです」
「違くない!?あたしが先にこの場所を見つけたんだよ!?ここなら魔力が高まって異世界の魔王だって呼べるって思ったんだもん！」
　……いつの間にか喧嘩に発展してるし・・・・・・ていうか俺魔王として呼ばれたの!?いやまあノリノリで魔王ＲＰしたことあるけどさぁ・・・・・・
「あー・・・・・・君たち、喧嘩は「くだらん争いはやめるがいい！貴様らは今『ディアヴロ』の前にいるのだぞ」」
　仲裁に入ろうとしたらいつの間にか起き上がっていた隣の男性が一喝していた

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：ディアヴロ】

目が覚めたと思ったら女の子にキスをされていた。

夢かと思ったがどうやら違うらしい。肌を撫でる風の流れ、寝そべっている床の冷たさ、キスされた頬に残るリアルな唇の感触。どれも夢にしては生々し過ぎる。

俺、『坂本　拓真』は視界から外れた少女達の背後に見える空を眺めながら今の状況を確認すると、どうやら寝るまでやっていたファンタジーＭＭＯ―ＲＰＧ『クロスレヴェリ』で使っていたアバターの『ディアヴロ』の姿のようだ。装備もそのままである。

そして今いる場所も覚えがある。『星降の塔』という、クロスレヴェリにおいて不遇職とまで言われている『召喚師』が呼び出す『召喚獣』を手に入れる場所だ。

……この状況から察するにどうやら俺はこの二人の少女に召喚獣として召喚されてしまったようだ。それも隷属の儀式といういかにもな儀式を終わらせて。

……一瞬、こんな可愛い女の子達に隷属させられるのもありだなと思ってしまったがそんな考えを振り払う。

魔王は女の子ごときに屈したりしない！

そしてちゃんと隷属してるか確認する為に女の子達が俺に命令してくる。だが、命令を聞いてはいるものの身体が勝手に動くとかそういう強制力は感じなかった。そして業を煮やしたのか女の子二人が言い争った後、互いに武器を取り出し、一色触発の状態となる。

喧嘩を止めなくては。そう思い、声を掛けようとするが止まってしまう
……あれ、女の子に話しかけるってどうするんだっけ？
お、落ち着け！素数を数えて落ち着くんだ！
はっ！そうだ、ごくごく最近女の子と会話できたこの経験なら行ける！
「あー・・・・・・君たち、喧嘩は「くだらん争いはやめるがいい！貴様らは今『ディアヴロ』の前にいるのだぞ」」
なんか隣で誰か止めに入ろうとしてたけど気にしない！魔王はそんな些細な事気にしない！
それよりも二人がピタリと動きを止めた。よし！これならいける！
「俺は無益な争いは望まぬ。羽虫同士の潰しあいなど目障りだ・・・・・・故に！貴様らに命ずる。仲直りの握手をするがいい・・・・・・笑顔でな！」
……なんて偉そうな事言っては見たけど聞いてくれるかなぁ
「誰が・・・・・・こんな胸に栄養の偏ったエルフと――――!?」
「はぁ!?悪いのはあっちなんだから、あのちっこい豹人が謝るまで許さな――――!?」
……おや、二人の様子が・・・・・・？
お互いに瞼がぎこちなく閉じられ、口角もピクピクと痙攣しながら上がっていく
そしてお互いに一歩、歩みだすとレムは抗戦間近で握っていたクリスタルを左手に

持って空いた右手を差出し、シェラも同じく構えていた弓を下して右手を差し出すと握手をする

……すごく嫌そうな笑顔という不思議な表情だったが、こちらの命令通りに二人は笑顔で仲直りの握手を交わしてくれた

直後、二人の首に黒い光がまとわりつくと、『ガチッ』という音とともに首輪が付けられた

「これは・・・・・・『隷従の首輪』!?」

「嘘!?なんで!?これがつくのは召喚獣の方じゃないの!?」

「・・・・・・確かに『隷従の首輪』をかけるための『隷従の儀式』を行いましたが」

ん?そういえば俺に『隷従の儀式』行ったんだよな?確か今装備しているのって・・・・・・・

「あの、ちょっといいですか?」

「む、なん・・・・・・!?」

装備を確認しようとしたら隣から声をかけられ、横を振り向くと漆黒のローブをまとった骸骨がいた

こわっ!?ていうかめっちゃ近い!?う、うろたえるんじゃぁない！魔王はうろたえない!!

「・・・・・・・見たところリッチの上位種か？」
「えーっと、死の支配者（オーバーロード）という種族なのですが・・・・・・・ご存じないですか？」
死の支配者（オーバーロード）・・・・・・最近のアップデートでそんな召喚獣いたかな？ていうか普通にしゃべってる？
「・・・・・・・もしや、貴様もプレイヤーか？」
「おお、もしや貴方もでしたか！」
　どうやら同じプレイヤーのようだ。よかった、ボッチでも心細かったんだよなぁ。まあ顔には出しませんけど!!
　……というかプレイヤーでそんなキャラ選択できたっけ？
「それで、なんだか大変な事になってますけどあれは一体・・・・・・・」
「ああ、どうやら俺に儀式を行使しようとしたようだがこの俺の『魔法反射』によってあいつらに跳ね返ったようだ」
「あー・・・・・・・それでですか。魔法詠唱者（マジック・キャスター）からすれば天敵のようなスキルですね」
「・・・・・・・『魔法反射』とは、凄まじい能力ですが・・・・・・・こんなこと、私は認めません」
「あたしだって！召喚獣に隷従するなんて嫌だよ!?」
　……なんだかかわいそうになってきたな。だが、『クロスレヴェリ』における『隷従の

儀式』とは設定説明で出てくる単語であって、プレイヤーが好きなように行使できる魔法じゃない。それ以前に解き方なんてものも、設定をかなり読み込んだ俺ですらわからないのだからお手上げだ

どうしようか悩んでいると、今度は別の声がかけられる。確かそっちにはスライムっぽい水の球体がいた気がするが

「お二人さん。ちょっとその首輪見せてもらってもいいかな?」

そこには薄っすらと青みがかった銀髪の女性・・・・・・いや声音からして男性か?いかにもな人間(ヒューマン)がそこにいた。

……ていうか誰?

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：リムル】

さて、なんだかえらい事になってるようだが現状整理だな。

俺こと『リムル＝テンペスト』は『異世界の門(ディファレンスゲート)』という、簡単に言えば異世界へと行き来できる魔法を使い、入念な準備（主に問題児二人の説得）を済ませて未開の地を探索しようと計画していたのだ

そしていざ、門を発動したはいいが何かしらの〝力〟が門に干渉してきたのだ。俺の相棒たるアルティメットスキル『智慧之王(ラファエル)』から生まれた神智核(マナス)こと『シエル』先生が

対処しようとしたが間に合わず、光の奔流に呑まれて意識を失ってしまう
　そして気が付けばエルフと獣人の少女たちが何やら言い争いをしており、『鬼人（オーガ）』とはまた違う、角の生えた男性が一喝して命令をしたと思えば、今度は少女たちの首に重厚な首輪が付けられていた。
　これはどういうことかというとシエル先生が言うには
≪どうやら少女達があちらの男性に儀式魔法を行使したところ、男性が装備している指輪に付与されている『魔法反射』効果によって儀式魔法が跳ね返り、自身にその効果が及んだようです≫
　なんともえっぐい効果である。話を聞く限りじゃそこにいる男と骸骨は少女達に召喚されたらしく、おそらく俺もその召喚の儀式に巻き込まれた形で召喚されたようだ。まあ俺も隷従させられるなんてゴメンだし、自業自得と言えば自業自得だがかわいそうなのも事実である
　それに、貴重な情報源となる現地住民。恩を売っておいて損もないだろう。そういった下心もあって話しかけやすいように人型になって声をかけた訳なんだが・・・・・・・
「えっと・・・・・・・誰？」
「・・・・・・変ですね。人が上がってくる気配はしませんでしたが」
「うぉい!?ちょっとは気にしろよ！お前たちが喚んだスライムだよ!!」

そう突っ込んだ直後、証明するために一度スライム体へと戻る
「なんと・・・・・・ディアヴロの魔法反射能力にも驚きましたが、こんな能力を持ったスライムは初めて見ます」
「ほう・・・・・・・変わった種だな」
「プルプル！ぼく、わるいスライムじゃないよ！」
「ぶふっ!?」
「???」
おや、この俺渾身（？）のギャグにディアヴロと名乗った男と骸骨が噴き出した。
・・・・・・もしかして
そう思い、もう一度人型へと戻る
「あー、そこの角生えたお兄さんと骸骨さん。ちょっとこっち来て」
「え、あ。はい、構いませんが・・・・・・」
「くっ、一体なんの用だ？」
少女二人の首輪については一旦おいといて、ちょっと離れたところへ二人を誘う

こうして、世界の壁を越えた魔王たちのファーストコンタクトはなったのであった。

検証と把握

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：リムル】

さて、と。あの子達から少し離れたあたりで俺は魔法による防音措置をとり、二人と向き合う。傍から見れば亜人と魔物にしか見えないが俺の予想が正しければ

「単刀直入に聞くけど君たちってもしかしなくても日本人？」

「何だと!?まさか貴様もか!?」

「まさかとは思いましたが・・・・・・貴方のその姿もアバターなんですか？」

やっぱりな。ていうかこんな状況で、あのネタで吹き出すっていったら日本人くらいなものだ。更に召喚者の二人が無反応であったという事実がこの結論に拍車をかける要因にもなった

「ああ、ちょっと話すと長くなる事情はあるが俺も日本人だ。まあ積もる話はあるだろうけど向こうも放置しとく訳にもいかないからな」

そう言って俺はとあるスキルを発動して二人に繋げる

『二人の前じゃ言えない事もあるだろうしこっちで話そうぜ』

「ぬおっ!?こいつ、まさか直接脳内に!?」
「これは・・・≪伝言(メッセージ)≫に似ていますがもしかして二人同時に話しかけてます?」
　そう、俺が使ったスキルは≪思念伝達≫。これは使用した相手に会話したり、自分のイメージを伝えたりと早い話が念話(テレパシー)なんだが、何かと便利な能力なのである。更に、≪思考加速≫という思考速度が一万倍にもなるスキルと併用する事で、単純計算で1秒で約１６０分程の会話を行えるのだ！
『ふむ・・・こんな感じか?まるでボイスチャットを思考化したようなスキルだな』
『ええ、≪伝言≫でも対象は一人でしたし、≪ユグドラシル≫にもこんなスキルはありませんでしたね』
『なに?≪ユグドラシル≫だと?なんだそれは?それにさっきから言っている≪伝言≫とは何だ?』
『え?≪ユグドラシル≫を知らない?』
　おや、同郷かと思っていたらなんだか齟齬があるな
『ふむ・・・・・・お互い認識に齟齬があるみたいだし一度整理するか』
　そして事情を聴いた結果だが
　まず角の生えた亜人。名前は『ディアヴロ』、本名『坂本　拓真』というらしく≪クロスレヴェリ≫というＭＭＯ―ＲＰＧで公式ラスボスや魔王などと呼ばれるほどの上位

プレイヤーだそうだ。本人曰く、いつものように向かってくるプレイヤーをのした後、眠って起きたらディアヴロの姿になっていたという。ちなみに坂本くんのしゃべり方がちょっと気になって、疲れないのかと聞いたところ

『ふん、我は魔王だぞ?これくらい造作もないわ!』

と、返された。まあそれでいいなら別にいいんだけども、もしかしてなりきりプレイヤーなのか?

次に骸骨の魔術師っぽい人。名前は『モモンガ』(名前顔負けじゃねぇかと突っ込んだのはおそらく必然だろう)、本名は『鈴木　悟』という。話を聞いているとどうやらかなり未来の日本から来たようで、ナノマシンを活用したバーチャルゲーム、ＤＭＭＯ―ＲＰＧ≪ユグドラシル≫というゲームのサービス最終日でそのゲームの最後を見送ろうとしたその深夜０時に、いきなりこの塔の上にそのアバターの姿で立っていたという。

要約するとこんな感じか。しかし、同じ日本でもこうも時間差があるのはどういうことなのか。しかもこの塔、坂本くんから聞いたらどうやら≪星降りの塔≫というらしいが、坂本くんのやっていた≪クロスレヴェリ≫と同じ建造物というのも気になる。そんな場所に別々の世界から集められた訳だが・・・・・・単なる偶然なのか?

ちなみに俺の事も話したよ。話した訳なんだが

『え!?その体ってアバターじゃなくて現実(リアル)のなんですか!?』

『しかも通り魔に刺されて死んだら転生してスライムになっただと!?』

うん、そうだよな。普通に驚くよね。俺、『リムル＝テンペスト』こと『三上　悟』は後輩の結婚相談で同行していたところを通り魔に刺されて死亡し、気づけばスライムに転生していたという訳だ。いろいろあったが今では一国の王様であり、魔王にまでなったんだから人生なにがあるかわかんないね！

『まあ、こんな体でもなれたら結構便利なんだ。大変な事もあったが、皆が頑張ってくれたおかげで国も安定してきたし』

『いいですね、そういうのは・・・・・・『アインズ・ウール・ゴウン』も最初のころは小さかったけど、皆時間を惜しんで大きくしていったんだよな。そう、皆で頑張って・・・・・・・』

ぬ、そういえば鈴木くんのやっていた≪ユグドラシル≫はサービス終了したんだったよな。そりゃ思い入れも強いか・・・・・・・

『嘆いてもしょうがなかろう。鈴木、いやモモンガよ。今重要なのは我々がなぜ喚ばれたのかだ』

お、坂本くん・・・・・・いや、ディアヴロくんナイス方向転換だ。俺の配下に同じような名前のやつがいるがこの際気にしないでおこう。鈴木くんの方もアバター名で呼んだ方がいいだろうな

『・・・ええ、そうですね。今は現状の把握から、ですね。そういえばエルフの子、名前は『シェラ・L・グリーンウッド』というらしいんですが、どうやら魔王を呼ぶつもりで召喚したと』

うぉい!?なんだそのピンポイントな指定は!?確かに外見じゃぁ二人はどう見ても魔王だが・・・・・・

『『グリーンウッド』？確かその名はどこかで聞いた事があるな・・・・・・こういうのは本人達から聞くに限るな』

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：ディアヴロ】

俺たちは一旦思念での会議を切り上げて、召喚者である豹人族の『レム・ガレウ』とエルフの『シェラ・L・グリーンウッド』の元へ戻る。念のため≪思念伝達≫のスキルはまだ繋げてもらっているのでいざとなったらフォローしてもらうつもりだ。もっとも、そんな雰囲気は欠片も出せませんけど！

「あ、戻ってきた！ねぇねぇ、なに話してたの？」

「ふん、そんな事はどうでもいい。それよりも、貴様らがなぜ俺たちを召喚したのか。その理由を聞かせてもらおうか？」

「……あなた達を召喚した理由、ですか」
　レムがそう言った後、彼女はその小さな手でぎゅっと胸元を押さえた。その姿は祈っているようで、痛切な表情だった
「……私の目的はこの世界の魔王、『クレブスクルム』を打倒すること。あなた達を召喚したのは、それを為すために力を貸して欲しいからです」
「……魔王『クレブスクルム』とは？」
「確か魔族たちが崇拝している魔王の名だったはずだ」
　そう、魔王『クレブスクルム』は公式最強の魔王。しかし、未だクレブスクルムが出てくるシナリオは公開されていないためどんな姿なのか、どれほどの強さなのかがわからない。一応、三年前に≪剣の魔王サンクディウス≫というのがラスボスとして登場し、それを倒すとクリア演出があった。しかし、サンクディウスは所詮〝魔王の欠片〟であるらしい。いずれ完全な魔王が復活するのではとプレイヤーの間で憶測が飛んでいるが、その完全な魔王がクレブスクルムなのかはわからない
「魔王を倒すのに魔王を召喚したのか・・・・・・それっていったいどんな当てつけだよ」
「そ、それは・・・・・・というか、貴方も魔王なのですか？」
「ああ、こんななりだがれっきとした魔王だよ。『リムル＝テンペスト』だ、ひとまずよろしく」

「私は『モモンガ』と言います。レムさん、その魔王『クレブスクルム』について何か「いったぁ!?」・・・え?」

モモンガがクレブスクルムについて何か知らないか質問しようとしたら、いつの間にかシェラがモモンガに近づいており、何やら手を痛そうにさすっている

「……貴様は一体何をしているのだ?」

「うぅ・・・・・ディアヴロには隷従の儀式が効かなかったけど、他の二人にはまだやってないからもしかしてと思ったんだけど、モモンガに触れようとしたらビリッて・・・・・・」

儀式魔法が俺に跳ね返されたのに懲りないのか・・・・・・それよりもモモンガの方にも何かスキルが常時発動しているのか?

「あー・・・おそらく私が持っている特殊能力のせいでしょう。えーと・・・・・・これでおそらく大丈夫です」

そういってモモンガはシェラの手を握ってみる。どうやら能力の解除には成功したらしく、痛がっている様子はなかった

「あー、痛かったー。それじゃあ気を取り直して「あ、それはお断りします」なんで!?」

シェラが再び隷従の儀式を試そうとしたがモモンガが拒否する。そりゃそうだよな。俺の場合はこの『魔王の指輪』による魔法反射があったからよかったものの、普通は隷

従なんでされたくないよな
「そ、それじゃあリムルちゃん・・・」
「俺も断る。というかちゃんはやめろ。れっきとした男だ俺は」
　リムルも拒否した。二回も拒否されるのはさすがに堪えたのかシェラが項垂れる。そして最後の希望にすがるがごとく俺の方に寄って来て今着ている装備である『漆黒の虚』という黒い服の袖を引っ張る
「ね？ね？ディアヴロは私が召喚したんだから一緒に来てくれるよね？ディアヴロがいてくれたら晴れて召喚士として冒険者登録できるんだから！」
　やめてください。そんな涙流しながら上目遣いで懇願なんてされたら断りづらくなるんですけどぉ!?
　いや、それよりも
「ちょっと待て、今貴様は召喚士として冒険者登録できるといったがここでは召喚士は憧れるような存在なのか？」
　そう、クロスレヴェリにおいて≪召喚士≫とは言うなれば不遇職である。俺たちガチ勢からすれば「ペットが欲しいなら別のゲームをしろ」と揶揄されるくらいに弱いとされていた。だが
「召喚士だよ!?魔術師って言ったら召喚士に決まってるじゃん！」

「元素魔術はどうなっているのだ?元素魔術こそが至高ではないのか?」
「……元素魔術、ですか?そうですね、拳くらいの火球を放つとか転ばせるくらいの突風を吹かせるとかその程度ですが」
「なん・・・だと・・・!?」
なんということだ・・・・・・俺が多くの時間と熱意を注いで鍛え上げた職業がまさかの不遇職だと・・・・・・・!?
軽くショックを受けてしまいそうになったが、魔王はこの程度で落ち込まない！
しかし、そうなってくると浮かび上がる疑問がある
そう、今の俺はどのくらいの強さなのか。こうなれば試すしかあるまい
『リムルよ、今の俺はどの程度の強さなのか試す必要が出てきた。少し外に出てくるぞ』
『あ、それなら俺も一緒にいいですか?≪ユグドラシル≫の魔法がどれほど通用するのか確認したいですし、お互いの強さの程度は把握しておいた方がいいでしょう』
『ふむ、確かに把握しといた方がいいな。丁度いいから俺もこの二人の首輪が外れないか調べておくよ』
リムルはどうやら隷従の首輪の解除について調べてくれるようだ。流石に俺たちより異世界に長くいただけあって頼りになる
「貴様ら、このあたりにモンスターはいるか?」

「もう!さっきから〝貴様ら〟ってやめてよね!?あたしには『シェラ・L・グリーンウッド』って名前があるんだから!」
「ふん、今のところは〝貴様ら〟で十分だ。あまり無駄話をして俺を怒らせるな」
「うぅ・・・・・・わかったわよ」
　二人に断られたのをまだ引きずっているのか、俺の魔王ロールプレイを怖がっているのかはわからないが潔く引き下がってくれた。しかし、いずれは力を証明しなければならない時が来るだろう。早めに能力の確認をしなければ
「それで、モンスターはいるのか?」
「……たまに森から追い出されたモンスターがいる程度です・・・・・・街の近くよりかは多いですけど」
　よかった、外に出ていきなり戦闘とか能力を把握していない現状では避けたかったところだ
「ふん、モンスターはいないのか・・・・・・退屈な場所だな・・・・・・まあいい、適当な岩があればそれで試すとしよう」
　そう言って俺は階段を目指して歩き出した
「ちょっと、勝手にいかないでよ!あんたはあたしの召喚獣でしょ!?」
「……あなたの召喚獣ではありません」

「まあまあ、あっちは置いといて、さっきも言った通りその首輪を調べて、解除できそうならしてあげるから」
後ろで騒ぐ二人をリムルがなだめてとどまらせる。
「私も一緒に行きましょう。召喚された事で私の能力に何か変化がないか確認しておきたいですし」
そして俺の後を追うようにモモンガもついてきた。うん、≪思念加速≫便利だわ。ここまでの流れを時間をかけずに打ち合わせできるのは正直助かった
さて、うまく魔法が発動できるかな・・・・・・

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：リムル】
「うー・・・・・・隷従の儀式も済んでないのに勝手に行動して・・・・・・・」
「……さも貴方が召喚したように言わないでください」
「あーはいはい、その話はもういいだろ。じっとしててくれ」
全く、どっちが召喚したとかそんなに重要なことかね。まあ隷従する気はさらさらないけど
ディアヴロとモモンガが外に出た後、俺はシェラとレムの首輪の解除法を探るためシ

エル先生に解析をしてもらっているわけだが・・・・・・うん、シエル先生に頼らなくてもわかるわ。言うなれば〝絡まった極細の糸〟のような状態と言えばお分かりだろうか

魔法を反射された影響なのか、普通の儀式魔法と違う形でかかったのかは定かではないが、果ての見えない部屋にとてつもなく長い糸が絡みに絡みまくってそれを明かりのない暗闇の中で解きほぐさなきゃいけないといえばどれだけ困難かわかってもらえるはずだ。それほどにこの首輪を解くのは困難を極める

なおここに至るまでに

≪私としてはこのままでもいいと思います。仮にもマスターを隷従させようとした罰と思えばいいのです≫

いやいや、シエル先生。確かにそうなんだけど一応うちの国にもエルフがいるわけでしてね

と、こんな感じでシエル先生がへそを曲げて俺がそれをなだめて何とか解析してもらえるようにこぎつけて、やっとの事で判明したわけである

なお外に出た二人に関しては≪思念伝達≫を繋げたままにしており、何かあれば即座に向かう手筈になっている

「うーん・・・・・・思ったよりも複雑で解除が難しそうだな・・・・・・」

シエル先生なら一晩でやってくれそうだけど

「そんなー・・・・・・」

「……知らなかったとはいえ、ディアヴロに魔法反射という能力があったとは・・・・・・完全に想定外でした」

「そういえばさ、レムはクレブスクルムを倒したがってたみたいだがどうしてなんだ？誰かに頼まれたとか」

そう、先ほどから疑問に思っていたのだ。ディアヴロがいうには魔王『クレブスクルム』はこの世界において最強の名を持つ魔王。そんな存在を、一介の召喚士が倒そうとする理由は何なのか。ただ単に名声や金が欲しいとか、そういった俗物的な理由も考えられるがわざわざ同じ魔王を召喚してまでなそうとする事ではないはずだ。おそらく何か人には言えない何かを隠していると思うが・・・・・・

「それは・・・・・・私は個人的な理由で強さを常に示し続けなければならかったので、今回の召喚であなた達魔王を召喚したのです」

「ちょっと！召喚したのはあたしだっていってるでしょ!?」

「……全く、理解力がなく人の話を聞かない。これだからエルフは・・・・・・・・」

あーもう、これで何回目だよ。飽きないね君たちは

しかし、〝個人的な理由〟ねぇ。おそらくそれが隠してる何かだと思うが・・・・・・

向こうから話す気がない以上、聞き出そうとするなら力づくかはたまた脅すかでもしないと無理そうだな
それはそうとシエル先生の解析の方はどうなったのかな、と
≪それなのですがマスター。レムの事で少々気になることが≫
おや、何か異常でもあったのか？そう思って詳しい内容を聞こうとしたのだが

突如として大きな爆発音が響き渡り、塔が揺れる
「きゃっ!?」
「何事です!?」
二人が突然の事に驚き、身構える。ていうか何が起きた!?
≪どうやらディアヴロとモモンガが魔法の試し打ちをしているようです≫
ちょっ!?魔法を試すって言ってたけど一体どんな魔法使ってんだ!?
俺は即座に≪思念伝達≫で二人に問いただす
『うぉい!?一体何やってんの君たち!?』
『ああ、リムルさん。いえ、ディアヴロさんと少々模擬戦をしてまして』
『うむ！≪ユグドラシル≫とやらの召喚獣もなかなかやるではないか！』

いやいやいや!?さっきから塔揺れまくってるんだけど、一体何と戦っているんだ君らは!?

先ほどから鳴りやまない轟音にいてもたってもいられなかったのか、こちらが説明する前にレムとシェラは立ち上がり階段へと向かっていく

「あ、ちょっと!?」

「ディアヴロ達が外で何かに襲われているのかもしれません！急いで向かわないと！」

「まだ隷従の儀式も終わってないのに倒されちゃったりしたらたまんないよ！」

止める前に行っちゃったよ。仕方ない、俺も様子を見に行くとするか

そう思いながら二人の後を追い、星降りの塔の外へと出ていく

すると・・・・・・

「フハハハハッ！召喚獣は雑魚と決めつけていたがなかなか強いではないか！≪エクスプロージョン≫!!」

「あまりなめてかかると痛い目にあいますよ？行け！≪根源の火精霊（プライマル・ファイヤー・エレメンタル）≫!!」

うん、今何が起きているかというと、恐らくモモンガが召喚したであろう巨大な火の精霊と不適な笑みを浮かべているディアヴロがどう見てもガチンコバトルを繰り広げている。おそらくどっちも本気でやっているというより未知の体験にテンション高くなって遊んでいるという感じだろうか。雰囲気的にそんな気がする。あ、今度は氷系の

魔法かな？火の精霊が凍り付いてる

この光景をレムとシェラも一緒に見ているわけだが、うん。見事に開いた口がふさがってない

・・・・・・ていうか、君たち

「やりすぎだバカタレェ!!」

俺の怒号とともに諸悪の根源たる二人にハリセンをお見舞いするのであった

反省とこれから

◇◆◇

時は少し遡り・・・・・・・

【ｓｉｄｅ：モモンガ】

俺とディアヴロさんは己の実力がどれ程のものか把握するため、レムさん達をリムルさんに任せて星降りの塔降りる。石造りの階段を下りて外へ出ると、西側にはうっそうと生い茂る森が、東側にはどこまでも続く草原が広がっていた。

俺がいた現実（リアル）の日本では、進みすぎた環境汚染によって自然が失われてしまっている。それこそ、人工心肺を付けなければろくに呼吸もできないほどに、汚れてしまっている

その自然が、今目の前に広がっている。誰の手も加わってない、ありのままの自然がそこにある。かつてのギルドメンバーの一人はこのありのままの自然に思いをはせて、拠点内の内装にこだわったものだ

「（ブループラネットさんが見たら、きっと大喜びするだろうな）」

塔の上からも感じていた日差しの暖かさ、肌をなでるようにこそばゆい風の心地よ

さ、そしてその風に乗って香る木々のにおい、どれも仮想世界では再現できないような質感に、この目の前の光景が〝ゲーム〟なんかじゃなく〝現実〟である事を改めて実感させられる

「ふむ、風景は俺の記憶通りのようだな・・・・・・モンスターも周囲にいないようだし、さっそく試すとしよう」

「……っと、そうですね。そういえば、ディアヴロさんのレベルって≪クロスレヴェリ≫ではいくつだったんですか？」

「うむ、≪クロスレヴェリ≫では最大レベル１５０まで上がり、俺のレベルもその域まで達している」

　なんと、≪ユグドラシル≫よりも高いな・・・・・・これは思ってたよりも強さに差がありそうだな

「≪ユグドラシル≫では最大レベル１００だったんですが、この様子だと俺の強さもそこまで高くなさそうですね・・・・・・」

「それは少し早計かもしれんぞ？そもそも仕様が違うのだ。≪クロスレヴェリ≫の最大レベルが高いからと言って、≪ユグドラシル≫がそれより弱いとも限らん」

　なるほど、それは一理あるかもしれない。レベルとプレイヤースキルがかみ合ってな

いなんてよく見る光景だ。もしかしたら≪ユグドラシル≫のレベル１００＝≪クロスレヴェリ≫のレベル１５０なんてこともあり得るのか
「ふむ・・・・・・これは慎重に検証しなければなりませんね」
「ああ、まずは適当な的で試すとしよう」
　ディアヴロさんがそう言って、適当な大きさの岩の前に立って短杖を構えた。静かに岩を見据えて少し間を置いてから、魔法を唱える
「≪エクスプロージョン≫!!」
　その言葉とともに目標となっていた岩が爆発を起こし、砕け散る。その際、砕けた破片がいくつかディアヴロに向かって散弾のように飛び散る。かなりの速度で飛んでいたため、当たればただでは済まないはずなのだが、そこはレベル１５０の上位プレイヤー。装備の防御力もあるのだろうが、当たっても微動だにせず何事もないかのように無傷だ
「ふむ、こんなものか」
「流石ですね。≪ユグドラシル≫にも同じような名前の魔法がありますが、これはどのくらいの強さの魔法なんですか?」
「うむ、大体レベル５０程で覚えるものだ。≪ユグドラシル≫での魔法の強さはどうなっている?」

「《ユグドラシル》では位階と呼ばれるランク分けがされていて1から１０までありますが。更にその上に『超位魔法』と呼ばれる、魔法というよりスキルのような仕様のものがありますがこれは戦略級の威力がありますので今回は使いません」

《ユグドラシル》の魔法は超位魔法も含めて６０００を超える数があり、通常のレベル１００プレイヤーが使える魔法の数が３００までとなっているため、しっかり方針を決めて取らないといわゆる〝クソビルド〟となって、弱いキャラとなってしまう。だが、俺は課金により使える魔法を増やしており、その数７１８。

先ほど、ディアヴロさんに魔法を使った時やシェラさんが受けた特殊能力《負の接触（ネガティブタッチ）》を解除した時と同様、ゲームの時ならアイコンをクリックすればいいのだがそんなものはない。だが、アイコンがそこにあるかのように意識をすれば、その効果範囲がどの程度あるのか、魔法であれば次の発動にかかる時間も手に取るように把握できたのだ

「あれと同じ名前の魔法が第8位階にありますので、一度やってみますね」

そう告げて、ディアヴロさんが的にした岩と大体同じ大きさのものを選び、召喚された時に一緒に持ってきてしまったギルド武器《スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン》を構えて魔法を唱える

「《爆裂（エクスプロージョン）》」

唱えた瞬間、ディアヴロさんの《エクスプロージョン》と同じように岩が爆発し、砕

け散る。見た目は同じように見えるが、何となく威力はディアヴロさんの方が大きかったような気がする。ギルド武器で多少ステータスにブーストがかかっているといっても、そこは彼とのステータスによる差なのだろう

「ほう、なかなかの威力だな。それにその杖もなかなかレア度が高そうな一品ではないか」

「フフフ、分かりますか?そう、これが我がギルド≪アインズ・ウール・ゴウン≫の象徴ともいえる至高の武器。七つの蛇が咥える宝石はいずれも神器級(ゴッズ)という最上級レア度を誇るアーティファクト。シリーズアイテムであるために、全てをそろえることによってより強大な力が引き出されています。これらを全て集めるには多大な労力と莫大な時間を費やさなければなりませんでした・・・・・あの時はギルドメンバーの間でも諦めようなんて意見も結構あったほどで、どれほどドロップするモンスターを狩りまくった事か・・・・・・はっ」

しまった。ギルメンの努力と熱意の結晶であるこのスタッフを褒められてつい語ってしまった。ディアヴロさんが少し苦笑いしてる

「う、うむ。≪ユグドラシル≫では自作で武器を作れるほどに自由度が高いようだな。この俺の装備もかなり希少なアイテムだが、その杖と比べると霞んで見えるな」

「ハハハ・・・・・・ありがとうございます。と、そうだ。ちょっと軽く模擬戦でもやっ

てみませんか？」
　俺は杖を掲げてある魔法を唱える
「≪月光の狼の召喚（サモン・ムーン・ウルフ）≫」
　ギルド武器≪スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン≫にはめ込まれている宝石の一つ、神器級アーティファクト『月の宝玉』に込められた召喚魔法を発動する。空中からにじみ出るように三体のシベリアオオカミに酷似しているモンスターが現れた
「ほう、その杖には召喚獣が封印されているのか」
「ええ、他にもありますがまずは肩慣らしにどうですか？≪ユグドラシル≫のレベルで２０ほどなので軽い運動には丁度いいと思います」
「うむ、この体でどれくらい動けるかも見ておきたかったからな。これならば丁度良い」
　こうして模擬戦が始まったのであった。結果としては、流石上位プレイヤーと言ったところで、動きに無駄がなく、三体に襲い掛かられていたにも関わらず的確に避けてはカウンターで魔法を当てていた。レベル２０じゃぁ相手にもならないな
「フッ、これくらいどうという事はない。もう少し骨のある相手はいないか？」
「ふむ・・・・・この様子だと半端なのじゃ相手にもなりそうにないですね・・・・・・これなんてどうです？」
　そして、スタッフに込められている魔法の一つを発動する

「≪根源の火精霊召喚(サモン・プライマル・ファイヤーエレメンタル)≫」

発動と同時に突きつけたスタッフの先から巨大な光球が生じ、それを中心に桁外れな炎の渦が巻き起こる。巻き起こった渦は加速度的に膨れ上がり、直径四メートル、高さ六メートルにまで大きくなる。やがて周囲の空気を食らい大きくなった炎の竜巻が融解した鉄のような輝きを放ちながら人の形をとる

「ほう?≪炎の精霊(イフリート)≫・・・・・いや、そのさらに上位の精霊か。≪クロスレヴェリ≫では見たことがないな」

「ええ、≪ユグドラシル≫基準でレベル８０といったところです。やってみますか?」

「愚問だな。魔王に〝逃走〟の二文字はない!」

「いいでしょう、≪根源の火精霊≫よ!ディアヴロを攻撃せよ!!」

その命令を合図に模擬戦二戦目が開始された

――――――――――――――――――――――――で、今どうしているかと言うと

「で、何か言うことは?」

「「調子にのってやりすぎて申し訳ありませんでした」」

ハリセンを肩に担いだリムルさんの前にディアヴロと一緒に正座させられています

ていうかそのハリセンめちゃくちゃ痛いんですけど!?≪上位物理無効≫の

常時発動型特殊技能(パッシブスキル)貫通するとかどんな素材でできてるんだ・・・・・・・

「全く、人の気配は今のところないからよかったものの、モモンガくんのその姿見られたらモンスターと間違われて襲われてた可能性もあったんだからな」

　あ、そうか。今の俺は死の超越者(オーバーロード)で見た目凶悪な骸骨だもんな。街に行くことにもなるだろうし何か対策を考えないと

「ねぇねぇ!?あの召喚獣ってモモンガが出したんだよね!?モモンガって召喚士だったの!?それにディアヴロの魔法もすごかった！」

「・・・・・確かにディアヴロの使っていた元素魔術も気になります。私の知る限りでは元素魔術にあれほどの威力はなかったはずです」

「フッ、何を今更驚いている。我は魔王『ディアヴロ』だ「はいはい、そこ。まだ説教中だぞ」う、うむ」

　二人から賞賛を受けてテンションが高くなったディアヴロさんだったがリムルさんに一喝されて黙る

　二人の反応を見るに、この世界の魔法詠唱者(マジック・キャスター)は本当に不遇なんだな・・・・・・これは派手な魔法も控えた方がいいのかもしれない

『それで、検証の結果はどうなったんだ?』

　リムルさんが≪思念伝達≫を使って検証の結果を聞いてきた

『それなんですが、どうやら≪クロスレヴェリ≫の方が≪ユグドラシル≫よりも上限レベルが高いみたいです。向こうが上限レベル１５０に対してこちらが上限レベル１００と数値による差が大きいですね』

『だが、お互いに似たような魔法を使った結果、威力にそこまで差はなかったように思える。数字で強さを測るのは早計かもしれんぞ』

『あー、それはあり得るかもな。やってたゲームがそもそも違うわけだし、そのあたりはまた検証しないとだめだな』

リムルさんも俺たちの意見に同意してくれている。この件に関してはもう少しデータを集めなければならない。いつか、俺たちよりも強いモンスターや人間、もしかしたら俺たちの他にもいるかもしれない≪クロスレヴェリ≫や≪ユグドラシル≫のプレイヤーに遭遇する可能性もあり得る。俺たちと同じように召喚されたプレイヤーがいるのかもしれないのだから

「そういえば、二人の首輪の方はどうなったんですか？」

「あーそれなんだけど、どうも普通じゃないかかり方をしたのが原因なのか解除するのが難しそうなんだ」

どうやら、そちらの方もかなり難儀な事になっているようだ。俺たちよりも魔法に詳しいであろうリムルさんがこうなのだからお手上げである

残りの検証はこれから進めていくとして、これからどうしたものか。一応、レムさんに『魔王≪クレブスクルム≫を打倒して欲しい』と頼まれた訳だが、はっきり言ってこちらにメリットと呼べるものが全くない。アバターの姿と能力を持ったまま召喚されたからといって、最強と言われる魔王と何の報酬もなしに挑めなど、虫がいいにもほどがある。

それに寝泊りするところもまだ見つけていない。このままでは野宿する事になるだろう。特殊技能によって睡眠や飲食の必要がない俺と違って、リムルさんやディアヴロさんはそうもいかない

そんな風に今後の事に頭を悩ませていると、シェラさんがこちらのローブの袖を引っ張っていた

「ねっねっ！早く街へ行って冒険者登録しようよ！二人がいればあたしもようやく憧れの召喚士として登録できるんだから！」

……未だに俺たちの事を召喚獣か何かだと思ってるのか、この子は・・・・・・ってちょっと待った

「シェラさん、街と言いましたがもしかして近い場所に街があるのですか？」

「うん、あるよ。ここから三時間くらい歩いたところに『ウルグ橋砦（きょうさい）』っていう城砦があって、その先に『ファルトラ』の街があるの」

ふむ、思ったよりも近くに街があったようでよかった。でも城砦かぁ・・・絶対この体見られたらひと悶着あるよなぁ。うーん、手持ちのアイテムに何かなかったかな・・・・・・

恐らく≪ユグドラシル≫のアイテムボックスも、魔法と同じように意識すれば使えると思い手を伸ばすと何もないはずの空間に伸ばした手がずぶずぶと沈んでいく。リムルさんやディアヴロさんが興味深く眺め、シェラさんとレムさんが驚愕に顔を染めている。そしてしばらく探っているとちょうどいいアイテムを探り当てた。

一つは≪イルアン・グライベル≫、ギルメンが遊びで作った装備で筋力が上昇するくらいしか効果のない無骨な小手だ。

そしてもう一つは・・・・・頭をすっぽり覆う仮面で、まるで怒っているような、もしくは泣いているようにも見える形容しがたい表情をした、とある日にログインしたプレイヤーに問答無用で手に入ってしまうある意味呪いのマスク、≪嫉妬するものたちのマスク≫。通称≪嫉妬マスク≫を取り出した

「……そのマスクと小手は一体・・・・・それに何もない空間に沈んだ手も気になります」

「これはアイテムボックスといって、まあ私にしか使えない倉庫のようなものと思ってください。この装備は私の顔と腕を隠すためのものです。見た目、モンスターですから

不要な争いは避けませんと」
　そういって取り出したアイテムを装備して、開いた胸元から見えている肋骨を隠す
「・・・・・・おっかないリッチから怪しい魔法使いにジョブチェンジしたな」
「リムルさん、そこは突っ込まないでください」
　俺も思ったことですが言わないでください
「そういえばリムルちゃんも二人みたいにすごい魔法とか使えるの？」
「だからちゃんはやめろって!?まあできないこともないよ、うん」
　そう言って、リムルさんは近くにあった適当な岩に向かって氷の槍を放った。放った槍は岩に深く突き刺さる。って、リムルさん詠唱してませんでしたけどまさか・・・・・・
「……うーん、二人に比べて地味かなぁ」
「……ちょっと待ってください。リムルさん、詠唱したようには見えませんでしけど今使ったのは魔法ではないのですか？」
「ああ、よく見てるな。今放ったのは御覧の通り魔法で、俺はそれを無詠唱で撃ったんだ」
「無詠唱・・・・・・・!?そんなものがあるのですか」
　やはり無詠唱化してたのか。≪ユグドラシル≫にも遅延（ディレイ）などと言った特殊技能はあるがあそこまで自然にできるのは流石といったところですね

「まあ聞きたい事は山ほどあるだろうけど、街が近くにあるなら日が暮れる前に宿取ろうぜ」
「うむ、俺も野宿はできることなら避けたい。そうと決まれば行くぞ」
ディアヴロさんが先頭に立って歩き出す。≪ユグドラシル≫とは違う異世界の街か・・・・・・一体どんなところなんだろうな

◆◇◆

【とある三大魔王の思念会議その1】
『実はこのマスク・・・・・・クリスマスイヴに≪ユグドラシル≫にログインしたプレイヤーに強制的に配布されるアイテムでして・・・・・・・』
『クリスマス・・・・・・あっ』
『『・・・・・・・・・・・・（；ω；）ブワッ』』
この時、三人の絆が少し深まったそうな

城塞都市ファルトラ

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：リムル】

岩の転がる丘陵地帯をしばらく進むと、南北を流れる大きな川と石でできた丈夫そうな橋が見えてくる。その先に見える城門のような砦、あれが『ウルグ橋砦』のようだ。もうすぐ空が夕焼けになりそうだったので、間に合ってよかった

ちなみに、ここまでの道中でモンスターたちに襲われた。ディアヴロくんがいうにはこのあたりのモンスターのレベルは６０程でそこまで強くないらしい。もののついでに検証の続きということで戦闘を二人に任せてみた

その結果だが

「≪エクスプロージョン≫!!」

襲い来るモンスター達を尽くディアヴロくんが魔法一発で蹴散らしていき

「行け！≪死の騎士（デス・ナイト）≫よ!!」

モモンガくんは召喚した禍々しい骸骨騎士で蹂躙していった（なおこいつの剣で倒されたモンスターはアンデット化するそうなので二次被害を防ぐために俺が全部焼却処

分していった）

流石、廃課金プレイヤーと言ったところでこの近辺のモンスター達では相手にもならなかった

ちなみにモモンガくんが死の騎士を召喚した時、シェラが怯えて抱き着いてきたのはここだけの話。うちの第一秘書並みで大変柔らかかった

「やっと一息つけるな。あ、モモンガくん。召喚したやつはちゃんと消しておけよ」

「既に帰還させてありますよ。リムルさんの忠告も合わせて抜かりありません」

流石モモンガくん、慎重派なだけあって準備がよろしい。

そう、モモンガくんの仮面と小手の変装はどう見ても怪しいの一言で、当然砦に駐屯している兵士達が咎めないはずがないのだ。いざ見せろなんて言われたら間違いなく面倒な事になる。そこで、モモンガくんに一つ策を与えたのだ。もし見破られても俺がフォローする事になっている

よし、いざ行かん。異世界最初の街！

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：モモンガ】

重厚な石の橋を渡り、砦の前までたどり着く。もうすぐ日が暮れるせいか、俺たちと

目の前にいる兵士達以外の人通りはない。絡まれる心配がなくてよかったと思うべきか。そう思いながら砦を通ろうとすると
「そこのお前たち！止まれ！」
『予想通り、止められましたね』
『よしよし、まずは第一関門』
　リムルさんの≪思念伝達≫で打ち合わせをしながら、予想される事態に身構える
　だが
「なんだ、貴様は？このディアヴロを呼び止めるとは、相応の覚悟があるのだろうな？」
　ディアヴロさんが呼び止めた兵士を威圧しながら口を開いた
『『うぉい!?なにやってんのアンタ!?』』
『ぬおっ!?呼び止められたから受け答えしたつもりだったのだがまずかったか？』
　思いっきり威圧してるじゃないですか!?ああほら砦から兵士達が何事かとちらほら出てきてるじゃないか！
「い、いや、我々はファルトラに向かう者の行き来をチェックしているのだが・・・・・君たちの姿は見たことがなくてな。失礼だが身分や目的を教えてくれないか？」
　よ、よかった。明らかにディアヴロさんに気圧されてはいるが、対応は冷静にしてくれている。一時はどうなることかと思ったが、どうにか穏便に済みそうだ

「えっと、私たちは「彼らは・・・・・・わたしの召喚獣のようなものです・・・・・・事情は複雑ですが」」
「違うってば！あたしが召喚したの！」
　兵士の人に事情を説明しようとしたらレムさんとシェラさんが横から声を上げた。不意にレムさんの方を見ると、ディアヴロさんのマントに首から下を隠すように頭だけを出して兵士の方を見ていた。反対側にシェラさんも同じような体制で頭を出している。いや何してるの君たち・・・・・・
「レムさんと・・・・・・エルフのシェラさんでしたか。しかし、人型の召喚獣なんて見たことも聞いたこともありません。しかも、しゃべってますよ？」
　おや、どうやらこの兵士と二人は知り合いのようだ。というかいい加減俺たちの事を召喚獣っていうのやめてほしいんだけど・・・・・・俺だって人型の召喚獣なんて見たこともないよ。まあ、俺は骸骨でリムルさんに至ってはスライムだから一概に人型とはいいがたいけども
「……わたしの力であれば、これまでにあり得なかった召喚獣であろうが呼び出せます。まさか、わたしの力を疑っているのですか？」
　レムさん。威圧してるようですけど、そのネコミミをピコピコさせながら頭だけ出している今の姿は怯えている子猫のようで威厳なんてこれっぽっちもないです。むしろ

可愛いです
「い、いえ、レムさんの力を疑っているわけではないのですが！しかし、その・・・・・・召喚獣に必要な首輪もついてないようですし・・・・・・」
　レムさんの威圧（？）に戸惑っている兵士が俺たちの首を見やる。そういえば隷従の儀式はディアヴロさんが反射して今は二人の首についたままだったな
「首輪か？首輪ならここにあるだろう」
　ディアヴロさんがマントに隠れている二人の首根っこを掴んだようで、そのまま持ち上げて兵士に首輪の所在を見せる
「……なっ!?」
「ちょっ、やめてやめて!?」
「え、ええ!?」
　どうやら兵士の方も予想外のようで戸惑った声を上げる
「あ、あれ!?普通は召喚された召喚獣が首輪を・・・・・・・ええ!?人族に・・・・・・・ええ!?」
「ふん、俺をそこらの召喚獣などと一緒にするな。不愉快だ。これ以上、俺の機嫌を損ねるようであれば――――」
「……通してください」

「まだなんかあるの!?」
「す、すみませんでした!お気をつけて!」
　ディアヴロさんは威圧を、レムさんとシェラさんは抗議でもって、ほとんど強引に近い形で砦を通っていた。兵士の人は困惑しながら三人の後ろ姿を見送っている
「あのー・・・・・・俺たちも通っていい?」
「あ、は、はい!え、えっと・・・・・お二人もレムさんが召喚した召喚獣・・・・・・なのでしょうか?」
「あー・・・・・・まあそういうことにしといて」
　リムルさんが気まずそうに答える。そりゃ自分から召喚獣ですなんていいたくもないよな
「そ、そうですか。あ、そこの仮面の人。すみませんがその仮面を取って、顔を見せてくれませんか。念の為、指名手配されている犯罪者なのか確認させてください」
　きた。今度こそリムルさんとの打ち合わせ通りに・・・・・・
「えっと、見せないといけませんか?」
「はい」
　兵士の返答に、逡巡するようなしぐさでもって俺はそのマスクを外した。マスクの下には黒髪の、いかにも日本人といえる風貌の中年の顔があった

「……はい、いいですよ。その仮面は道中もつけられてたのですか？」
　兵士が確認したのを見て、再びマスクをつけなおす
「ええ、この仮面には魔力を増やす特殊効果が付与されていて、道中襲ってくるモンスターを対処するためずっとつけてたんですよ」
「なるほど。ですが、街中ではその仮面を外す事をお勧めしますよ。見るからに怪しいですし」
「あー、すまん。こいつちょっと恥ずかしがり屋でね。仮面なしだとうまく話せないんだ。もめごとは極力避けるよう努めるから」
　そう、リムルさんがくれた策とはこの素顔に幻術を被せて人間っぽくみせようといったものだった。先ほどの受け答えも予想していたもので、マスクを常時つける理由も別段おかしくないような内容にとどめ、周囲の者たちに納得してもらう算段だ。幻術が看破される恐れもあったが、その辺はリムルさんが何かしらの探知をしていたらしい。そして、そういった輩はいないとのことで、この作戦を実行したのだ
　もっとも、ディアヴロさんがいきなり威圧してくれたから危うく狂いそうになったけども！
「それは・・・・・大変だったでしょうね。わかりました、どうぞお通りください」
　兵士の許可も得て、やっとの事砦を通る事ができた。しかし、途中ですれ違った兵士

や通行人達が皆、先にいった三人の方を驚愕の表情で見ているのが気にかかる

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：リムル】

砦でひと悶着あったものの、なんとか砦を超えた俺とモモンガは先に進んだ三人と合流しつつ、ファルトラの街にかかる跳ね橋へと歩いていく。ディアヴロから聞いた話では、街を囲う外壁は八角形をしており、その角には魔族に関わる存在やその攻撃を遮断する結界を形成する塔が建っているらしい。それを聞いて、俺とモモンガは入れないかもと思ったが、すんなりと入れた。割とガバガバなんじゃ、この結界。まあ俺たちが異世界から来たということでこちらの魔族にカウントされてないのかもしれないが

門の前につく頃には夕刻になっており、歩いてきた草原が夕陽に照らされ、まるで燃えているかのように彩られる。美しい景色だった。モモンガくんも感動しているのかその光景をまじまじと見つめている

跳ね橋を渡り、街の門の前に兵士が六人立っているのが見えた。レムとシェラは先ほどのように、今度は服の首元を引っ張り上げたり、手で覆ったりして首輪を隠しながら通っていく。そのかいがあったのか、兵士に呼び止められる事はなかった。しかし、召喚獣用の首輪が自身についた程度でどうしてそこまで隠したがるのか。まあレムはベ

テラン召喚士みたいだから失敗を恥ずかしがっているのだろうけど、何か引っかかる
そして街へ入ると、大勢の人でごった返していた。道行きからして、歩くのも困難だなこりゃ。
道行く人を見てみると、ヒトやエルフ、獣人と様々な人たちが簡素な服や鎧を着こみ、武器や革袋をもって思い思いに歩いたり話し合ったりしている
うんうん、まさに異世界だな。俺の国である『テンペスト』でも様々な種族が行き交っていたが、流石にホブゴブリンやオークなんて魔物はいないだろうな
『建物は石造りですか・・・・・・文明レベルは中世くらいといったところですね』
『ザ・異世界って雰囲気出てていいだろ?』
『うむ、風情があっていいではないか。しかし、人混みはどうも好かん。早めに宿を探すとしよう』
確かにもう夕刻、この雰囲気に見とれて宿が取れませんでしたじゃ話にならない。
と、そんな事を考えていると横に並んでいたレムが首元を気にしながら、恥ずかしそうに頬を染めて話しかける
「・・・・・・あ、あの」
「ん?どうしたんだ、レム」
「・・・・・・宿屋に行きたいのですが」

「ああ。俺もそう思ってたところだ。早く行こう」
レムに促され、宿屋を探そうと歩き出した。その時だ、こちらを見ていたであろう通行人のある会話を耳にする
「なあ、あれってレムさんと、あのエルフの子だよな？なんで首輪つけてるんだ？」
また首輪の話か・・・・・・隷従の儀式が跳ね返されたという前例のない事態だったとは言え、そこまで気にする事なのか・・・・・・って、まてよ？
俺はふと、とある可能性に思い至る。『首輪』、『隷従』・・・・・・まさか
『モモンガくん、ディアヴロくん。ちょっといいか？』
『え？どうしたんですか一体』
『どうにもいやーな予感がしてきてな・・・・・・ディアヴロくん、一つ確認したい事がある』
『む？なんだ？』
≪思念伝達≫を通じて俺はディアヴロに二人につけられた首輪に立てたある『予想』を述べる
『隷従の儀式ってさ、もしかして召喚獣だけじゃなくって人間にも使われてたりするのかな？』
『なに？そんな設定に覚えは・・・・・・はっ!?』

『・・・・・・すみません、俺もなんだかこの先が読めた気がします』
　俺たち三人は再び周囲の会話を意識して聞き取る
「あの二人って召喚士じゃなかったっけ？」
「でも、あの隷従の首輪をつけてないか？あれって召喚獣の方がつけるっていう・・・・・」
「いや、召喚獣だけじゃなく奴隷もつけてるけど」
「ってことは、あの三人の奴隷になったのか!?あの二人が!?」
『『ア、アウトーーーーーーー!?』』
　そうだよ!?隷従の時点で気づくべきだったんだよ!?これどう見ても奴隷にするための儀式じゃねぇか!?
『や、やばいですよこれ!?砦の方でも名前で呼ばれるくらいにレムさんって有名な召喚士のはずですよね!?そんな人を奴隷にしたなんて・・・・・・あ、あれ？なんかスゥーッて落ち着いてきた』
『落ち着いとる場合かぁ!?い、いやここは冷静になるべきか。くそっ、早急に気づくべきだったんだよ!?そしたらここに来るまでにマフラーとか用意してたものを!?』
　ま、まだだ。まだ傷は浅い、早急に首輪を外せばまだ間に合う！
　そう思った矢先、こんな会話が聞こえてくる
「あのレム様を奴隷にするなんて・・・・・・なんかやばい奴じゃねぇか？一応、魔術師

協会に報せた方がいいかもな」
「俺、聞いたんだけどよ、あっちのエルフの子もすごい家の出身らしいぜ?」
「たしかに・・・・・・普通のエルフじゃないよな。そんな二人を奴隷にするとか、やっぱり、何かあるよな・・・・・・・?」
　え、ちょっと待って。レムだけじゃなくシェラの方にもなんかあるの?
『はっ!?思い出した!!』
『な、何かわかったんですか!?』
　ディアヴロくんが何か思い出したようだ。絶対にろくなことじゃないだろこれは・・・・・・
『グリーンウッド、どこかで聞いたと思ったらエルフの国家がある森の名称だ!そして、この世界においてグリーンウッドはエルフの王族の姓でもある!』
　ちょっとまてぇ!?せいぜいどこかのやんごとなき家柄のお嬢様とかその辺だろうと思ったらとんでもない爆弾が出てきやがった!?
『ちょ!?ということはシェラさんってお姫様って事ですか!?』
『国際問題ってレベルじゃねぇぞ!?と、とりあえず人目から外れるぞ!』
　ふと、レムとシェラを見ると周囲の会話が聞こえてたのだろう。頬を真っ赤に染めて恥ずかしそうにしている。

うん、気づくの遅れてすまんかった

「おい、貴様ら。いつまで立ち止まっている。宿に行きたいのであろう?」

ディアヴロがそう促すと、二人はそれについていく。周囲の通行人もディアヴロ（ていうか俺たち三人）を恐れて道を開けていく

ホント、ディアヴロくんの胆力がうらやましく思えるな

◆◇◆

【とある三大魔王の思考会議その2】

『ディアヴロくん、重要なところで受け答えする時は一声かけるように』

『(・・ω・、)』

魔王の考察

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：ディアヴロ】

俺たちは街の人たちに注目されながら、宿屋の前にたどり着く。街の西門と広場の中間に位置する石造りの建物で、途中からレムやシェラに案内をしてもらった。ゲームでは街の宿屋なんて一件しかなく、そもそも用途のない建物には入れない仕様だったのが、こうして現実になった事でただの民家にすら入れるのだ。看板も一定の形をしておらず、周りの大半の建物は石造りで三角屋根の二階建て、ドアは木製で統一されており、区別がつかない。これで迷うなというのが無理な話だ

『そういえばここの識字率ってどうなってるんだろうな。図書館でもあれば文字を学んでおきたいところなんだが』

『確かに文字が書けないと不便ですね・・・レムさんかシェラさんに教えてもらう事も考えておいたほうがいいかもしれません』

そういえばひらがな、カタカナなんてこの異世界じゃ当然通じないよな。これは俺もまじめに勉強しないと。文字すらかけない魔王なんてかっこ悪いし

それにしても宿屋を使うなんていつ以来だろうか。マイスペースをカスタマイズしまくってダンジョン化させた拠点から出る事が減ってたからな・・・・・・・

懐かしい思いにふけりながら、金属製のドアノブを握って木製のドアを開ける。入るとまず受付があり、そこに黄色いヒョウミミをはやした豹人族の少女がいた。見覚えのあるＮＰＣだったが、ゲームの時のままだろうか

豹人族の少女はにこやかな笑みを浮かべ、肩まである茶色い髪を揺らしながら挨拶をする

「こんにちわっ☆宿屋『安心亭』の看板娘（アイドル）メイちゃんだよ～♪きゃはっ！」

『う、うわぁ・・・・・・・』

『こ、これは・・・・・・・ギルメンの一人に声優がいて似たような事してましたけど、別の意味で堪えますね・・・・・・』

『うむ、ゲームの時と同じで逆に安心したぞ』

『『えっ』』

うん、二人のその反応は痛いほどわかる。スレでも結構突っ込まれてたし

この世界でも受付の彼女は普段からこんな感じのようで、レムとシェラは気にする事なく話しかける

「……部屋の鍵をくださいますか」

「レムちゃん、おかえり～☆召喚は成功したかな？」
「……召喚は成功しました・・・・・・召喚だけは」
レムは手で首輪を隠し、宿屋の看板娘はそれを不思議そうに見ている。
「どしたの？」
「……それより・・・・・・部屋を一つ、いえ二つ追加して欲しいのです」
俺たちの分、だよな？そういえば、俺の所持金ってどうなってるんだ？まさか無一文・・・・・・・？
『そういえば、ここの通貨って金貨は通じるんでしょうか？≪ユグドラシル≫の金貨ならいくらか持ってるんですが』
『≪クロスレヴェリ≫のゲーム内通貨の単位は『フリス』だが、換金となると相場がわからんな・・・・・・』
『一応路銀に宝石の類とか金になりそうな物を持ってきてるから、最悪それを代金の代わりに出すよ』
『『ゴチになります』』
魔王が人におごってもらうのはどうかと思うが、少女にたかるよりかは幾分かマシだ。ここはリムルの好意に甘えるとしよう
そう思ってると、今度はシェラが受付に身を乗り出す勢いで宿屋の看板娘に迫る

「あのッ！」
「わっ!?やっほ～、シェラちゃん☆何か御用かな？鍵ならすぐ出すからね♪」
「あ、あたし・・・・・・その・・・・・・お、同じ部屋に一人・・・ううん、三人泊めたいんだけどいいかな!?」
なん・・・だと・・・・!?
「おい貴様・・・・・・まさか、そこの二人はおろか俺まで貴様ごときと同じ部屋で過ごせとは言うまいな？」
正直にいうと女の子と一緒の部屋なんて逆に死んでしまいそうです
『あー、これはあれか。召喚主としての最後の矜持（プライド）っていうか、ここで威厳でも見せたいとかそんなところだろ』
なるほど、少しでもいいところを見せないとレムに全員持っていかれると思ったのか
シェラが赤面しながら歯噛みする
「だってだって！あたし、二部屋も借りるほどお金持ってないし！でも、レムの用意した部屋に泊められたら、なんかレムが召喚主みたいだし！」
「……三人をこの世界に招いたのはわたしです・・・・・・ですから、召喚主であるわたしが、三人の部屋を用意するのは当然です。わかりますか？あなたは、貧乏なりに、一人で楽しく過ごせばいいのです」

「ちがうもん！あたしが召喚主なの！そんで、召喚士と召喚獣は一緒にいるものなんだよ！」

……また始まった。この二人は譲り合いの精神は持ち合わせていないらしい

もうそろそろヒートアップする頃かと思ったら宿屋の看板娘が手をパンパンとたたく

「は～い。大部屋に五名様、ご案内しちゃうよ～☆」

『『なん・・・・・・・だと・・・・・・・!?』』

いやいや、それ狭くないですか看板娘さん!?

「えっ!?いやいや、それ困るんだけど!?三人はともかく、なんでレムまで一緒なの!?」

「……こんなバカエルフと相部屋になるのは不愉快です」

二人は抗議するが、看板娘がスマイルのまま首を傾げた。背景に「ゴゴゴゴゴ・・・」という効果音がつきそうな迫力だ

「も～、受付で揉められると迷惑だよっ☆そんな悪い子達は同じ部屋にしまっちゃおうねっ♪・・・・・・・追い出すよ？」

『『こわっ!?』』

あまりの迫力にレムとシェラもガクガクと勢いよくうなずいた。まさか、魔王に匹敵する迫力を醸し出すとは・・・・・・

「あー、ちょっといい？えーと、メイちゃん？」
　なんと、この威圧の中をリムルがおずおずと言葉を発した
「おや、何かな～？言っておくけど文句は受け付けないよ～☆」
「いや、そういうことじゃなくてな。流石に大部屋でも５人は狭すぎるから・・・・・・もう一部屋借りたいんだ。これでどうかな？」
　リムルが懐から宝石を取り出す。拳より一回り小さく、彩がきれいだ。宝石に詳しくない俺でもリムルが出した宝石は高値が付くだろうと予想できる
「にゃっ!?これは・・・・・さすがに専門店じゃないと鑑定できない・・・・・・けど、このぼろ宿を立て直すくらいは・・・・・・本当にいいのかにゃ？」
「いいっていいって。迷惑料と思ってくれたら」
「……お兄さんいい人だね☆それじゃあ、大部屋ともう一部屋ご案内～♪夜はなるべく静かにね？宿屋のアイドル、メイちゃんとの約束だぞっ☆」
　交渉は終わったらしく、リムルさんがずっしりと重そうな、古い鉄製の鍵を二つ受け取る
『さて・・・・・・なんとか二部屋確保したわけだが問題はここからだ』
『ふむ、二人のあの仲の悪さから彼女達を同じ部屋にするのは愚策。かといって、仮にレムに一人、シェラに二人といったような部屋分けをすると、相部屋になる人数で揉めそ

うだ』
『となると・・・・・・・』
≪思念伝達≫での相談を一旦中断し、俺たち三人は神妙な顔で向かい合う
「ふ・・・・・・・リムルが穏便に済ませるためとは言え、まさか俺たちがこうして争いあう事になろうとはな」
「俺としては別に譲ったってかまわないんだが、どうだ?」
「いえいえ、むしろ役得じゃないですか。遠慮せずに」
互いに不適な笑みを浮かべ（モモンガは仮面をかぶっているから表情はわからない）、静寂がこの場を支配する。
レムやシェラ、看板娘すらもこの空気の前に黙り込んでしまっている
「やはり、こういう時は〝これ〟に限るな」
「どんな結果でも恨みっこなしでお願いしますよ?」
「それじゃあ、行くぞ・・・・・・」
俺たちは利き腕の拳を引き、タイミングを見計らう。拳を引いた事からシェラ達が喧嘩と勘違いして止めようと叫ぶが、安心しろ。これは喧嘩ではなく
「「じゃん、けん!!!」」

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：モモンガ】

「それじゃあ、ディアヴロくん。そっちは頼んだぞー」

じゃんけんの結果、ディアヴロさんの一人負けで幕を閉じてシェラさんとレムさんと相部屋する事となった

『おのれ・・・・・・次は負けんぞ』

『はいはい、明日からモモンガくん、俺の順番で交代するんだから気を取り直して』

負けたのがそんなに悔しかったのか・・・・・・まあ、あの二人の仲をこれから取り持つと思うと気が滅入るのはわかる。ディアヴロさんにはこれから、二人が俺たちを召喚したより詳しい事情を聴いてもらう事になっている。レムさんの目的であるクレブスクルムもそうだが、王族であるシェラさんが自国ではなく、人族の領地であるこの街に滞在している理由も気になる

三人が大部屋に入るのを見て、俺たちも用意された部屋に入っていく。中にはベッドが二つに荷物を入れる大箱が隅の方に用意されている。清掃は行き届いているようで、ベッドのシーツも真っ白で清潔感が漂う

「さて・・・・・・二人はディアヴロくんに任せた訳だが、どう思う？」

リムルさんがベッドの一つに腰かけ、俺に意見を聞いてくる

「二人が隠している事情について、ですよね？」
　ここに来る道中、リムルさんからレムさんが俺たちを召喚した理由を聞いている。そして先ほど判明したシェラさんの出自。そのことについての意見を聞いているのだろう
「ああ。レムの場合、ディアヴロくんの話じゃクレブスクルムの存在は確定しているにも関わらずそのシナリオがないって話だ。当然、この世界でもその所在はまだ判明してないと思っていいだろうな」
「ええ、それは俺も思いました。しかし、魔王討伐という明確な目的を持っているのに、その魔王がどこにいるかもわからないというのは少々おかしな話ではありますね」
　そう、いくら最強の魔王を倒すと言っても、所在のわからない状態で俺たちを召喚したというのは無計画すぎる。俺なら、まずはその魔王がどこにいるのか突き止め、入念な準備を進めてからリムルさん達を召喚するだろう
「恐らくだが、レムはクレブスクルムの所在について何かしらの手がかりを持っている。そしてその秘密を持ったがゆえに魔族に狙われ、力を誇示し続けなければならなかった。と、いうのが彼女のいう〝個人的な理由〟になると思うんだが」
「それが一番有力そうですね・・・・・・尤も、まだ憶測の域を出ないので解答はディアヴロさん待ちですね。そして、一番に解決しないといけないのが二人の隷従の首輪なん

ですが・・・・・・解除の方はできそうですか?」
「それなんだが、解除自体はできないとは言わない。だが、予想以上に難解で時間がかかるんだ。あれを一晩でできるものならやってみろと言いたいね」
　うーむ、やはり一筋縄ではいかないか・・・・・首輪の解除に関してはリムルさんしか頼れる人がいないし、解けるようになるまで待つしかないな
「そもそも、王族である彼女がこんなところに一人で来ている理由って何なんでしょうね」
「大方、王室の生活に嫌気がさして家出してきたとかそんなところじゃないか?王位継承権が低いと割とそういう事もありえそうだし」
「うーん、これまでの彼女を見ているとそんな感じがしてきますね・・・・・・だとしても、近衛が一人もいないというのも不用心じゃないですか?奴隷という制度がある以上、人さらいとかいそうですし」
「だよな・・・・・・そのあたりの危機管理がなってないのも王室育ち故か・・・・・・それで、モモンガくんはこれからどうする?」
「どう、とは?」
　リムルさんの質問の意図が分からず、思わず聞き返してしまう
「要はこのまま二人についていって彼女たちの目的に付き合うのか、それとも別行動す

るのかってことさ。はっきり言って、モモンガくんやディアヴロくんは無理やりこの世界に連れてこられた〝被害者〟だ。隷従もされてないし、彼女たちに付き合うことはない」

……そう、リムルさんの言う通り、俺には彼女たちの目的に付き合う理由がない。そもそも、俺の≪ユグドラシル≫は、その日の深夜0時で終わるはずだったのだ。それが、どういう理屈かアバターの姿でここに召喚され、魔王を一緒に倒してくれと頼まれた。正直いい迷惑である。明日は四時起きで出勤しなきゃならなかったのに、俺の生活をどうしてくれる。

そう思う反面、消えるはずだったこの身体（アバター）と、ギルドの象徴たる≪スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン≫だけでも残ってくれてよかったと思う自分もいるのだ。現実でも、彼女もいなければ、友達もいない。現実に帰るための理由が、ないのだ。

「……ちょっと、迷ってます。正直に言うと、こんなところへ勝手に喚び出してふざけるなって思ってる半面、消えるはずだったこのアバターとこのスタッフを失わなくてよかったと思う自分がいるんです」

そう言って、アイテムボックスにしまったスタッフを取り出してその輝きを見つめる「ギルドの拠点も一緒に来ていたなら、それを守り抜くために奔走していたのでしょうが、それは来てなさそうですしね・・・・・・」

「そうか・・・・・あまり無責任な事は言えないが、この世界で人生やり直すのも一興だと思うよ。それか、俺の国に来てみるのもいいかもな」
　リムルさんがケラケラと笑いながら提案を述べる
「・・・・・そうですね。それも選択肢の一つなんでしょう。ですが、今はもうちょっと考えさせてもらっていいですか？こればっかりは、後悔しない選択をしたいので」
「ああ、よく考えて、悩んで、選んでくれ」
　……ああ、この人もスライムになってからたくさん悩んだのだろう。たくさん後悔したのだろう。おそらく、取返しのつかない事も一つや二つじゃないはずだ。そんな雰囲気が、今のリムルさんから感じ取れる
　俺は、何も言わずに強く頷く。この異世界で〝後悔〟しないように・・・・・彼の厚意を無駄にしないために
　その時、この部屋のドアをノックする音が聞こえ、シェラさんがドアを開けて顔を覗かせる
「二人とも！下でセレスティーヌ様がごはん用意してくれてるから早く来てー！」
　そう言って顔を引っ込めて、おそらく下へ向かったのだろう。部屋の外から「ごっはんーごっはんーまっともなごっはんー♪」と、なんだか悲しくなってくるような歌を口ずさんで

「……セレスティーヌって誰だよ」
「様付けしてるのを見ると権力のある人のようですが・・・・・・ディアヴロさんなら何か知ってるでしょうし、行きますか」
リムルさんもそれに頷き、部屋を出て一階に向かう。受付の人に聞けば場所は教えてもらえるだろう

◆◇◆

【とある三大魔王の思考会議その4】
『ちなみに、声優のギルメンがいたと言っていたが何の声優なのだ?』
『えっと・・・・・エロゲのなんですが・・・・・・』
『お、おう。それはまた・・・・・悪乗りされて男衆共は苦労したんじゃないのか?』
『いえいえ、そんな事ないですよ?ただ・・・・・その声優さんの弟さんもうちのギルメンでして、購入したエロゲにたまにお姉さんが出演してたりして・・・・・』
『『う、うわぁ・・・・・』』

魔術師協会

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：リムル】

俺たちを呼び出したセレスティーヌという人物に会うため、安心亭の一階に下りる。受付のメイちゃんが俺たちに気づくと手を振ってこちらに呼び寄せた

「あ、お兄さんたち～☆奥の酒場でセレスティーヌ様がお待ちだよ～♪」

「ありがとうございます。ところで、セレスティーヌさんとはどういった方なんでしょうか？」

「おやおや、お兄さんたち知らないの？セレスティーヌ様はこのファルトラの魔術師協会の長で、街を守る結界を維持してくれているとっても偉いお方なんだぞ～☆」

　おおっと、思った以上に偉い人だったようだ。しかし、これだけの規模の街を覆う結界となると、維持するための力も馬鹿にならないはずだ。おそらく、維持にほとんどの力を割いているだろうな

「一応護衛の人も一緒にいるから、失礼のないようにね？」

　メイちゃんの親切な忠告に礼を言って、俺たちは酒場へと向かう。飯をおごってくれ

るというので、実のところ楽しみだったりしてる。自分の国で舌は肥えてはいるが、異世界の料理のレベルは食に関して妥協を許さない俺としては一番重要なのだ

『……そういえば俺って骸骨なんだよな・・・・・食べたら絶対ただ漏れになるよなぁ』

む、そういえばモモンガくんは今骸骨の姿だったな。それはいかん。せっかく目の前に美味しそうな料理があるのに、食べれないなんて生殺しは流石に可哀そうだろう

シエル先生、何かいい能力とかないかい？

≪究極能力（アルティメットスキル）≪豊穣之王（シュブニグラス）≫の【能力創造】と【能力贈与】を用いれば可能です。ですが、その際にマスターの力を相手に示唆してしまう事になりますがよろしいのですか？≫

それに関しては、然程心配もしていない。確かに、モモンガくんやディアヴロくんとは会って数時間の赤の他人なのだろう。だが、接していく中でモモンガくんは恩を仇で返すような人物ではないと確信している。流石に殴られたら俺も黙ってる訳にはいかないが、その心配も杞憂だろう

『モモンガくん、食事に関してだが俺に任せてくれないか？』

『え？もしかして俺みたいなアンデットが飲食可能になるアイテムとか持ってたりするんですか？』

『いや、アイテムじゃなくて俺がいた世界のスキルになるんだが、まあ任せてくれたま

え。流石に今回は我慢してもらうことになるが、一人だけおいしい料理を食べられないなんて寂しいじゃないか』

『リムルさん・・・・・・ありがとうございます』

『何、同郷のよしみという奴だよ。わかっていると思うがこの件については黙っておいて欲しいんだ。少なくともこの世界の住人に知られるのは絶対に避けたい』

『ええ、絶対口外しませんよ。ディアヴロさんには折を見て話すんですか?』

『そうなるな。その時は俺の方から説明するよ』

　このスキルがこの世界の住人に知られたら、絶対に利用しようとたくらむ奴が出てくる。俺はこの未知なる世界に〝冒険〟しに来ただけであって、世界征服だとか世を混乱させようとかそんな事をしに来たわけではないのだ。今、絶賛厄介事に巻き込まれてるけど

　酒場へつくと、入り口から少し離れた席にディアヴロ達三人とテーブルを挟んで向かい合う形で座っている女性が見えた。どうやら人払いをしたようで、俺たち以外の客は見当たらない

　柔らかそうな水色のローブで、肩からくるぶしの高さをすっぽり覆っている。タイトなデザインなのでその豊満な体のラインがくっきり見える。まことに眼福です。彼女がセレスティーヌなのだろう。後ろで彼女を挟むように立っている護衛らしき黒の

ローブを被っている男性が二人いる
「待たせて悪いね。そちらの女性がセレスティーヌさんで間違いない？」
「……はい。彼女が、魔術師協会の長である『セレスティーヌ・ボードレール』卿です」
「初めまして。ご紹介にあずかりましたセレスティーヌ・ボードレールです。あなた方が、そちらのディアヴロさんと同じくレムさん達に呼び出されたリムルさんとモモンガさんでしょうか？」
「ええ、それで合ってますよ。俺がリムル＝テンペストです」
「私がモモンガです。初めまして、ボードレール卿」
　流石、社会人のモモンガくん。挨拶が様になってるね。しかし、後ろの護衛の一人がディアヴロくんを睨みつけているのが気にかかる。俺たちがいない間に何かしたんじゃないだろうな・・・・・・
「ごめんなさいね。私も立場があるものだから、一人で身軽に、という訳にはいかなくて・・・・・・」
「いえいえ、貴方の立場からすれば護衛なしというのはさすがに不用心でしょう。むしろ、護衛を二人しかつけていない事に敬意すら感じますよ」
　そう言って俺たち二人も席についた。なお、モモンガくんは横幅が結構広かったので別のテーブルから椅子を持ってきてテーブルのサイドに座ってもらっている

「ふん、俺は護衛程度、気にもしないのだがな」
「貴様・・・・・・ボードレール卿に対して、なんという口の利き方だ?敬意を欠くと、容赦せんぞ?」
　ディアヴロの応対が気に入らなかったのか、護衛の一人が敵意を持った声で脅しにきた。体つきが細く、神経質な顔つきの男を、セレスティーヌが宥める
「ガラクさん、失礼ですよ・・・・・・わざわざ付き合ってくださっているのは、あちらの方々なのですから」
「ボードレール卿はお気になさらないのかもしれませんが、こんな見るからに怪しい魔術師や、どこの馬の骨とも知れない混魔族(デイーマン)に侮られては、魔術師協会の威信にかかわるのです!」
『全く、ただの護衛ごときが会長のセレスに、協会の威信のなんたるかを語るとはな』
『というか、さり気なく俺にも飛び火してるんですが・・・・・・やっぱりこういう大きな組織だとエリート意識が高い人がいるものですね』
『ほんとこういう面倒な奴ってどこにでもいるな・・・・・・』
　こういう奴に限って裏であれこれやってトップの座を狙ってたりするんだよな。まあ実際のところどうなのか知らんけど、関わるとろくなことにならないだろう
「みなさん、お話の前に食事にしましょう。今日はわたしが出しますから、どんどん食べ

てくださいね」
「いいの!?ホントに!?」
「ええ、好きなだけどうぞ」
シェラが諸手を上げて喜ぶと、注文を取りに来たメイちゃんにあれやこれやと頼んでいく。ていうか一人で経営してたのかこの宿屋・・・・・・
そしてほどなく運ばれてきた料理に目をやる。大小さまざまなソーセージ、茹でただけのジャガイモ、具のほとんどないスープ、白いパンｅｔｃ・・・・・・・
見た目はシンプルでおいしそうだが果たして味の方はどうだ。俺はソーセージを一本フォークに突き刺し、かじりつく
こ、これは・・・・・・!?ほどよい噛みごたえに、じゅわっと広がる肉汁の、野趣あふれる力強い味わい・・・・・・うまい!
他の料理にも手を出そうとすると、シェラがバクバクとすごい勢いで食べていっている。あの細い体のどこに入ってるんだ・・・・・・・?
『……胸か』
『胸ですね』
『胸だろうな』
三人とも、満場一致で同じ結論に至ったようだ。男の悲しい性よ

そんなシェラを、レムが横目でジトッと睨みつけた。そりゃ目の前に偉い人がいて、遠慮もなしにバクバク食ってたら一言いいたくもなるよな。しかし、その予想とは裏腹に彼女の食いっぷりを言及することなく、セレスティーヌの方を向いた

「……それで、セレスさん・・・・・・もしかすると、また〝あの〟話ですか？」

・・・・・・あの話？俺は一旦食事を中断して二人の会話に耳を向ける

「レムさん、わたしはね、貴女の力になれればいいなぁ、って思っているのよ？いろいろと辛いこともあっただろうし、信用できないのかもしれないけれど、それだけは本心だって、わかってちょうだい？」

「……わたしは魔術師協会本部に行くのも、護衛を付けられるのも、嫌です」

「でも最近は物騒なのよ。他の街では、魔族が人をたぶらかして結界の中に入ってくるような事件も発生したとか・・・・・・魔術師協会の者だったら、魔族につけこまれて街や貴方に迷惑をかけるようなことはないと思うのだけれど」

……なるほど、彼女はレムの隠し事を知っているとみた。これは俺の予測が信憑性を増してきたな。それが魔王の所在でなくとも、魔族に付け狙われるほどの秘密だったなら、人族として守りたいと思うのは当然だろう。ただ、レムが頑なにセレスティーヌの提案を拒む理由がわからない。ただ単に迷惑をかけたくないというだけではなさそうだが・・・・・・

そんな事を思っていると、セレスティーヌがレムの首についている隷従の首輪に視線を向けた
「貴方の首輪をどうにかする手段も、魔術師協会なら調べられるかもしれないわ」
「っ!?・・・・・・・これは」
「望んでつけているわけではないのでしょう?貴女ほどの人が、無理やりに奴隷にされるとも思えない、なんらかの、貴女ですら想像も及ばないような事故で隷従の首輪がついてしまったのでは?そして、その首輪の主は、そこにいる三人のどちらか――――間違っているかしら?」
「……いいえ」
すごい洞察力だな。こちらは首輪に関する事なんて一言も言ってないのに・・・・・・流石にレムの隠し事を見抜いただけはある。これは変にごまかすと後々面倒な事になりそうだな
「どうかお願いします。レムさんを解放してあげてくれないかしら?彼女はこの世界にとって大切な人なのです。相応のお礼は約束いたしますから」
『ふむ・・・・・・・リムルよ、今すぐ解除の方はできそうなのか?』
『無理。少なくとも一朝一夕で解除できるようなかかり方じゃない。解析の方は進めてはいるが、それがいつになるかまでは保証できん』

『ここは正直に話した方がいいでしょうね。向こうも話の分かる人みたいですし、正規の解除法があるならそれを調べてもらうのも手かと』

確かにそんな方法があるならシエル先生の解析も楽になるだろうな。もっとも、シエル先生の性格からして突っぱねそうだけど

≪失礼な、そんな方法探してもらわずとも解除して見せますとも≫

ほらね、こういうお方なんだよ

「えーと、正直に申しますと、彼女達の首輪はそちらのディアヴロくんが隷従の儀式を反射して起こした事故でして」

「うむ、俺とて他者を従わせる趣味はないが・・・・・・方法がわからんものは、解除したくともできぬ」

「そうですか・・・・・かなり熟練の魔術師のようですし、わたしにわからないことも何か知っているかと思ったのですが・・・・・それに、反射ですか？」

「ええ。まあどういう理屈で反射したのかはともかく、かなり変則的なかかり方をした所為で普通の方法では解除できないかもしれません。その辺は解析してる最中なんでまだ何とも言えませんが」

「解析ですか？ということは貴女も魔術師なのかしら？」

「はい、解析の方法については企業秘密ってことで。あと、なんとなく勘違いしてるよう

なので言っておきますが、俺は男です」
　予想外だったのかセレスティーヌが驚いた表情をした後、恥ずかしそうに謝ってきた。そんなに女性に見えるかね・・・・・・いやまあ、この体はとある女性の姿を模してるわけなんだが
「そうなると・・・・・・方法を調べて、貴方方三人に手伝っていただく必要があるでしょうね」
「私も一応魔法詠唱者（マジック・キャスター）・・・・・こちらでいう魔術師にあたりますが、どちらかと言えばリムルさんの方が解除に詳しいですね」
「ええ。何かわかれば俺の方にお願いします」
「全く、自分の魔術も解除できんとは無力な者どもめ・・・・まあいい、今回の件は事故とは言え俺が原因でもある。必要なら俺も手を貸してやろう」
　ダンッ!と床板を叩く音が響く
　そちらを見ると、ガラクと呼ばれていた男が長杖で床板を叩いていたようだ
「貴様・・・貴様らは!何の権利があって、ボードレール卿の願いを断り!あまつさえ、このレム・ガレウ様を隷従させているのだ!?なんの権利があって!」
　いや、知らんがな・・・今さっき、これは不幸な事故で、解除の方法は知らないけど解析の最中で、お互いに協力して調べよう。って話になったはずだろ

ディアヴロは辟易したような顔つきで、モモンガも仮面の上からでもわかるくらいあきれている。流石の俺も我慢する理由がない

「ガラクくんだっけ？　一応聞くけど君って護衛のはずだよね？」

「だからどうした!?」

「いや問題大ありだから。一応、護衛を任されるくらいの信頼はあるんだろうけど、〝ただ〟の護衛が、一番偉いはずの魔術師協会の長であるセレスティーヌさんとの会話を遮ったんだ。いくら彼女が優しいからといっても、流石に頭が高いんじゃない？」

「なっ・・・・・・・!?」

「それに、ちゃんと話を聞いていなかったのですか？これは不幸な事故で、お互いに解除の方法がわからないから協力して調べましょうと。そして我々は協力的だった。〝ただ〟の護衛とはいえ、それさえ理解できていないのであれば、それこそ魔術師協会の威信とやらに関わってくると思うのですが？」

「ぬ・・・ぐっ・・・!?」

おー、モモンガくんも言うね。ガラクくんが顔真っ赤にして言いたくても言い返せない事に憤慨してるよ

「これ以上はご迷惑になりそうね・・・・・ごめんなさい、みなさん、疲れているでしょうに」

見かねたセレスティーヌさんが席を立つ。主にそちらの護衛のせいでしたけど！こっちとしてはもう少し情報が欲しかったんだが、ヒステリックな護衛くんのせいでとんだとばっちりを受けたものだ

レムの方も、騒がれた原因の一つに自分が関わっている事に罪悪感を感じていたのか、うつむいている

「……セレスさん・・・・・協会に行くのも、護衛の話も断っておいて、身勝手だと軽蔑されるかもしれません。ですが・・・・・・隷従の首輪の解除の方法・・・・・・調べていただけますか？」

レムも、セレスティーヌさんの事を全く信用していないという訳ではないのか。むしろ、頼りたくても頼れないのか？

「もちろん。私は貴女を守りたいだけよ」

「すみません」

「気にしないで。でも、考えが変わったらいつでも頼ってね？魔術師協会は世界の為に貴女を守る必要があるし・・・・・・私は貴女の事を妹みたいに思っているんだから」

セレスが踵を返して、護衛とともに酒場を出ていく。本当にレムの事を心配してるんだな。去り際にガラクくんが俺たちをにらみ付けてきたのが非常に気に入らないが。あれさえなければほっこりしていたものを・・・・・・あとシエラ、君はいつまで食っ

ている気だね？お姫様がそんなにがっついてていいのか

『ふむ・・・・・・魔術師協会の長が気に掛けるほどにレムの抱えている秘密は相当なものということか』

『そういえば、二人の事情聴取はどうなったんだ？』

『うむ、それなのだが、いざ聞こうというタイミングでセレスが訪れてな。当たり障りのない程度にしか聞けてないのだ』

　なんと、間の悪い・・・

『ゲームの展開でいえば、レムの隠している秘密は〝ストーリーを重たくする〟タイプの秘密だ。ゲームならばいざ知らず、現実（リアル）となった以上、いちいち面倒な事に発展させる理由もない』

『……少々外道くさいですが、≪支配（ドミネート）≫という精神支配の魔法が使えます。やってみますか？』

『ふん、そんな事をせずとも聞き出す方法はいくらでもあるぞ？それに、秘密というものは他人に聞かれたくないから秘密にするものだ』

　む、それは確かにそうだ。第三者のいない二人きりの状況ならば、話してくれる可能性はあるかもしれない

『もう一度、俺が聞き出すとしよう。あまり気は進まんが、多少強引に脅せば白状してく

れるかもしれん』
『うーん・・・・・・可哀そうだけど仕方ないか。頼んだぞ、ディアヴロくん』
ディアヴロくんにＯＫを出す。立ち上がった彼はレムの背後に回ると軽々と持ち上げて肩に担ぐ
「なっ!?な、な、なにをする気ですか!?」
「ふむ、思ったより軽いな。念の為聞くが、貴様が抱えている秘密、今ここで話す気はあるか?」
「それは・・・・・・・でき、ません・・・・・・・」
「だろうな」
それだけ聞くと、ディアヴロは酒場を出ていこうとする
「はんぐんぐ!ごくっ!二人とも、どこ行くの?まだ料理がたくさんあるけど?」
「拷問してくる」
……いや、事情聴くだけだよね?それ以上の事しないよねディアヴロくん?
◇◆◇

【とある三大魔王の思考会議その5】
『これは事案発生か』
『憲兵呼んだ方がいいんでしょうか？』
『待て!?貴様ら、一体何を勘違いしている!?』

それぞれの事情

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：モモンガ】

レムさんとシェラさんが絶句している。そりゃあんな怖い顔した男の人に担がれて「拷問してくる」なんて言われたらな・・・・・・冷静そうなレムがあんな顔するのはなんだか意外ではある

「あ、あたしは、ごはんを食べてるね！」

あ、シェラさんが逃げた。レムさんが泣きそうな声を上げる

「あ、あなた・・・・・・あなたは・・・・・・少しは一緒に旅をした仲間ではないですか!?わたしを助けようとか、そういうことは考えないのですか・・・・・・!?」

「さんざん、バカエルフとか言われてた気がするんだけど!?っていうか、さっきなんて、壁のカビとか言ったよね!?」

うわぁ・・・・・・これはレムさんが悪い。ファルトラに来るまでの道中でもさんざん貶してたからなぁ。あ、今度は最後の希望らしい俺達に視線を向けてきた。今にも泣きだしそうなその顔を見ると罪悪感がやばいが、ここは心を鬼にしなければ。そう思っ

て、リムルさんも俺に合わせるかのように顔をそむける。絶望したその顔がさらに罪悪感を募らせる

『むぅ・・・・・・少し脅しすぎたか・・・・・・多少ニュアンスを変えて安心させるとしよう』

ディアブロさんもその様子を見て、罰が悪そうにしている。ぜひ、そうしてください。小さな女の子をいじめる趣味は俺にはありません。

しかし、ディアヴロさんが笑みを浮かべた事で俺の中の第六感が警鐘を鳴らす。あ、なんだか嫌な予感が・・・・・・

「クックック・・・・・・怯える事はない。殺すような事はせぬ・・・・・・貴様が早めに秘密を吐けばな」

『『逆効果だよ!?』』

『ヌォッ!?す、すまん。落ち着かせようとしたつもりだったのだが』

どうしてそうなった。それ、思いっきり死刑宣告なんですが・・・・・・それを聞いたレムさんはというと

「……十四年という人生は長いのでしょうか、短いのでしょうか・・・・・・お父様、お母さま、どうやら今夜、わたしもそちらに行くことになりそうです」

それ見ろ言わんこっちゃない。ていうか重い、重いよレムさん!?
レムさんは観念したかのように目を瞑った。ディアヴロさんもそれを見て、これ以上何を言っても悪化すると思ったのか酒場を出ていく
「……ね、ねぇ。あんなこと言っちゃったけど、大丈夫だよね？レム、ひどいことされないよね？」
「まあ、うん。たぶん大丈夫だろ。それよりも、だ」
リムルさんが改まった顔をしてシェラさんを見やる。こちらも丁度いいので、彼女の事情を聴くとしよう
「シェラ、まどろっこしいのは好きじゃないからはっきり言うぞ。君、俺達に何か隠してる事あるだろ？」
「え、えっと・・・・・・そ、そんな事、ないよ？」
シェラさん、そんな目を泳がせて否定しても説得力ないですよ
「シェラさん、私たちは別に怒っている訳ではないのですよ。ですが、街の人達のあの反応を見れば、貴方がただのエルフでないのは明確です。貴女自身にその気がなくとも、我々からすれば無条件で厄介事に付き合ってくれと言われているようなものです。自分が召喚主という自覚があるのなら、必要最低限開示すべき情報があってしかるべきです」

　こちらの反論が堪えたのか、シェラさんがうつむいてしまった。しばらく俺とリムルさんを交互に見やり、ついに観念したのかポツリポツリと語り始める
「えっとね・・・・・・あたしの名前は聞いたと思うんだけど、『グリーンウッド』ってね、王族の姓なの。つまり、あたしはお姫様なんだ」
『『うん、実はディアヴロさん（くん）が教えてくれました』』
　しかし、そこは空気の読める俺達。口には出しませんとも
「それでね、お城にいても好きなこともできないし、好きでもない人と結婚もさせられちゃうから、それが嫌になってお城から飛び出して行ったの。自分の力だけで生きていける事を証明したくて」
「なるほどね・・・・・・・まあ、俺も堅苦しいのは好きじゃないし、その気持ちはわからんでもないかな。でも、流石に家出はやりすぎだ。親御さんとか絶対に心配してるだろうに」
「兄さんたちが心配してるのは、世継ぎの事だけだもん。あたしに子供を産ませたいだけなんだよ。それに・・・・・・兄さんなんて、子作りのことばかり言うし・・・・・・」
　確かに、王族にとって世継ぎは絶対に必要だよなぁ。でも、なんだろう。ニュアンスが何かおかしいような・・・・・・
「あの、シェラさん。なんだかその言い方だと、結婚相手が貴女のお兄さんに聞こえるん

ですが」

「そうだよ?·兄さんってば、あたしに〝シェラは子供を育ててくれればいい〟とか、〝子供は三人欲しい〟とかそんな事ばっかり言ってくるんだよ!?」

『き、近親相姦・・・・・・だと・・・・・・・・!?』

エルフの国の内情が真っ黒すぎる・・・・・・リムルさんもこれは予想外だったのかすごく驚いている

――――――ぁぁぁぁぁっ

・・・・・・何か上の方から嬌声が聞こえてきたような気がするがきっと気のせいだ

「い、異世界だから文化の違いとか当然あるのは理解してるが・・・・・・兄妹で結婚っていうのは・・・・・・」

「ねっ!?ひどいよね!?あたしにだって、誰かを好きになる権利くらいあるんだから!」

「ま、まあシェラさんの言い分はわかりました。しかし、自分の力だけで生きていく事を証明するのに召喚獣の力を借りるというのも、どうかと思うのですが」

「しょ、しょうがないでしょ!?あたしだって一人は寂しいんだし・・・・・・」

ああ、一人だと心細い。だけど、家出したのだから護衛なんてつけられない。だから、

召喚士という職業を選んだのか。シェラさんが俺達を呼び出した理由がやっとわかった

――――――――――――――――――――ああああああっ・・・・・・・・!!

……うん、これはもう気のせいじゃないな。というか

『『さっきから何やってんだ（の）、あいつはぁ（あの人ぉ）!?』』

上から聞こえてくる嬌声のような叫び声に反応して、リムルさんが目にも止まらぬ早さで酒場を出ていく。去り際に、料理をシェラさんに全部食べられないようにしてくれと頼まれてしまったが、まあ仕方ないだろう。向こうは任せるとして・・・・・・・

「リ、リムルちゃん、一体どうしちゃったの?」

「あー・・・・・おそらく上が気になったのでしょう。しばらくしたら帰ってきますよ」

「そ、そっか・・・・・・リムルちゃんもレムについていくのかな?」

「え?」

シェラさんの表情が曇る。その声は震えていて、どこか怯えているようだった

「だって、ディアヴロはレムの秘密が気になって拷問しに行ったんでしょ?それって、ディアヴロがクレブスクルムを倒すこと考えてるってことだよね!?」

なるほど、シェラさんはそう捉えたのか。彼がどうするかまでは聞いてないが、言動はともかく内心は優しい人なのだろう。レムさんの事情次第では協力するのかもしれない

「それは、私にはわかりかねますね。それこそ、レムさんに協力するかは彼の自由ですよ」

「そ、それでも！あたしには必要なの！ねぇ、モモンガはあたしについてきてくれるよね!?」

シェラさんが席を立って、すがるように俺の胸元にしがみついてくる

「……申し訳ありませんが、今の私には貴女についていく〝理由〟がありません。私もそうですが、リムルさんもディアヴロさんも貴女達に無理やり呼び出された〝被害者〟なのですから。それについては、レムさんにも言える事ですが」

「無理やりだなんて、そんな・・・・・・」

「貴方たち召喚士にとっては見慣れた光景なのでしょう。ですが、〝いきなり見知らぬ世界に呼び出されて〟、〝こちらの意志に関係なく隷属させられて〟、〝訳も分からないまま従わされる〟。貴女がもし、こちらの立場だったら納得できるのですか？」

「あ、う・・・・・・」

シェラさんは言葉に詰まり、今にも泣き出しそうな眼で見つめてくる。彼女達につい

ていく理由がない以上、ここで拒絶すべきなのだろう・・・・・・だが
「……ですが、同時に感謝もしてはいるんですよ」
「……え？」
「本当ならば、貴女達に召喚されなければ、俺のこの身体は消えるはずだったんです。仲間とともに築き上げた拠点と、あのスタッフとともに」
「……モモンガが持ってたあの黄金の長杖の事？」
「はい。あれは私の仲間たちが数多の熱意と莫大な時間をかけて作り上げた、何物にも代えがたいギルドの栄光（思い出）で、仲間達との最後のつながりでもあるんです」
たっち・みー、ウルベルト・アレイン・オードル、ペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜、やまいこ、餡ころもっちもち、るし☆ふぁー、ヘロヘロ、ブルー・プラネット・・・・・・・・
仲間達との思い出が蘇ってくる。蘇るたびに、もう会えないと思うと悲しくなってきた。アンデットのこの身体となった今、流せる涙もなく

――――――悲しみも消えていった

……なんだ、これは？あの時と同じだ。レムさん達につけられた隷従の首輪の意味を知っててんぱった時、荒ぶっていた感情の波が無理やり押さえつけられるかのように、

スゥーッと消えていくこの感覚

……ふざけるな。これでは、感傷に浸ることもできないじゃないか。どこに向けていいのかわからない怒りが、煮えたぎっていく。この怒りも、また消えていくのか……

――――このまま、俺は〝心〟まで屍になってしまうのか

「……ねぇ、モモンガは・・・・・・・これからどうするの?」

不意に、シェラさんの声が聞こえてきた。顔を向けると、俯いてはいるが声音は落ち着いているようだった

「……リムルさんにも聞かれましたが、まだ決まっていません。しばらくはこの街を見て回ろうかと思っていますが」

「じゃ、じゃあさ!あたしもついていってっていい!?」

突然、シェラさんが顔を上げ、俺が言い終わる前に声を荒げる。言っている意味を理解するのに、少しだけ間が空いてしまった

「えっと・・・・・・・訳を聞いても?」

「だって、モモンガはあたしについていくのが嫌なんでしょ?だったらあたしが、モモンガについていけばいいんだよ!」

え、ええ・・・・・・何だ、その一休さんのとんちみたいな回答は・・・・・・

「元々あたしも行く当て決めてなかったし、それにモモンガってお金持ってないでしょ？だったらさ、一緒に冒険者ギルドに登録して、お金稼いで冒険に出よう！」

まだ承諾もしてないのに・・・・・・確かにこの世界の通貨は持ってないけどさぁ

だが、そんな彼女の提案を悪くないと思ってしまう。冒険をする、それはありかもしれない。『未知の探求』、それは《ユグドラシル》でも大きな目的の一つとなっている。こうしてこの身体（アバター）になっている以上、別の世界とはいえ俺の・・・・・・《ユグドラシルⅡ》を始めてもいいかもしれない

「……そういうのも、ありかもしれませんね」

「ほんと!?」

「あくまで、選択肢の一つとしてですよ。まだ結論を出すには早すぎます」

「そ、そう・・・・・それでも考えてはくれてるんだよね!?」

「ええ。ですので、しばらく考える時間をいただければ」

先ほどとは打って変わって、希望がある分活気が戻ってきたようだ。

この様子なら少しの間、席を外しても問題ないだろう。

「ど、どこに行くの!?」

「ただ夜風にあたりに行くだけですよ。少ししたら帰ってきます・・・・・・あ、料理は

少し残しておいてくださいね。リムルさんも楽しみにしてたようなので」
それだけ伝えて、俺も酒場を後にした

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：ディアヴロ】
時間は少し遡ることになる。俺はレムから詳しい事情を話してもらうため、拷問と称して借りた部屋で二人きりの状態で向かい合っていた。途中、レムが逃げ出そうとしたがそこはレベル１５０のステータスでベッドにねじ伏せ、拷問を開始する

……そして、今どうなっているかというと
「で、何か言うことは？」
「調子に乗ってやりすぎて申し訳ありませんでした」
ハリセンを肩に担いだリムルに正座させられて説教されている。この光景にデジャヴを感じるのはきっと気のせいじゃないな
ちなみにレムは涙ぐみながらベッドに腰かけている。言っておくが、決してエッチなことはしてないからな!?
「……あ、あのリムルさん。わたしは大丈夫ですから、その辺で・・・・・・」

「……レムがそういうのならこれくらいにしとくが」
『ちなみにどんな事してたんだ、ディアヴロくん』
『レムの豹耳を指で弄んでいた。反省はしている』
　思いっきりハリセンで顔面を殴られた。まだセーフだろ！
「全く、喘ぎ声が聞こえてきたから何事かと思ったぞ・・・・・・入ってみればレムがディアヴロに組み伏せられて泣いてるし」
「あ、あれは……ディアヴロに（耳を）いじられてたからというのもありますが……何より、その・・・・・・どんな事情があろうと、？み込んでくれると・・・・・・言ってくれたので」
　ああ、確かにそんなこと言いましたね。というか、あれだけ泣いたら喉乾いてるよな・・・・・・そうだ、ちょっと試してみるか
　俺は手の平を広げて、小さな氷像をイメージする。最低レベルの魔術で、いつも使っているコップを、そしてその中に空気中の水分を集める
「≪アイス≫、ならびに≪ウォーター≫」
　俺の手元が光り、氷でできたコップと純正の水が現れた。思い出した設定説明からこれくらいはできると踏んでみたが、試してみるものである
「おお、器用なものだな」

「ふん、さっきの詫びだ。氷なので滑るから気を付けるがいい」
「……あ、その・・・・・・ありがとう、ございます・・・・・・っ、冷たい、です」
「一気に飲みすぎるな、ゆっくりとな」
レムは氷のコップを両手に持つと、驚きながらも喉を潤していく。他の魔法も、使い方次第で日常生活に役立ちそうだな、時間があるときに試すとしよう。
そして、レムが水を飲み終えて一息つく
「はふぅ・・・・・・」
「もういいのか?」
レムが頷く。そして、リムルに視線を向けた
「……あの、リムルさんは・・・・・・」
「俺も気にしたりしないよ。その為に呼んだんだろ?」
リムルの反応に、レムは一瞬目を丸くして俺とリムルに交互に視線を向ける。その視線は怯えと、わずかな期待が込められているようだった
そして、レムの唇が開かれる
「……わたしの中には・・・・・・魔王≪クレブスクルム≫の魂が封じられているんです」
「ッ!?なるほどな」

「あー・・・・・・なるほど、合点がいった」
「……え?それだけですか?おぞましくありませんか?恐ろしくはありませんか?わ、わたしを・・・・・・嫌いに・・・ならないのですか・・・・・・?」
　レムが震えながら問いただしてくる。俺達の反応がそれほどまでに予想外だったのだろう
「いや、全然。そもそも俺も魔王だし、何よりクレブスクルムにもあった事ないのに恐いもなにもなぁ」
「フン、俺とて同じだ。魔王≪クレブスクルム≫の魂が、おぞましい?恐ろしい?何を言っておるのだ、俺は魔王ディアヴロだぞ?」
「……それ、じゃあ」
「セレスティーヌさんの話から察するに、クレブスクルムの魂が解放されるのはレムが死んだときか、魔族に連れ去られた時だろうな」
「そう考えるのが妥当だろう。しかも、今は取り出す方法がわからない。そんな手段があれば、世界中の戦力で囲んでおいて、取り出して倒すだろう」
「この事を知ってるのもセレスティーヌさんくらいだろうなぁ。街の人はもちろん、護衛のガラクくん達の反応から察するに下の連中は知らないだろう」
「だろうな。あのヒステリックな針金男が、魔王クレブスクルムの魂を持つ者を〝様〟

付けするとは思えん。連中はレムの事を優秀な召喚士にしか思ってないのだろう。どうだ？俺達に、間違いはあったか？」

レムは目を丸くして、頷く

「……あ、合ってます・・・・・・魂の解放は、私の死ぬ時、です」

「一応、質問しておこう。お前の母親も、その魔王クレブスクルムの魂を抱えていたのか？」

「・・・・・・・・・」

レムは無言でうなずいた。なるほど、魔王クレブスクルムの魂は世襲か

『なるほどね・・・・・・確かにこれは隠しておきたい秘密だな。ディアヴロくんの言う通り真っ先に折るべきフラグだったわけだ』

『ふん、≪クロスレヴェリ≫でこれがシナリオになっていたらブーイング間違いなしだったぞ』

一人の少女に、世界の命運を背負わせるなんて、残酷じゃないか

「ふんっ・・・・・〝神〟とやらも存外たいしたことはない。こんな少女に何もかも押し付けて消えるとはな・・・・・いいだろう、魔王クレブスクルムの魂などこの俺が粉砕してくれる。まあ、取り出す方法については研究する必要があるだろうがな」

『かっこいい事言うじゃないか。さっきまでセクハラ大魔王だったのに』

『もう勘弁してくださいお願いします』
せっかく格好良く決まったのに茶化さないでください。しかし、秘密を探ったのは大当たりだった
下らないお涙頂戴シナリオなど、誰が順番通りにやってやるものかよ
ふと、レムの方を見やると、彼女は先ほどよりも勢いよく涙をこぼし始めた
「ん?どうした、レム?」
「……ッ!!・・・・・・・わたし・・・・・・・・はじめ、て・・・・・・・離れ・・・・・・・ない・・・・・・ッ・・・あああぁぁ・・・・・・・・ッ!!」
レムが堪えきれなくなってわあわあと声を上げて泣き出した。それを見たリムルは、何も言わずに部屋を出ていこうとする
『どこに行くつもりだ、リムルよ』
『野暮な事はしない主義なんだよ、俺は。いいから、泣いてる女の子に胸の一つくらい貸してやったらどうだ、魔王様?』
『・・・・・・・ふん、言ってくれるではないか』
≪思念伝達≫で言いたいことを言い終わったのか、リムルは振り向かずに部屋を出ていった。リムルを見送った俺は、レムの隣に座ってその小さな肩に手を乗せて、自分の胸に抱きよせる。

やがて、レムは泣き疲れた子供のように眠ってしまう。丁度ベッドの上だったので、そのままブランケットをかけて俺も部屋を後にする

・・・・・・リムルさん、ボッチの俺になんつうハードルの高い無茶ぶりをしてくれたんですかね

◇◆◇

【とある三大魔王の思考会議その6】

『このロリコンめ！』

『待て!?リムル、誤解なのだ!?』

『あ、リムルさん。外いくついでに憲兵呼んできますね』

『モ、モモンガよ！早まるな!?』

〝わがまま〟

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：モモンガ】

俺は今、ファルトラの上空を≪飛行（フライ）≫の魔法で飛翔している。事の発端は考え事をするために宿屋を出た時だ。外はすっかり暗くなっており、ふと空を見上げると、そこには今まで見たことのなかった景色が広がっていた。仮想世界でも再現できなかった、大気汚染により見ることが叶わなくなった星々と月と思われる衛星が、このファルトラの街を照らしている

「……素晴らしい」

思わず言葉を口にする。生まれて初めて見る景色だったのだ。自然を愛したギルメンの一人の気持ちが分かった気がする。いてもたってもいられずに、俺は≪飛行≫を使ってこの雄大な星空へ向かって飛翔したのだった

夢中になって、掴めるはずのない星々に向かって手を伸ばしてしまう

「……ブルー・プラネットさんがこれを見たら、なんて言っただろうな」

この場にいない仲間の姿が再び浮かんで、寂しさがこみあげてくる。だが、それと同

時にこの世界の事をもっと知りたいと思った。この夜空の他にも美しい景色があるのではないのかと、ディアヴロさんも知らない神秘が眠り続けているのではないのかと。≪ユグドラシル≫にはなかった〝未知〟に、期待で胸が膨らむ。

「(シェラさんの提案を受けてもいいかもな)」

そんな事を思う中、再びあの感覚が来る。今までの興奮がスゥーっと消え失せてしまった

……さっきから精神を抑圧するようなこの感覚は一体何なんだ。アンデットとしての特性・・・・・・いや、スキルが原因なのか?

しかし、俺が所持しているスキルにそんな効果は・・・・・・ここである一つの予測が生まれた

≪ユグドラシル≫のアンデット種が持つ基本的な特殊能力の一つに、≪精神作用無効≫というものがある。これは、混乱や恐怖などの精神系のステータス異常を無効化する常時発動型特殊技能(パッシブスキル)で、アンデットになった事によりそれが特性として反影されてしまったのかもしれない。酒場の時は気づいてなかったが、〝今〟も空腹はおろか眠気も感じていないのが、何よりの証拠だろう

まいったな・・・・・・食事や睡眠はまだいい方なのかもしれない。しかし、この感情の抑制によって、今後見つかるであろう〝未知〟に対する興奮や感動が消されてしま

うと思うと、我慢ならなかった
やるせない気持ちを抱えながら、ふと街を見下ろすとディアヴロさんの姿が見えた。アンデットの特性の一つ、≪闇視(ダーク・ヴィジョン)≫により灯りがほとんどない街の中でもはっきりと見えるのだ。もののついでに合流しようと、彼の元へ降りていく
「ディアヴロさん、貴方も夜の散歩ですか?」
「む、モモンガか。空からということは飛翔系の魔術を試していたのか?」
ちなみに、リムルさんの≪思念伝達≫についてだがあれは彼の方から俺達に繋いでくれないと会話できないというデメリットがある。この場に彼がいないため、わざわざ俺の方から近づかなければならなかった
≪伝言(メッセージ)≫という魔法もあるにはあるのだが、ディアヴロさんには≪魔法反射≫という特殊能力があるため、≪伝言≫が反射されて繋がらないのだ。
便利なようでこういう時に不便な能力だよなぁ
「ええ。それもあったですが、俺のいた日本では環境汚染で空が汚れていて、星の浮かんだ夜空を見るなんて初めてなんですよ。それで思わず見とれて・・・・・・って、そういえばレムさんに何してたんですか、一体。声が酒場まで聞こえてましたよ」
「ぬ、ぬう。そこまで響いていたのか・・・・・・」
合流したので、この際お互いに知り得た情報を交換した。話を聞いてみると、どうや

らレムさんのあの嬌声は豹耳を執拗にくすぐられて出た声だったようだ。それ、思いっきりセクハラです

　しかし、レムさんの中に魔王の魂が封印されている、か・・・・・・確かに、それならば力を誇示し続けなければならないのも理解できる。ずっと誰にも言えず、独りぼっちだったんだろうな

「ふむ・・・・・シェラの事情も理解した。しかし、兄妹で子を作るとはな・・・・・」

「ええ、流石にその話を聞いた時は驚きましたよ。それで、ディアヴロさんは今後どうするんですか？」

「うむ、レムにクレブスクルムを粉砕すると約束したのでな。明日、冒険者ギルドに登録しようかと思っている。二人の首輪の件もあることだしな」

　ディアヴロさんはクレブスクルムを倒す事にしたのか。魔王らしく振舞っている彼らしいと言えば、らしい選択とも取れるが単純に放っておけなかったのだろう。相手の事を気に掛けるくらいには優しいプレイヤーだというのは俺でもわかる

「モモンガの方はどうするのだ？」

「それなんですが、シェラさんに一緒に冒険しようと誘われまして」

「ふ、あいつらしいな。恐らく強引に迫られたとか、そんなところか？」

「ええ、なかなかとんちのきいた提案をしてきまして・・・・・ですが、その提案に乗

るのも悪くないと思ってるんですよ。≪ユグドラシル≫の売りの一つであった〝未知の探求〟、それをこの世界でもやってみようかと」
「フッ、外見に似合わずロマンチストではないか。確かに、現実となったこの世界では俺でも知りえない事が多くありそうだ。リムルも誘えばついてくるのではないか？」
確かに、あの人の目的の一つが〝冒険〟だったから案外ついてきそうだな。こちらから誘うのも悪くないだろう
「それもありですね・・・・・・どうせならディアヴロさんも一緒にどうですか？」
「なんだと？」
「無論、クレブスクルムの件が終わってからでもいいのですが、もしもの時は私も頼ってくれて大丈夫ですよ」
「む、むう・・・・・・今まで一人で行動してきたからな・・・・・・パーティを組むなど初めてなのだが、よいのか？」
あー、いわゆるボッチプレイか。この人・・・・・・俺も≪ユグドラシル≫を始めた頃は一人だったもんな。スケルトン・メイジから始めて、途中で人間種のプレイヤー達に襲われて、その時助けてくれたのがたっち・みーさんだった。それをきっかけに、≪アインズ・ウール・ゴウン≫の前身たる≪ナインズ・オウン・ゴール≫が結成されて・・・・・・・

そんな昔の出来事に思いはせていると、ディアヴロさんから声がかかった
「モモンガよ、向こうから団体が来ている。数は１４・・・いや１５人か」
ディアヴロさんの視線にそって、俺もそちらを向く。確かに１５人ほどの、黒いローブをまとった集団が見えた。あのローブには見覚えがある。魔術師協会のものだ。見回りにしては人数が多い気がする。それになんかふらついてる奴も何人かいるな
「酒盛りでもしてたんでしょうか？足元がおぼつかない人がいるようですし」
「フン。絡まれても面倒だ。このまま顔を合わせず通り過ぎるのがよかろう」
ディアヴロさんの言う通りだな。酒場の件もあるし、いちゃもんつけられる前にさっさと通り過ぎよう
俺達は集団に視線を合わせないよう、なおかつ落ち着いた足取りで通り過ぎようとした

「おい、そこの混魔族（ディーマン）と仮面の魔術師」
残念、絡まれてしまった。しかし、ディアヴロさんは面倒だと思ったのかそのまま通り過ぎようとしてたので、俺もそれについていく
「おい!?混魔族ごときが、この僕を無視する気か！そこの仮面もだ！貴様らなんぞ、我らとセレス様の温情で生かされてるだけの寄生虫のくせに！」

寄生虫呼ばわりとはひどいな・・・・・ていうかさり気にまた俺も含まれてるし。流石のディアヴロさんも無視できなかったようで、声を荒げている奴の方を向いた。そこにはセレスティーヌさんの護衛についていたガラクが、顔を赤くしながらこちらを睨みつけている。予想通り酔っぱらっており、見る限り相当飲んでいるのがわかる

「なんだ、小物？」

「ぐっ!?貴様は、本当に無礼な奴だな！僕の名はガラクだ！たかが混魔族の分際で、魔術師協会の長の護衛を務めているこの僕を〝小物〟呼ばわりとは、無礼だろう！なあ、みんな!?」

そうだ！そうだ！と、ガラクの後ろにいた連中が野次の声を飛ばす。この反応を見るに、混魔族は差別の対象になっているんだろうな。そこに酒の勢いが乗っているからなお質が悪い

その姿が不意に、≪ユグドラシル≫でいつも見ていた、異形種狩りを行っていたプレイヤー達の姿と重なった

「何用だ？俺は小物に呼び止められる覚えはない」

「ふ、ふん！そんなこと言ってられるのも今のうちだ。そう、貴様は一目見た時から気に入らなかったのだ！セレス様に対する態度も！レム様に対する態度も！何もかもが無礼だ！」

ひどい言いがかりだな。まあ、ディアヴロさんのあの態度が傲慢だったのは確かだが、どうもそれだけではないように思える。レムさんは確かに優秀な召喚士なのだろう。だが、それでも何か特別な地位にいるわけでもない一介の召喚士のはずだ。それに少々細かいが、あの時はセレスティーヌさんの事を『ボードレール卿』、レムさんの事を『レム・ガレウ様』と呼んでいたはず。腹の中が真っ黒そうだな、こいつ

「そして仮面の貴様もだ! 魔術師協会に所属してもいない、はぐれごときがこの僕に意見しやがって! 三下の癖に生意気なんだよ!」

……本当に、見れば見るほど異形種狩りのプレイヤー達と重なって見える。≪ユグドラシル≫では異形種のプレイヤーを倒す事で解放される職業がいくつか存在する。それを目当てに異形種プレイヤーを狩るものもいれば、ただの憂さ晴らしに狩るものもいる。どちらにせよ、彼らの行動は目に余るものだった。それこそ、今目の前で喚いている彼のように

「・・・・・護衛につけるほどの地位の割には、言動が三下のそれなのですが、これが貴方のいう魔術師協会の威厳というものなんでしょうか?」

「な、なんだと!?」

「ふん、モモンガの言う通りならば正に小物の集まりではないか。騒ぐなら、俺達のいないところでやれ。小物の戯言に傾ける耳は持っておらぬのだ」

「くっ・・・・・・この・・・・・・・・この・・・・・・・・許さんぞ!くふっ」
ガラクが怒りで顔を歪ませたと思ったら、嫌な感じの笑みを浮かべた。さっきから燻っているもやもやした感覚に拍車がかかる
「許さん、だと?」
「ああ、そうだ!僕に・・・・・・いや、僕たちに、そんな口を利いた事を後悔するがいい!」
どうやら、数の利に頼るようだ。改めて周囲を確認するため、相手に悟られないよう小声で魔法を詠唱する
「≪生命感知(ディテクト・ライフ)≫、≪敵感知(センス・エネミー)≫」
魔法で調べた結果、建物内にいる人間を除いてこの場にいる魔術師協会の人間は目の前にいる15人だけ。そして敵だと識別された存在もまた、目の前にいる15人のみだ。実力の程はわからないが、もしも全員が100レベル相当だとしたら、この数は絶望的だろう
「ふん、後悔するのは俺ではなく、貴様らの方ではないのか?」
「ふふん、この後貴様は、僕に命乞いするんだ!見るがいい!」
ディアヴロさんの挑発をただのこけおどしと取ったのか、ガラクは懐から野球ボールくらいの大きさのクリスタルを取り出した

「召喚獣か」
「そうだ！魔術師協会で長に近い地位にいる僕は、召喚士としても優れている！貴様らなど一捻りで潰せるほどの召喚獣を、僕は持っているんだ！さあ、痛い目に会いたくなかったら・・・・・・跪け！僕に働いた無礼の数々を謝罪してもらおうか！」
　どうやらあのクリスタルに召喚獣が入っているようだ。そして、その召喚獣は俺達を倒せると思われるほどの強さを持っているらしい。周囲の取り巻き立ちが、わあわあと盛り上がっている。ていうかあれで長の地位に近いのか・・・・・・どう見ても三下くさいセリフを吐いているのに
「……無礼の数々と言ってますが、礼儀を欠いていたのはそちらのほうでしょうに」
「黙れ！はぐれの魔術師が！大した地位もない奴が、僕に逆らっていいと思っているのか!?」
　確かに、俺達≪アインズ・ウール・ゴウン≫の拠点も、数々の功績も、この世界には何一つ存在しない。≪アインズ・ウール・ゴウン≫を証明するものは実質、この身体（アバター）とアイテムボックスに入ってるスタッフだけだ。相手もまた、そんな事を知る由もない
　……そう、誰も〝知らない〟
「ふん！混魔族ともども、四肢をもいで地面に転がしてやる！そうすれば、レム様も真にお側に侍るべきは誰なのか、本当に役立つのは誰なのか、きっと気付くだろう！」

「俺達の四肢をもぐ、だと？」
「ふはははは！来い、≪サラマンダー≫ッ!!」
ガラクがクリスタルを地面に叩きつける。粉々に砕けたクリスタルの中から現れたのは、ゆらめく炎に包まれたトカゲだった。≪ユグドラシル≫とはまた違った姿だが、あれがこの世界のサラマンダーなのか
≪ユグドラシル≫では初級者が相手をするくらいのレベルの強さだったはずだ。だが、この世界ではどの程度のレベルなのかはわからない。何の情報もなしに突っ込んでいくのは愚策だろう
「街中で、召喚獣とはな」
そう、ゲームであればこういった拠点となる街は戦闘禁止区域に設定されるのが普通だ。しかし、現実となった今そういった誓約はないに等しい。本来ならば警備兵が来るのだろうが、今は深夜だ。夜勤の兵がいても、すぐには来てくれないだろう
「どうだ、レベル３０の召喚獣、サラマンダーだぞ！鉄を溶かす吐息！刃を通さない鱗！巨体に秘められた破壊力！鍛え抜かれた戦士はおろか、鎧を着こんだ騎士すら焼き殺す、最強の召喚獣だ!!」
ガラクが自信満々に哄笑する。
……あれ？聞き違いだろうか、今レベル３０って言った？

確かに≪ユグドラシル≫のサラマンダーよりかはレベルは高い。だが、いうに事欠いて最強って・・・・・・・

これならスタッフに込められている≪根源の火精霊(プライマル・ファイヤーエレメンタル)≫の方が遥かに強い

最大レベル１５０の世界だというのに些か低すぎる気がする。外の森でさえ、適正レベル６０という話だったのにこれはどういうことなのだろうか

そして、この状況にどこか既視感を覚える

「さあ、謝れよ！今なら、ちょっとした火傷で済ませてやるぞー」

「いい加減にしておけ、小物よ。俺を怒らせるな」

流石のディアヴロさんも腹立たしかったのか、低い声で威圧している

「くっ・・・・・・貴様！脅しだけだと思ってるんじゃないだろうな!?」

「お、おい、街中で戦闘はまずいんじゃないか？」

威圧に負けじと、激しい剣幕でガラクが声を荒げる。しかし、流石にこれはまずいと思ったのか取り巻き達が忠告し始める

それに対して、ガラクは止まらなかった。ニタァ、と嫌な笑みを浮かべる

「戦闘？何を言ってるんだ。僕たちがするのは、制裁だ！我らがセレス様に無礼を働き、レム様を不当に隷属させている！この卑しい混魔族と仲間達に対する、制裁だ！」

・・・・・・ああ、そうか。この既視感の正体
似ているんだ。かつて異形種狩りに襲われたあの時の俺と。≪アインズ・ウール・ゴウン≫の始まりと
そして、気づいてしまった
この世界の者たちは、≪アインズ・ウール・ゴウン≫を〝知らない〟
ならば、〝知らしめればいい〟
この世界に、≪アインズ・ウール・ゴウン≫の栄光は〝存在しない〟
ならば、〝打ち立てればいい〟
この世界にギルドの拠点も、かつての仲間達もいないけれど、泡沫の夢で終わらせはしない。
それが、『鈴木悟(モモンガ)』がこの世界に招かれて初めて、唯一望んだ〝願い(わがまま)〟なのだから
俺はこころのままに、一歩を踏み出した

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：ガラク】
「戦闘？何を言ってるんだ。僕たちがするのは、制裁だ！我らがセレス様に無礼を働き、レム様を不当に隷属させている！この卑しい混魔族と仲間達に対する、制裁だ！」

俺の意気に、召喚したサラマンダーが雄たけびを上げる
「シャアアアアアーーーー!!」
蛇のような大音量の雄たけびとともに、無礼な二人組に向かってこいつの必殺技である≪ヒートブレス≫が放たれる。真っ赤な炎が二人を呑みこむ
「ふはははは!どうだ!思い知ったか、混魔族どもめ!燃えろ!燃えてしまえ!」
真正面からまともに受けてただで済むはずがない!仲間達は顔を真っ青にしているが、知った事か!
真っ黒な燃えカスになった奴らの姿が目に浮かぶぞ!!

そして、炎が晴れる

「……その程度か?」
仮面の魔術師が、混魔族の前に、〝無傷〟で立っていた

その日、そこに居合わせた魔術師は語る
あの日の夜、〝死〟が目の前に現れた、と

〝アインズ・ウール・ゴウン〝

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：ディアヴロ】

ガラクの召喚したサラマンダーから炎が放たれる。ただの一般人ならば、この炎に焼かれ消し炭になっていることだろう。だが、レベル１５０のこの俺と、レベル３０のサラマンダーとでは強さに戦車と子供くらいの差がある。少なくとも、それを実証するには丁度いい機会だった

そう思っていたのだが、突如モモンガが俺の前に立ったのだ。俺の盾になるつもりか!?

モモンガはアンデット種。アンデットの弱点には火属性があったはずだ。モモンガならば弱点の対策くらいとっているとは思うが、無茶をする

あまりも突然の出来事だったため、反応が遅れてモモンガが炎に呑まれる様を眺めるはめになってしまった

……大丈夫、だよな？

そんな俺の心配も杞憂に終わる

炎が晴れると、何事もなかったかのように佇むモモンガがいた

「……その程度か？」

モモンガが低い声でガラクに問いかける。その背中から黒いオーラが出るとともに、空気がざわつく。ガラクたちに視線を向けると、ひどく怯えているようだ。そんなにサラマンダーの攻撃が効かなかった事がショックだったのか？

「ど、どういうことだ・・・・・・？さ、サラマンダーの炎が・・・き、効いてない・・・!?」

「どうした、制裁を下すんじゃなかったのか？もしもこれがお前のいう〝制裁〟だというのなら、ずいぶんと優しい男なのだな」

「く、くそっ！もう一発だ！」

再び、モモンガに≪ヒートブレス≫が放たれた。結果は変わらず、モモンガには効いてないようで微動だにしない。

≪ユグドラシル≫のスキルが働いているのかは定かではないが、この世界でもモモンガは相当の強さを持っているのは間違いないだろう。攻撃が効いてない事に焦ったのか、ガラクが周りの連中を怒鳴りつける

「お、おい！お前らも、召喚獣を出せ!!」

「うぅ・・・・・・!?し、しかし、街中でそんな事をしたら、処罰されるんじゃ――――!?」

「いいから!?責任は、僕がとる!早くッ、早く!早くしろよ!?」
ガラクが半狂乱している。だが、その様子は何かに怯えているように見える。周りの連中も同じ様子だ。
まるで、〝目の前に迫る死〟から一刻も早く逃れたそうに。
ガラクの仲間達は次々とクリスタルから召喚獣を出していく。確か≪火の精≫、≪風の精≫、≪水の精≫、≪土の精≫・・・・・・どれもゲームでは最初に召喚できるものばかりだった。サラマンダーであれだったのだから、モモンガならば相手にもならないだろうが・・・・・・
「モモンガよ、俺を庇ったのかどうかはこの際どうでもいいが、余計な「ディアヴロさん」」
いつもの口調で、それでいてしっかりとした意志のこもった声で、モモンガが遮る
「すみません、この世界に詳しい貴方なら問題なかったのでしょう。ですが、ここは俺にやらせてください」
「・・・・・・あの召喚獣はサラマンダーより上かもしれんぞ?」
「そうなのかも知れませんね。貴方であれば情報を知っている分、対処もできるため何の問題もないでしょう・・・・・・それでも、俺はこの〝未知〟に真正面から挑みたい」
言い切ったモモンガが振り向く。骸骨な上に仮面をかぶっているので表情などわか

らないのだが、どこか嬉しそうだ。そんな雰囲気が見て取れた
「これが、俺がこの世界で踏み出す〝最初の一歩〟なんです。すみませんが、俺一人でやらせてください」
「……フッ、よかろう。貴様の〝始まり〟、このディアヴロが見届けてくれる！」
モモンガがそれを聞くと頷き、再び小物達に向き直る。俺もガラク達に顔を向け、戦力を確認する。
ガラクが召喚したサラマンダーに、各種属性の精が１４体。今のモモンガでは負けるはずのない相手であった
「り、理由はわからんが、どうやらサラマンダーの吐息は効かないようだな！しかし、これだけ多くの召喚獣に囲まれた事はあるまい？まあ、これだけの包囲網を布くなんて、人食いの森から魔獣が現れた時くらいか。もはや、〝大災害〟と呼んでもいい事態が起きた場合くらいだ！魔術師協会に楯突いたことを後悔するがいい！」
え、ええ・・・・・いつの間に『魔術師協会』を相手にしている事になってるんだ。そのうち「俺が魔術師協会だ」とか言わないだろうな？
それに、用意した戦力も弱すぎる。レベル６０前後のモンスターがでる『人食いの森』では壁にもならない召喚獣たちだ。このあたりも調査しないと
「……念のため聞いておきますが、〝本気〟なのですか？」

モモンガが本当にやりあうのかと、ガラクに問う。それもそうだろう。魔術師協会というのは、もう少し理性的で中立な組織と思っていたのだ。それが、こんな自分勝手な者が権力を乱用している。信じがたいというのが当然だ

「フ、フ、フフフフ・・・・・臆したか?だがなぁ!この事態は、貴様らが招いたものなんだぞ!?最初から身の程を弁えていれば、死なずに済んだのになぁ!!」

どうやら相手は本気らしい。その反応に、やれやれと言った感じに頭を左右に振る

「……そうですか。ところで、それで全力なんですか?」

「な、なに・・・・・・?」

「だから、それがお前たちの〝本気〟なのかと聞いている」

モモンガの威圧感が、さらに増した気がした。ガラクの顔が恐怖によりさらに歪んでいく。周りにいた連中の何人かは股間を濡らしているほどだ

「や、やれええええ!!」

発狂にも近いガラクの叫びを合図に、召喚獣たちがモモンガに攻撃を仕掛ける。属性攻撃の猛攻がモモンガを襲い掛かるが、この程度ならば避けるまでもないだろう。≪クロスレヴェリ≫には各属性の相性により攻撃の相反が発生する。火の攻撃に対し、水の攻撃で打ち消すといった具合に。連中の発狂具合からして、そんな事を気にする余裕もないのか連携もくそもない波状攻撃だった

「……どうやらこれ以上のものは出ないようだな。次はこちらの番だ」

波状攻撃が一旦落ち着いたところで、今度はモモンガが攻勢に出るようだ。≪ユグドラシル≫の魔法は星降りの塔で見た≪爆裂（エクスプロージョン）≫くらいしか見てないからな、あまり派手な魔法は流石に控えるだろうが少し楽しみだったりしている

モモンガが、サラマンダーに向けて掌をかざした

「≪心臓掌握（クラッシュハート）≫」

魔法を唱えると同時にかざした掌を閉じると、対象にしていたサラマンダーの身体が一瞬震えた後、その巨体が力なく倒れた。巨体ゆえにその振動も大きい

「……は？え・・・・・・お、おい、どうしたんだよ・・・・・・な、なんで倒れ」

ガラクは何が起こったのかわからず、サラマンダーに近づく。すると、サラマンダーが消滅し黒く濁ったクリスタルがその場に転がっていた。召喚獣が倒されるとクリスタル化してしばらく使えなくなる。どうやら、あの魔法で倒されたようだ。何か放たれた様子もなかったし、即死系の魔法といったところか。えっぐいなぁ

「ふむ、倒された召喚獣はクリスタルに戻されるのか。そしてその様子からして、再度使えるようになるにはしばらく時間が必要、と」

どうやら召喚獣の仕様について検証していたようだ。それには、自身の魔法が通用するのかも入っていると思われる。襲われているにも関わらず、なんという豪胆さだろう

か

「は、ひ、ひるむな！ま、まだ一体やられただけだ！な、なにをしているみんな!?今がチャンスだ！こいつを、こいつを倒せ！殺せ！」

向こうも余裕がなくなったようで、なりふり構わずに攻撃を続ける

「……やれやれ、いい加減彼我の戦力差を理解してもいいと思うのだが、仕方ない」

どうやらモモンガの方も決着をつけるつもりらしい。さて、強くないとはいえ、あの数をどう処理するのか見ものだな

「≪爆裂（エクスプロージョン）≫」

向こうの布陣の、丁度中心にいた精を起点に爆発が起こる。俺の≪エクスプロージョン≫と同じ名称の、星降りの塔で検証に使った魔法だった。的になった精の周りにいた他の召喚獣たちもすべて巻き込まれ、クリスタルとなって無力化されてしまう。その上爆発の余波で地面が抉れて石畳が砕け、周囲に飛び散ってしまう。幸い、爆発による死者はいなかったが、余波で飛び散った瓦礫が、ガラクや他のローブの者たちに当たったり、通りに面した建物の外壁を傷つけてしまった

少々やりすぎな気もするが、相手の戦意を挫くには丁度いいか。腰を抜かしてガラクに八つ当たりする者もいれば、泣きわめく者、発狂する者もいる。逃げ出した者も何人かいるようだ

ゲームだったら一週間ほどで通過するレベルが、彼らにとって誇るべき強大な戦力という事実が未だに疑問だが、これくらい蹴散らせれば向こうも絡んでこようとは思わないだろう

しかし、こんな状況の中で意外にもガラクがこちらに声を投げかけてきた

「なんなんだ・・・・・・お前は一体何なんだ!?」

怒りと恐怖が混ざった顔で叫ぶ。モモンガの方に視線を移すと、少し間をおいてその問いに答えた

「……『アインズ・ウール・ゴウン』だよ。かの地では知らぬ者がいないほどに、その名を轟かせていたのだがね」

「……う・・・・・・・あ・・・・・・・」

もはや、恐怖で言葉を発せられないほどにガラク達は怯えていた。むしろ意識を保ち続けているその根性を褒めるべきなのだろう

「さて・・・・・これで互いの実力の差ははっきりしたな?以後、我々に手を出さないというのであれば見逃そう。だが、再び我々に牙を向こうものなら・・・・・」

モモンガの警告とともに、放たれていた威圧感と黒いオーラの量が更に増した。ここまでくると、この威圧感はモモンガのスキルか何かなのだろう。段階を分けられるスキルとか、なにそれ魔王らしい

流石のガラク達も耐え切れずに涙や鼻水を垂れ流しながら逃げていく。中には気絶するものまでいたほどに、このスキルは恐ろしかったようだ
「フッ、貴様の踏み出した〝最初の一歩〟、見事だったぞ。モモンガよ」
「ありがとうございます、ディアヴロさん。私のわがままに付き合ってもらって」
「気にすることはない。むしろ、多少のわがままを聞くくらいの許容の心はあると自負しているぞ」
まあ、なかったと思うが苦戦してるようなら参戦するつもりだったし
「ハハハ、そうですか。なら、もう一つ聞いてもらってもいいでしょうか?」
「ほう? 内容にもよるが言ってみるがいい」
「これを気に、名を変えようと思ってるんですよ。かつて、41人の仲間達とともに築き上げた栄光、『アインズ・ウール・ゴウン』へと。無論、呼びにくいなら『モモンガ』と呼んでもらって結構です。どちらも、私である事に変わりないのですから」
「確かギルドの名だったな。まだ未練は残っているか?」
「ええ、ないと言えばウソになります。ですが、我々がこの世界に招かれたように、かつての仲間達も招かれる可能性がないとも言い切れません。そんな彼らが迷わないように、私がこの名を名乗ることで目印になればと・・・・・・」
ああ、仲間思いなんだな、この人。確かに、他の人が呼ばれる可能性もないこともな

いだろう、たとえその可能性が那由他の彼方であっても。未練がましいと言われれば、そうなのかもしれない。それでも、彼がもつ〝自身の住んでいた日本〟と≪ユグドラシル≫との数少ないつながりであることに変わりはないのだから

「フッ、よかろう。これからは『アインズ』と呼ばせてもらう。異論はあるまい？」

「ええ、これからもよろしくお願いします、ディアヴロさん。そろそろ宿屋に戻りましょうか、流石にリムルさんも探している頃でしょう」

「それもそうだな」

ホント、あいつらが絡んでこなければもっと早く宿屋に戻れたんだよな・・・・・・まあ言っても仕方ない。

そう思って、宿屋に向かおうとした時だった

「ああ、全くその通りだよ。君たち」

リムルの声が聞こえてきた。それも静かな声音で、しかしその声には怒気が込められている

俺達二人はその声のする方へ首をギギギッと動かしながら振り向いた

「帰りが遅いなーと思ってたら魔力反応あって何事かと急いで来てみれば・・・・・・」

ハリセンを肩に担いだリムルが、青筋を立てて仁王立ちしていた。その威圧感はさながら魔王の風格を醸し出しているように見えたほどだ

「リ、リムルさん、確かに魔法は使いましたけど、これには事情が・・・・・・!?」

「そ、そうだぞリムルよ!もとはと言えば、酒場にいた小物達が難癖をつけてきて・・・・・・」

俺達は事の詳細をリムルに伝えようとした。だが・・・・・・

「やるにしても、もうちょっと使う魔法くらい考えんか馬鹿どもがぁ!!」

深夜の街にハリセンで叩かれた甲高い音が二つ響くのであった

シエル先生が一晩でやってくれました

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：ディアヴロ】

翌朝、小窓から差し込む光で目が覚める。昨日は散々だった。魔術師協会に絡まれるわ、リムルに説教されるわ・・・・・・このだるさはきっとその所為だ、そうに違いない

それにしても、やっぱり異世界に来てるんだよなぁ・・・・・見知らぬ天井、見慣れない壁、更には藁にシーツをかけたベッド。ブランケットは蹴とばしたのか、身体にかかっていなかった。目が覚めたらすべてが夢、なんてことにはならなかったか

今は何時だろうか・・・・・ゲームなら時計が画面端のところに表示されていたが、そんな都合のいいものなどない。もう他の四人は起きているだろうか。そういえば、昨日は部屋に戻ってすぐ寝てしまったため前後の記憶があいまいだ。レムとシェラはどこで寝たのだろう?床とかだったらすごく申し訳ないな・・・・・

そう思いながら、身体を起こそうと左右に手をついた

むにっ
もにゅんっ

……よし、落ち着けおれ。落ち着くんだ・・・・・素数を数えて落ち着くんだ・・・・・
この柔らかい感触・・・・・・そんなギャルゲーみたいな展開あってたまるものか。いや、しかし・・・・・・
俺は意を決して、自分の両手に視線を向ける
まず、『むにっ』の方――黒色の薄い衣服だけを身にまとったレム
次に、『もにゅんっ』の方――豊満な身体をゆるいローブだけで隠したシェラ
服の上からではあるが、俺の右手はレムの胸を、左手はシェラの胸を揉んでいた
お、落ち着け！落ち着くんだ！魔王はこの程度でうろたえないっ!!
とにかくっ！二人の胸から手を離さねば！
そう思った時だった。ドアの方からノックの音が聞こえ、開かれた
「ディアヴロさん、もうそろそろ朝食ができるそうで・・・・・・す」
モモンガ改めアインズが入ってきて俺達がいるベッドを見るや否や、固まってしまう。そして
「・・・・・・お邪魔しましたー」

起こさないように気を使ったのかは知らないが、小声で静かに部屋から出て行きドアを閉めた

「お、おい待てアインズ!?これには訳が」

「んー・・・・・・・ディアヴロうるさいー・・・・・・・・」

「……なんですか、騒々しい・・・・・・」

アインズに弁明の機会すら与えられないまま、俺の声で二人が起きてしまった。そして、自分たちの胸に違和感を覚えたのかそちらに視線を移すと、みるみるうちに顔が赤く染まっていった

そんな彼女達に俺が二人にかけた言葉というと

「シェラの胸は揉みごたえがあるが、レムの膨らみかけも至高だぞ」

いい笑顔で声をかけたその後、二人の絶叫が響いた

なお、朝食でリムルに≪思念加速≫で恨みの呪詛を吐かれたのは俺だけしか知らない

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：リムル】

全く・・・・・・ディアヴロくんめ、朝からラッキースケベができてうらや（ゲフンゲフン）けしからん！

俺達は今、酒場の席に座って朝食をとっている。昨日はセレスティーヌが人払いをしたため他に人はいなかったが、今朝は人がごった返している。主にいるのはレムのような獣人やグラス・ウォーカーなどの亜人達だ。人間（ヒューマン）の姿は一切ない。このあたり差別とかありそうだな。さっきからチラチラと視線を感じる。悪意とかそういった視線ではないが、あまりいい気分ではないな

ちなみに、今朝の被害者であるレムなんだが・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・」

黙々と朝食に出されたジャガイモを木のフォークで刺し続けていた。どうやら静かに怒るタイプらしい。ディアヴロくんが謝ろうと声をかけてはいるが、一向に聞く耳を持とうとしなかった。しばらく放っておくのが吉だな

そうそう、モモンガくんの食事の件についても解決済みだ

「……ああ……ジャガイモがこんなにおいしいなんて……このスープも具がそんなに入ってないのに深い味わいが・・・・・・」

今は仮面を外して、昨日門番たちに見せていた顔で出された料理に舌鼓を打っている流石のシエル先生である。今のモモンガくんに適切なスキルを作成してくれた。そ

の名も≪人体構成(アコガレルスガタ)≫。名前の通り、魔力を魔素に変換し、変換した魔素で人体を構成するスキルだ。これにより、以前モモンガくんが検問を通るときに使った幻術と同じ顔の他に人体を構成するあらゆる器官を作り出すことができる。当然、魔力を消費するので時間が限られ乱用はできないが食事をするくらいなら余裕でできるため問題ない。更に食べた物は魔力に還元されるという優れものとなっている。しかし、食事によって還元される魔力の量は微々たるものなので、元を取ろうとするとそれはもう大量に食べないといけないというデメリットがある。効果としては微妙なところだが、食事を可能にするのが目的と言っても過言ではないのでこのくらいで丁度いいのだ

それと、モモンガくんの精神の抑制についても対処済だ。精神は肉体に引っ張られるとはよくいったもので、いかなる状況でも冷静でいられるのはかなりメリットがあると思われるが、それでも楽しみにしていた食事の感動を邪魔されるのは遺憾だろう。そこで、シエル先生がどんな行動をとったかというと・・・・・・モモンガくんの精神体(スピリチュアルボディ)を別の器で保護し、その精神を守るというものだった。

そしてその器に選ばれたのが、モモンガくんが今も所持している≪世界級(ワールド)アイテム≫の宝玉だ（通称モモンガ玉というらしいが命名したやつのセンスはどうなっているんだ）。精神体の移動も可能で、戦闘時などの際は宝玉からアンデット体へ、普段であればアンデット体から宝玉へといった感じに分けて過ごせるようになった

まあ、うん。スキル作成とかご無沙汰だったから張り切りすぎたっていうのもあるだろうけど、シエル先生頑張りすぎです

「あー・・・・・・パンってこんなに柔らかいのか・・・・・・スープに浸して食べると味が染みて・・・・・・」

……モモンガくんも楽しんでいるみたいだし、いいか。シエル先生の能力贈与の時の声を聴いたモモンガくんの驚き様も面白かったし

レムの無言の威圧に耐えかねたディアヴロくんが話題を振る

「そういえば、この宿には亜人ばかりで人間がいないようだが、なぜだ?」

「……亜人の宿に人間は泊まりません」

まだご立腹なのか、ジャガイモを惨殺しながら淡々とレムが答える

『設定どおり、人間の領土では亜人達は嫌われ者のようだな。ゲームではそのような風潮なぞなかったからあまり意識してなかったが・・・・・・』

『それはプレイヤーが『人間』だったからでしょうね。同じ人間がプレイしているのだから種族差別なんて起こり得なかったんでしょう・・・・・・そう考えると、俺がプレイしていた≪ユグドラシル≫のプレイヤーは相当異質に思えてきました。異形種プレイヤーというだけで躊躇なくP（プレイヤーキル）Kを仕掛けるほどでしたし』

うわぁ・・・・・・自由度の高いゲームと聞いていたがマナーもエチケットもない

な・・・・・・

　これはラミリスやヴェルドラを連れてくるのはやめた方がいいかもな・・・・・・あいつらなら絶対に騒ぎを起こす。間違いなく起こす。特にこの世界の人間、特に貴族階級の奴には気をつけておかないと。差別が特にひどいのがそのあたりの人間だろうし

「あ、そういえばこの国・・・というよりも、この世界にはレベルという概念が存在しているんですか？」

　モモンガくんが思いついたように、レムに質問する

　あ、それは気になる。レベルなんてゲームの仕様みたいな概念で強さを測っているのなら、その計測方法もあるはずなのだ

「……ええ、確かにわたし達はレベルで各々の強さを測っています。ちなみに、わたしはレベル４０の召喚士です」

「レベル・・・・・・あたしは、ない・・・・・・・かな」

　シェラが気まずそうに、レムは多少機嫌が直ったのか得意げに答える。ナイスだ、モモンガくん。意図せずとは言え、雰囲気がよくなった

「そのレベルはどうやって測ってるんだ？目視で測れる訳じゃないだろうし、計測できる魔道具とかあると思うんだが」

「……魔術師であれば、魔術師協会が定める基準があります。リムルさんのおっしゃる

通り、レベルを判定する方法があるのですよ。他の職業には詳しくありませんが、冒険者協会にいる試験官が決めるのだとか」
「そうそう!だから、あたしのレベルがないのは、まだ冒険者登録してないからで、レベルを測ったらきっと４０か５０だよ!」
　シェラが意気揚々とそのエルフ耳をひょこひょこと動かしながら宣言する。その耳動かせたのか
　そんなシェラを見たレムのしっぽが左右に振られる。まるで、ナイナイと手の代わりに否定しているようだ
「……どう考えても、あなたのレベルは１０かそこらです・・・・・・基準より１０は低いでしょう」
「そんなことないもん!エルフの国の協会では、４０だったんだから!」
「……エルフの国で、魔術師の判定が?」
「えっと・・・・・・その・・・・・・射手として」
「……それって召喚士にならなくても射手として登録したら普通に活躍できるんじゃないのか?」
「射手は独りっきりなんだよ!?召喚士だったらカワイイ召喚獣がいっぱいいるじゃん!暗い夜の森とかも寂しくないもん!」

「……あなたは可愛い召喚獣が欲しかったのですか・・・・・そうですか、そうですか。それではディアヴロもモモンガもリムルさんも要りませんね。そもそも、召喚獣ではないですし」
「強さも必要なの！」
　……また喧嘩が始まった。まあ、ギスギスした空気になるよりかはいいか
「ああ、そういえば皆さんに折り入って頼みたい事があるんですが」
「どうしたんだ？改まって」
「実は、昨日決めたことなんですが名前を変えようかと思いまして」
　おや、どういった心境の変化だろうか。まあそのくらいなら別に構わないんだけど
「え？どうしたの急に」
「この世界でやりたい事が決まったんですよ。これはその為の、誓いのようなものですね」
「へぇ、決まったのか。それで、どんな名前にするんだ？」
「これから私は、『アインズ・ウール・ゴウン』と名乗ることにします。そしてこの名を、世界中の人々に轟かせたい」
　確かその名前はモモンガくんが所属していたギルドの名前だったな・・・やはり捨てきれなかったか。だが、それでいいのかもな。昨日の一件がきっかけだったのかもしれ

ないが、彼が選んだ道だというのなら俺達がとやかくいうのも野暮というものだろう
「……そうか、頑張れよ。こればっかりは俺達が余計な手を出すわけにもいかないしな」
「ええ、それは理解してますよ。私の〝わがまま〟に貴方方を巻き込むなんてできませんし」
「でもでも！あたしがモモンガ・・・じゃなかった、アインズについていくならいいんだよね!?」
　あ、そうきたか。確かに勝手についていく分には問題ないんだろうが・・・・・・この子結構図々しいな。いやまあモモンガくん改めアインズくんがいいならそれでいいんだが。あ、レムがムスッとしてる
「まあ誰についていくにしても、先立つ物がなければ話にもならん。食べ終わったら冒険者協会にいくぞ」
「そう、そうだよ！あたしも冒険者登録して稼がなきゃならないの！アインズ達が一緒なら安心だよ！」
　こいつさり気に俺とアインズくんも一緒に行く事にしやがった。確かに俺も路銀稼ぎに登録しようとは思ってたけども、強引なところがどこかの冒険者三人組パーティの紅一点とそっくりだな
「……バカエルフは放っておいて、わたしも冒険者協会に三人を連れて行きたいと思っ

ていたところです。特に、三人のレベルが気になります」

そういえば俺のレベルってこの世界で測れるのか・・・・・計測不能とか言われたら間違いなくひと悶着あるだろうな。ま、レベルの計測方法知ってから考えるか

そう思いながら、マッシュポテトにされていない最後のジャガイモにフォークを刺した。この時、アインズくんも狙っていたらしく取られた事に落胆していた

ふふん、あいにく食に関して俺は一切妥協しない男なのだよ

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：アインズ】

レムさんの案内で、俺達は今冒険者協会の前にいる。冒険者協会はファルトラの西部に位置しており、宿屋からはそんなに離れてない位置にあった。他の建物の三倍か四倍くらい大きな建物だったので一目でわかるのは助かる

大きな扉をくぐり、中に入るとどうやら一階は酒場になっているようだ。しかし、内装は宿屋のそれと共通点はあっても、いたるところが汚れていたり、カウンターや椅子などに破損が見られる。

酒場の荒れようを見る限り、ここにいる冒険者は血の気が多いようだ。今も、掲示板のような大きな板の前で言い争っていたエルフの女性とドワーフの男性が喧嘩を始め

る。なんだこの世紀末臭漂う場末の酒場は・・・・・・・

『これは・・・・・・・シェラさんが一人で来たがらない訳ですね』

『ぬぅ・・・・・・これが〝ゲーム〟と〝現実〟の違いということか。しかし、ここまで荒れているとは思ってなかったぞ』

『まあこっちにも似たような組織があったけど、割と雰囲気近かったな』

うーん、冒険者ってそういった人達がなる職業なのか・・・・・・これはまた絡まれそうだな

って、そう思ってたらこっちに気づいた人がいた

「……なんだ、あの混魔族(デイーマン)？」

「角が生えている者など、見たことがねぇな。それにあの怪しい仮面の魔術師、まさか魔族じゃねぇだろうな」

「一緒にいるのはレムさんと、あの姓を持つエルフのお嬢ちゃんだよな？レムさんもエルフの嬢ちゃんもかなりの腕だったはずだが・・・・・・？」

「あれは、隷従の首輪だよな？まさかもう一人の嬢ちゃんも？」

「あいつら、何者だ？」

でっすよねー・・・・・・まあ、いきなり絡んでこなかっただけマシか

『くっ・・・・・昨日からそうだが誰か俺が男だと気づいてくれる奴はいないのか・・・・・・

!?』

リムルさん、それは俺達ではどうにもできないんで何とか頑張ってください

レムさんが騒動を無視して階段を指差した

「……行きましょうか。少々騒がしいですが・・・・・・いつものことです。冒険者登録は二階のカウンターです」

「う、うん」

俺達三人は階段へと向かう。このまま何事も起きませんよーに・・・・・・

「待て、そこの角の生えた混魔族と怪しい仮面の魔術師！」

残念、また絡まれてしまった。

振り向くと、煌めく黄金の鎧を身にまとった人間の青年がいた。腰にはロングソードが提げられている

「……エミール」

「げげ」

レムさんとシェラさんが嫌な顔をしている。知り合いみたいだが、友達という関係でもなさそうだ。エミールと呼ばれた青年は、ディアヴロさんの顔をまじまじと見て、フッと笑う

「悪そうな面をしているな」
「なんだ、こいつは?」
　エミールの挑発とも取れる発言を気にも留めずに、ディアヴロさんがレムさんに尋ねる
「……この人は、冒険者協会で一番強いと言われている戦士です。戦士系職業の試験官も務めているはずです」
　結構偉い人だった。しかも冒険者協会で一番強いとは・・・・・見かけで判断できないものだな。だが、実際の強さはどのくらいなのだろうか。ガラクの件もあるからな・・・・・・
「その通り!俺様の名前は『エミール・ビュシェルベルジェール』!レベル５０を誇る≪怪力戦士≫である!」
　レベル５０・・・・・・昨日のサラマンダーよりかは強いが、これで冒険者で一番強いとなると他の冒険者達の実力もそこまで強くないのか。この辺りって本当に適正レベル６０の地域なんだろうか
「それで、エミールさんでしたか?我々に何が御用でしょうか?」
「ふ、知れたこと。お前たちは知らないだろうが、俺は女性が大好きなのだ!」
「「は?」」

見事に俺達三人がハモった。いや、初対面の俺達に何言ってんのこの人

「レムちゃんとシェラちゃんに首輪をつけて連れ回す貴様らを、俺様は許せんのだ！その二人を奴隷にするなど、貴様らは余程あくどい事をしたに違いない！」

うわぁ、そう捉えるのか・・・・・・いつの間にか冒険者たちが集まってきており、エミールに同調するように「そうだ、そうだ」と声があがる。ていうかあっちの喧嘩終わったのね

「あまつさえ、そこのお嬢さんまで無理やり連れてきて！二人のように奴隷にするつもりか悪「誰がお嬢さんだ、キザ野郎!?」へぶぅ!?」

とうとう切れたリムルさんがエミールの顔面を、ハリセンでぶっ叩いた。昨日から思ってたんですが、そのハリセンどこから取り出してるんですか

「・・・・・・あっ、いけね。ついやっちまった」

フラストレーション相当たまってたんですね、リムルさん

◆◇◆

【とある三大魔王の思考会議その7】

リムル『エミール・ビュシュビュッくそっ!?』

アインズ『エミール・ビュビュッくぅ、噛んでしまった』

ディアヴロ『エミール・ビュシェルベビュッくそっ、惜しい!?』

『『・・・・・・あいつ、よく噛まなかったな』』

〝怪力戦士〟

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：ディアヴロ】

リムルのハリセンによる見事な一撃がエミールの顔面に入った。本当に何製のハリセンなんだ・・・・・・エミールと名乗った戦士が痛みに悶えているぞ

「ふっ・・・・・・ぐぉぉぉ・・・・・・!?一体何をするんだお嬢さん!?そこの悪漢どもから、君を救おうとしたというのに!?」

「まだいうかこの野郎!?俺はれっきとした男だ!!」

「「なん・・・だと・・・・・・!?」」

他の冒険者達も、リムルが女性じゃないと知って驚いている。一目見ただけじゃわからないよな・・・・・・

「くっ、そうか・・・・・・その可憐な顔で二人をだまして隷従したのか！この外ど「話くらい聞けぇ!!」ぐほぉ!?」

エミールの更なる勘違いに、再びリムルが突っ込んだ。きれいな放物線を描いて飛ぶ様は逆に芸術に思える。その光景に周囲の冒険者達があり得ないという表情をしてい

る。そういえば、ここの冒険者の中で一番強いという話だったな。そんな奴がハリセンでいいようにしばかれてるんだから当然か
「ぐう、見た目に反して中々やるみたいだな!」
「……あの、エミール。この首輪は実は」
「大丈夫だ、レムちゃん。この俺が絶対に解放して見せる!」
……ああ、二人が嫌そうにしていた理由が分かった。要はお節介で、しつこいのだ。本人は善意のつもりなんだろうけど
「だから、話を聞けって。別に俺達は、二人を奴隷にした訳じゃない」
「ふん、言い訳など見苦しいぞ!」
ダメだ、向こうは聞く耳を持ってくれない。リムルもどうしたものかと呆れている。だが、事情を素直に話すのも悩むところだ。シェラは恥ずかしさからだろうが、レムの場合優秀な召喚士がイレギュラーとはいえ、隷従の首輪をかけるつもりが逆にかけられましたでは、恥ずかしいどころではない。現に二人とも、打ち明けるのを戸惑っている
……仕方ない。事故とはいえ、責任はとるべきか。それに確認したい事もある
『全く、どうしたもんかな・・・・・・』
『リムルよ、ここは俺に任せてもらおうか』
『え、大丈夫なのか?』

リムルが意外そうに聞き返してくる。確かに門の一件があるから、そう思うのも無理はないだろうが、ちょっとは信用してもらいたいものだ

『首輪の件は事故とはいえ、俺の反射が原因だからな。二人まで汚名を被る必要もなかろう』

『え、ディアヴロさん・・・・・・まさか』

アインズは気がついたようだな。その通りだ、魔王は魔王らしく傲慢に振る舞うだけだ！

「女に首輪を着けた程度のことでいちいち騒ぐな。雑魚が」

「ハッ、それが本性か混魔族（ディーマン）！二人を解放したくば力づくで来いと、そう言いたいのか!?」

エミールが挑発に乗ってくれた。計画通り

もっとも、レムとシェラはもちろん、アインズとリムルも驚いたようにこちらを向いている

『うぉい!?挑発してどうする気だ、エロ大魔王！』

『ええい、今朝の惨事を持ってくるな!?それに考えなしで挑発した訳ではない！』

『どういうことです？』

『小物に絡まれた時から疑問だったのだ。この街の魔術師や冒険者のレベルが低すぎ

る。ファルトラの街は《クロスレヴェリ》プレイヤーからすれば”序盤の終わり”であり、ここから西に広がる魔族の領地に入ってからが本番なのだ』
『確かに、この近辺の適正レベルが６０だというのに、それに対してレベル３０程度のサラマンダーとそれ以下の召喚獣十数体では壁にもならないはずですよね』
　そう、それほどにレベル差の強さというのは大きい。適正レベル６０のこの街であの程度の強さというのなら、魔族はおろか人食いの森のモンスターにすら苦戦は免れない。あの戦力でよくもったと、逆に賞賛すべきなのか
『昨日はアインズに譲ったが、あの時は小物を使って強さの検証を行うつもりだったのだ。見たところ、奴は相当おせっかいなようだしな、乗せるのは容易い。それに、この冒険者協会の中で一番強い奴をねじ伏せたとなれば、絡んでくる馬鹿者も減ることだろう』
『あー、成程。確かにけん制にはなるのか。これだけ見物人がいれば広まるのも早いが・・・・・・逆に挑戦者みたいなの来ないか？』
『フンッ、魔王は挑戦者を迎え撃つものだろう？』
　俺の答えに、リムルはおろかアインズも呆れてる。ゲームではいつもの事だったし、むしろ懐かしく思えるんだから仕方ない
「来るならいつでも来るがいい。邪魔をするというのなら、蹴散らすまでだ」

「レムちゃんとシェラちゃんに無理やり付けた首輪！外してもらうぞ！このエミール・ビュシェルベルジュールは全ての女性の守護者である！女性の前で、俺様が倒れる事はないと知れ！」

エミールが高らかに宣言し、提げていたロングソードを引き抜いて腰を低く落とす

あの構え・・・・・・≪ソードスマイト≫か

戦士系や射手系の職業は≪武技≫と呼ばれる特殊技を習得する事ができる。これは魔術のようにＭＰ（魔力）ではなくＳＰ（気力）を消費する事で放つ攻撃、もしくは防御や移動技の総称だ。しかもＳＰはＨＰやＭＰと違ってかなり早い速度で自動回復する。レベル５０ともなればそれなりの武技を習得しているはずだが、≪ソードスマイト≫から何に派生させる気なのか・・・・・・

本来、≪ソードスマイト≫とは一瞬で敵の目の前まで接近し、剣による強力な横薙ぎを繰り出す武技だ。しかし、モンスター戦ならともかくプレイヤー相手に横薙ぎなど、簡単に当たるものではない。慣れたプレイヤーならば、≪ソードスマイト≫の突進部分だけを使い、横薙ぎをキャンセルして次の攻撃に繋げるといったテクニックを用いる。いつもだったら、突進を防ぐために魔術で迎撃をするところだが、流石に建物内部でそんな事をすればただでは済まないのは目に見えている

「ふんっ、面倒な・・・・・・」

「いくぞ、混魔族！二人を解放してもらうっ！」
エミールが突進してきた。さて、何が来るか・・・・・・・
横薙ぎを――――キャンセルしないだとっ!?
俺はとっさに、召喚された時に持っていた≪天魔の杖≫で横薙ぎを受け止める。レベル差によるおかげか、吹き飛ばされる事はなかった。エミールが驚いた顔をしている
「ほう、これを受け止めるか！魔術師が！」
「俺を甘く見たのか？」
「馬鹿にするな！俺は全ての女性の為、常に全力を尽くす！」
そう言いながら、エミールが剣を大きく振りかぶる
あの構えは・・・・・・≪アルプスフォール≫!?馬鹿な!?
≪アルプスフォール≫とは、威力は高いが発生までの時間が長いという欠点を持った武技だ。この至近距離でそんな技を使えば、「どうぞ殴ってください」と言っているようなものだ。ゲームでも操作ミスした時くらいしかお目にかかれない大惨事である
「せいっ!!」
「がっ!?」
隙だらけのエミールを、俺は杖を棍のように使って殴り飛ばす。武技は習得していないため、杖による通常攻撃だ。ただし、レベル１５０の筋力による。

吹き飛ばされたエミールは壁板を砕いて、肺から空気を出す。崩れ落ちて、二階に続く階段の横で膝をついた

周りにいた冒険者達がしん、と静まりかえる

『なんということだ・・・・・・・まさかこれほどまでにプレイヤースキルも低かったとは・・・・・・』

『確かに、あれだけ隙があったら殴ってくれと言っているようなものだろうに・・・・・』

『≪ユグドラシル≫でも滅多にない光景ですよ、これは・・・・・・』

レベル以前に、技術が伴っていなかった。いや、俺が魔術師だから油断してやらなかったのかもしれないが、これが本当に全力だというのなら話にならない。これの程度で冒険者の中で一番強いとなると、周りの冒険者達の実力もたかが知れる

しかし、これで終わりかと思いきや

「ぐおおおおっ!!この俺様が!女性の前で倒れるなど!あり得んッ!!」

エミールが気合で立ち上がった。意外と根性の男だったらしい。足をがくがくさせているけど

レベル５０の戦士ならば当然か。魔術師の通常攻撃で行動不能にできないのは確認できたが、彼が大技を使わずに隙の少ない連続攻撃で攻めて来たら、流石に建物を気遣って魔術を使わずに勝つことは不可能だろう

「ククク・・・・・・次は手加減できんぞ?」
「それは俺も同じ事!俺様は協会一の≪怪力戦士≫エミール・ビュシェルベルジュール!全ての虐げられる女性のため!この命尽きるまで、俺様は剣を振るう!」
ちょっと脅してみたが、向こうに引く気はないようだ。どうしたものか・・・・・・・
そう思った時、レムが静かに呼びかけた
「……エミール」
「安心しろ、レムちゃん!この悪逆無道の混魔族たちから解放してやるからな!」
「……もう止めてください。はっきり申しましょう。この隷従の首輪がはまってしまったのは、私の失敗が原因なのです」
「え?・・・・・・・そ、それは・・・・・・どういうことだい?」
「……詳しくは言いたくありませんが、わたしとシェラは失敗して・・・・・・召喚獣に与えるべき首輪を自らにつけてしまったのです」
……言わせてしまったか。レムが唇を噛む。シェラも泣きそうな顔をして、頬を赤く染めている
二人の名誉の為だったとはいえ、彼女は俺とエミールの戦いが、これ以上激化するのを見過ごせなかったようだ
「……この隷従の首輪を外すことに、彼らは協力を約束してくれています」

「な、なんだって!?」
「……まあ、そういうことだ。今はまだ解析中で解除できる状態じゃないから、セレスティーヌさんの方にも調べてもらっている」
「……もしかして、俺は」
「早とちりってことだな。分かったなら、剣を収めてくれると助かるんだが」
エミールの声が弱々しくなり、寒々とした空気が流れる
『……なんだか気の毒ですね。勘違いだったとはいえ、レムさん達を心配していたのは本当の事だったでしょうし』
『まあ、レムが言い出してくれなかったらあのまま戦闘が激化してただろうし、結果オーライさ』
俺達が言っても、相手が聞く耳を持っていなかったからな。レムが止めてくれなかったらその通りになっていただろう
そして、しばし沈黙していたエミールが――――笑い出した
「ふ、ふふふ・・・・・よかった！隷従の首輪を無理やり付けられている女性は、いなかったんだな！」
『『この野郎、美談のようにまとめやがった!?』』
実に清々しく、爽やかな笑顔だった。前向きというかなんというか・・・・・本人

が納得しているならそれでいいか
「なあ、混魔族よ、名はなんという?そこの二人もよければ、教えてくれないか?」
「ディアヴロだ」
「俺はリムル＝テンペスト。今回は勘違いで済んだが、今度からはちゃんと男でも事情は聴くようにな」
「うむ、善処しよう・・・・・・・ところで、君は本当に男なのか?」
「まだいうかこの野郎!?」
「ハハハ・・・・・私はアインズ・ウール・ゴウンといいます。見た目通り魔術師ですので、よろしくお願いします」
「ああ。我が名はエミール・ビュシェルベルジュール!全ての女性と、女性の味方の味方だ。つまり、お前たちがレムちゃんとシェラちゃんの首輪を外す事に協力しているならば、お前たちの味方でもある!」
「お、おう」
　リムルが若干押され気味に答える。まあ悪い奴ではないようだし、厚意は素直に受け取っておこう
「いきなり斬りかかって済まなかった!戦士の力が必要なら、いつでも俺様を頼るがいい!まあ、お前とリムルも、なかなかのものだったがな!」

「ま、その評価は有難く受け取っておくよ」
「そうか。冒険者登録に行くのだろう？邪魔をして悪かったな。戦士系の職業を選ぶのなら、さっきの攻撃で判定しよう・・・・・・ふむ・・・・・・ディアヴロはレベル４０、リムルはレベル５０以上といったところだな！」
　周囲がざわつく。おいおい、この程度のレベルで驚くなんて、本当にこいつらのレベルはそれ以下なのか・・・・・・スタート地点にある街じゃないんだぞ
「ちょっと待った。二回も叩いたとは言え、そこまで強くやった覚えはないぞ？」
「何を言っている。変わった武器だったのは確かだが、リムルの動きは素人のそれでないことくらいわかるぞ」
　む、そこはレベル５０の戦士といったところか。リムルがただ者ではない事は感じ取れたらしい
「へー、流石に協会一の戦士というだけはあるんだな・・・・・・正直ただの女好きかと思ってた」
「フッ、それほどでもないさ」
「悪いが俺は魔術師でな。戦士系で登録するつもりはない」
「何!?それは残念だな。・・・・・・まあ、仕方ないか・・・・・・よし、冒険者として初任務を終えたら俺様を訪ねてこい！祝いに、なんでも奢ってやろう！」

「おっ、太っ腹だな。なら、お言葉に甘えてそうさせてもらうよ」
「フッ、気が向いたらな」
「楽しみにしてますよ、エミールさん」
エミールに送り出されて、俺達は二階への階段を上っていく。レム達も隣に並んでいく
「……エミールは悪い人ではないですし、実力は確かなのですけど」
「なんだかあの人、バカっぽいよねー」
「……そうですね」
シェラの言い分に、レムはもの言いたげだった。なんとなく言いたい事はわかる
アクシデントはあったものの、いよいよ冒険者登録だ
『まるで強くてニューゲームをしている気分になるな』
『あ、その気持ちはわかりますよ。ゲームが違うとはいえ、始めた頃のわくわくを思い出しますよね』
アインズも共感してくれたようでうれしく思う。広く浅い階段を上ると、ゲームで見覚えのある二階にたどり着く
◆◇◆
【ｓｉｄｅ：リムル】

二階にたどり着くと、そこはロフトのような造りになっており、二階から一階を見下ろせる。そして、冒険者協会のカウンターがあった。構造は銀行や役所に似ているだろうか。木製のカウンターと、受付の三人の少女が立っている。

『ゲームならば、右から順に≪初級クエスト≫、≪上級クエスト≫、≪ストーリークエスト≫を紹介していたな』

『なるほど、それにしても受付の子って姉妹のように顔がそっくりですね。服の色以外見分けがつきませんよ』

『うむ、設定では三つ子だったはずだ。特に右の受付嬢は、プレイヤー達の間では『青い子』と呼ばれていてな。初級クエストを全て終わらせたら「青い子を卒業！」などと言ったものだ』

『へー、プレイヤー達から愛されてるんだなぁ』

背がちっさくて、それでいてグラマーな体系・・・・・・まさに眼福だな！

レムから突き刺さるような視線を感じたがきっと気のせいだな、うん。気のせいだ≪・・・・・・・・・・≫

シエル先生からも無言の圧力がかかってる気がするのもきっと気のせいだ！

「冒険者登録はどのカウンターで行うんでしょうか？」

「……冒険者登録は右のカウンターで行います」

アインズの質問に、レムが答えて案内する。青い子のカウンターに行くと、どうやら慌てていたらしく、机の上に広げていた書類を片付けようとして、床へと落としてしまった

「あわ、あわわわわわわ・・・・・・」

「すみません。冒険者登録をしに来たのですが」

「ひゃっ、ひゃい!?ぼぼ、冒険者登録でしゅね!?」

青い子は見事に噛みまくってる。恐らく、気の弱い子なのだろうな。アインズの怪しい仮面にビビりまくっていた。その隣にはディアヴロもいる。彼も結構人相怖いからな、余計に委縮しているんだろう

そこへ、レムが横から口添えをする

「……彼らは私の知り合いなのです」

「ああ、レムさんのお知り合いなんですか。ほっ・・・・・・それなら、大丈夫そうですね。よかった。恐い人だったら、どうしようかと思いました」

「……恐ろしい人ではありましたが」

レムが、指先で耳をなでた。ああ、ディアヴロくんにセクハラされた事を引きずってるんだな。少し頬が赤い

ディアヴロが気まずさから、咳払いをする

「早くしろ」
「え、えっと、それではお名前を」
「とうとう冒険者登録するんだね！ねえ、ねえ、あたしが先にやっていい？」
　シェラが、嬉しそうにディアヴロの横から顔を出してねだってっくる。ついでに俺達の分も書いてもらうか
「シェラ、悪いけど俺達の分もついでに書いてもらっていいか？俺達、この国の文字が書けないんだ」
「そうなの？じゃあ、あたしのが書き終わったらやっておくね！」
「フン、勝手にするといい」
「あ、あのー・・・・・・」
　俺達のやり取りに、青の子が物申したそうに手を上げる。何か不都合があったか？
「何かまずかったか？」
「い、いえ。代筆はいいんですが・・・・・・サインと血判だけは本人がしていただかないといけないので・・・・・・」
「血判なんて必要なんだ!?」
　シェラが驚いている。まあサイン自体は本人が書かないといけないよなぁ
『それにしても血判が必要なのか』

『ふむ、設定にもなかったが、流石にプレイヤー登録の事までいちいち書かないか』
『血判なんて初めてしますけど、うまく切れるかな・・・・・・』

・・・・・・・・・・・・・・・

『・・・・・・・血判？』
どうやら俺達の苦難はまだ続くようだ

◇◆◇

【とある三大魔王の思考会議その８】
『いやー、それにしても受付の子スタイルいいなー。眼福、眼福』
『いやらしい視線向けてると、そのうちセクハラで訴えられますよ？』
『そこまで見つめないって。ディアヴロくんじゃあるまいし』
『リムルよ、さらっと引き合いに出すんじゃない!?』

一難さってまた一難

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：リムル】

受付の青い子の注意に俺とアインズは戦慄してしまう。何がやばいって登録に血判が必要だということだ。そう、『血』が必要なのだ。俺はまだいい。スキルで血液もどきなんて簡単にできる。だが、アインズは別なのだ

アインズの見た目はまんまスケルトンなので、当然血液なんてある訳もない。加えて、彼に贈与した≪人体構成（アコガレルスガタ）≫は魔素を変換して、人体のあらゆる器官を構成するスキルだ。無論、構成した器官が作り出す体液、例えば胃液などを生産することも可能だ。しかし、これには唯一欠点がある。魔素で構成した物質が本体から離れると、魔素に戻って空気中に霧散してしまうのだ。もちろん、布なんかに染みついた〝血液〟も何もついてないかのように綺麗さっぱり消えてしまう

その事はアインズはもちろん、ディアヴロにもしっかり説明してある

『リ、リムルさん。確か俺にくれたスキルって血液は生成できても、身体から離れたら消えるんですよね・・・・・・？』

『ああ。血液に関しては、俺が〝もどき〟を作れるからそれで何とか誤魔化せる。問題なのは・・・・・・』

俺はちらっと、登録用紙に書き込んでいるシェラについている受付の青い子に視線を移す

『第三者に秘密がばれる事なんだよな・・・・・・』

ただでさえ魔族の領域が近いのに、アインズの正体がアンデットなんてバレた日にはもうお察しの展開が待ち構えている。そんな展開は俺とアインズはもちろん、ディアヴロもまっぴらごめんである

『リムルよ。血液の紛い物は作れるのだな?』

『ああ。だが、俺よりも問題はアインズくんの方だ。スキルで血液は生成できても身体から離れたら魔素に戻って霧散してしまう』

『そうなると、誰にも見られずに尚且つ迅速にリムルの〝もどき〟をアインズの血判に使わねばならぬのか・・・・・・他の受付の目もある以上、時間を止めでもしない限り難しいぞ』

『時間を止め・・・・・・あ!そうだ、その手があった!』

お、アインズくんが何か秘策を思いついたようだ。俺達はそのまま、≪思念伝達≫で打ち合わせを行い目の前の苦難に挑んでいく

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：アインズ】

俺達は思考会議を終え、リムルさんに〝とある〟装備を渡した後は来るべき時を待つ。シェラさんが必要事項を記入し、青い子に確認してもらう

「はーい。えっと・・・・・・シェラ・Ｌ・グリーンウッド・・・・・出身は、グリーンウッド王国・・・・・・」

青い子が妙な顔をする。そりゃあ王族の姓を見れば誰だってそうなるよなぁ

確認が終わると、今度は職業適性の希望を聞かれる。≪戦士≫、≪射手≫、≪魔術師≫の三つの中から選ぶらしい。無論、全部受けても構わないそうだ。シェラさんは当然、召喚士が分類されている≪魔術師≫を選択する。契約書の説明事項も渡され、確認が終わると署名のサインと血判を押した

「後は適性検査だけだねー。レム！絶対あんたより上のレベルになって見せるからね！」

「……無理に決まってます」

「あ、親指の傷を治して頂戴！なんか治癒系の召喚獣とかいるでしょ？」

「……唾でもつけておきなさい」

「ひどいよ!?」
「それくらいの傷なら、私が治癒のポーションを出しますよ。私自身、あまり使ってませんでしたし」
丁度、下級治癒薬（マイナー・ヒーリング・ポーション）が余っていたので（アンデットだから逆にダメージを受ける故）、赤い色のポーションを取り出す。星降りの塔での二人の反応から、青い子に見せるのはまずいと判断し、虚空からアイテムが出ているところを見られないように、袖の下から取り出す演技もいれる。
しかし
「ほんと!?ありがとう、アインズ・・・・・・って、そのポーション赤いね。確か治癒のポーションって緑色だった気がするんだけど」
「えっ!?あ、これは私の国で作られているポーションなんで、多分材料の違いか何かなんでしょう」
『迂闊だぞ、アインズくん!?』
『す、すみません!?』
う、迂闊だった・・・・・・そりゃゲームが違えばアイテムの外見も違う可能性くらいあるよ。なんで気づかなかった俺!?
ま、まあポーションを少量傷につけたら瞬く間に傷がふさがったから良しとしよう

「それじゃあ、三人の分も書いてくね！誰から書くの？」
「俺から先に書いてもらおう」
「うん！えっと・・・・・・・名前は、ディアヴロ・・・・・・・で、苗字は？」
「そんなものはない。俺は・・・・・・唯一絶対の存在だ。それとも、苗字がなければならんのか？」
「い、いえ！その・・・・・・混魔族（ディーマン）の方は、お辛いことも多いですしね・・・・・・あ、あの！出身国も、空欄で構いませんので！」
　ディアヴロさんの質問に何か勘違いをしたようだ。青い子の視線が憐れんでいるような気がする
『出身国・・・・・・俺の場合は≪ユグドラシル≫にした方がいいんでしょうか？』
『いや、下手に答えて探られても面倒だろ。ディアヴロくんみたいに空欄で行こう』
　そして、ディアヴロさんの適正検査は当然≪魔術師≫を選択する。記入し終わると、シェラさんがどいてディアヴロさんに羽ペンを渡す
「はい、後はサインと血判ね！」
「うむ」
　ディアヴロさんはサインを書こうとしたが、先に契約の説明事項を青い子に読み上げさせた。俺も利用規約とか真剣に読むタイプではないが、ちゃんと確認しないと後で痛

い目を見そうだ。しっかり聞いておかないと

聞いていくと、死亡や怪我に一切の責任を負わないとか、冒険者協会の規則よりも国の法律や街の条例が優先だとか、理不尽な内容はなかったので一応は大丈夫だろう。近いうちにこの国の法律も調べておかないとな

ディアヴロさんも納得したようで、サラサラと筆記体で自分のサインを書いていく

『・・・・・・結構すんなりかけるんですね。練習してたり？』

『アインズくん、きっと黒歴史だ。それ以上聞いてはいけない』

『お前も一言多いぞ』

サインが書き終わると、ディアヴロは血判用のナイフに手をかける。そして目を瞑った後、勢いよくナイフで親指を切った。深く切ったようで、血がドバドバと流れ出ている。ていうか切りすぎ!?

『結構痛い!?切りすぎたか!?』

『ちょ!?大丈夫ですか!?』

レムさん達も目を白黒させている。しかし、こんな事態など些細だと言わんばかりにディアヴロさんはすました顔でサインの横に親指を押し当てる。血判というより血染めだな・・・・・・

「大丈夫ですか？」

「うむ、問題はない。傷の方もすでに塞がっている」
心配して再びポーションを取り出すが、ディアヴロさんの傷は確かに塞がっていた。恐らく、装備のいずれかに自動回復系のスキルがついていたのだろう。あの程度の傷ならあっという間に治癒できるようだ
「これでいいのか？」
「……は、はい・・・・・・問題ありません・・・・・・たぶん」
青い子が顔を青くしながら登録用紙を確認する。用紙のほとんどが血で染まっているが、本当に大丈夫なんだろうか・・・・・・
「えっと・・・・・次は誰がする？」
「次は俺のを頼むよ」
リムルさんが手を上げる。俺からでもよかったのだが、リムルさんの血液もどきを青い子が見破れるか試そうということになったのでこの順番となった。万が一、血液もどきに違和感を覚えて魔法薬か何かで調べられたらそれこそ言い訳できない事態に陥る可能性が高い（なお、リムルさんは血液もどきの精度にものすごい自信があるみたいだが）
シェラさんが書類を書いていく。ちなみに、リムルさんも≪魔術師≫の適性検査を受けるようだ。その方が時間を取られずに済むとかなんとか。リムルさんも何だかんだ

でクエスト受けたかったみたいだ

　そして、最後のサインも書き終わり血判用のナイフで親指を軽く切って、そこから玉のように出た血液もどきをサインの隣に押し当てた。リムルさんのサインは向こうの言語なのか見たことのない文字だった

「……はい、リムルさんの書類も問題ありませんね」

　青い子が特に違和感を覚える様子もなく、書類に不備がないことを確認する。どうやらリムルさんの血液もどきは完璧だったようだ。これで何の憂いもなく〝あの〟作戦を決行できる

　とうとう、問題の俺の番となった。恐らく、このギルドの中では対策なんてしてないだろうけど失敗は許されない

　再び、シェラさんに代筆を頼んで書き込んでいってもらう

「うん・・・・・・アインズ・ウール・ゴウン、と。出身は？」

「私もそこは空欄でいいでしょうか？何分流浪の身で、できる事なら故郷について触れてほしくはないのですが」

「は、はい、わかりました。貴方も苦労されているんですね・・・・・・」

「ハハハ・・・・・・そんなところです。適正検査は私も≪魔術師≫でお願いします」

「……と、書き終わったよ。はい、あとは血判とサインね」

シェラさんから羽ペンを受け取り、サインしていく。ディアヴロさんのように筆記体はかけないことはないが、同じというのも味気ないな・・・・・・仕方ない、封印していた〝アレ〟を解くか

『ほー、アインズくんも書けるもんだな・・・・・・ん？これ、英語じゃないな・・・・・・もしかしてドイツ語？』

『……アインズ、貴様も同志だったか』

『やめて!?それ以上言わないで!?』

だってかっこいいじゃんドイツ軍の軍服とか！覚悟してたとはいえ、これはきつい・・・・・・そういえばナザリックの宝物庫にも黒歴史置いてきたんだよなぁ。今更ではあるが、なんであんな設定にしたんだろうな、俺

サインを書き終わり、ついに血判の時が来た

『リムルさん、〝あれ〟はちゃんとつけてますね？』

『大丈夫だ、いつでも来い』

≪思念伝達≫で確認し、手甲を外して≪人体構成（アコガレルスガタ）≫で構成した腕をさらす。ナイフで指を傷つけ、血が玉のようになったのを確認してからサインの隣に指を当てる。それと同時に魔法を発動させる

「≪時間停止（タイム・ストップ）≫」

ぼそりと魔法を詠唱した瞬間、俺ともう一人、リムルさん以外の時間が止まる。第１０位階に属するこの魔法は自分以外の時間を停止させ、その中を自由に動けるというなんともチート染みた効果で、停止中相手はこちらを認識する事は出来ないが、こちらも相手に攻撃を加えたりはできない。≪ユグドラシル≫ではレベル７０でこの対策が必須と言える程に重要な魔法だ。

そして、リムルさんにあらかじめ渡しておいたのがその対策を施している指輪だ。ディアヴロさんも停止した時間を体験したかったようだが、あいにく時間停止対策をしている装備はそれだけなのだから仕方がない

「まさか『ザ・ワー○ド』を使える者がいるとはな・・・・・・」

「≪ユグドラシル≫だと対策必須なんですけどね。それより効果時間は長いですがあまり悠長にもしてられません。リムルさん、お願いします」

リムルさんが頷くと、親指の腹の上に赤い液体がにじみ出てくる。そして、それを俺のサインの隣に押し当ててもらった。よし、これで血判の偽装は完了した。ＤＮＡ鑑定なんて時代風景的になさそうだし大丈夫だろう。何、バレなきゃ犯罪じゃない！

時間が動き出した時に違和感を持たれないよう、サインの隣に指を押し付けた状態に戻る。魔法の効果が切れ、時間が動き出したのを確認して指を離す。青い子も不信に思うことなく、不備がないことを確認する。

……一先ず危機は脱したか
「へー・・・三人とも使ってる文字が全然違うんだね」
「まあ、それぞれ別世界から呼ばれたみたいだし、そういうこともあるさ（出身自体は同じなんだけどな）」
「それでは、魔術師だけのようですので、こちらで適正検査とレベル判定を行いますね」
　青い子の確認も終わり、続いて魔術師の適性検査に移る。青い子の案内で、カウンターの横にある大きな鏡の前に連れてこられた。黄金で縁取りされた宝飾品のような姿見だが、表面が磨かれていないのか曇っており、顔はおろか姿すら映っていない
「この鏡で判定するのか？」
「は、はい。こちらの鏡に指先でいいので触れて、魔力を強く淀みなく流す事で曇っている鏡面が晴れて、姿が映るようになります」
「……実際に見た方が早いです。私が手本を見せます」
　レムさんが鏡の前に立ち、手を伸ばして指先で触れる。ぼう、と表面が光ると鏡面の曇りが晴れて、レムさんの姿が上半身だけ映る
「流石です、レムさん。間違いなく、レベル４０以上！前よりも魔力が強くなってますね！」
「へー、そうやって測るのか」

『何か計測器を使うのかと思いましたが・・・・・・あの範囲まで映ってレベル４０以上か』

『全身しっかり映ってレベル１００、と言ったところか？しかし、それ以上のレベルはどうなるのだ？』

ディアヴロさんの疑問も尤もだが、エミールがレベル５０で一番強い冒険者なのだから、レベル１００以上なんて想像の埒外の存在だろうな。それを測る基準はおそらくないと思う

レムさんのやり方を見て、シェラさんが適正検査を行う。鏡に魔力を流すと、胸元まで姿が映った。睫毛も数えられるほど綺麗に映っており、青い子からレベル３０の判定をもらう

「３０!?そんなぁ・・・・・・」

「いやいや、初めて検査受けてレベル３０なら中々だと思うぞ？」

「ええ。それに、レムさんだって初めからレベル４０という訳でもなかったはずです。そこに至るまでに積み重ねてきた努力があってこその、あのレベルなのですからシェラさんも頑張ればきっとたどり着けますよ」

「だよね！レム、いつか追い抜いて見せるからね！」

「……ありえません、私を越えようなどと・・・・・・あなたは一生、わたしを見上げ続

けるのです」
　シェラさんの挑戦に、レムさんが薄い胸を張って応える。流石に、成り立ての新人に負けるわけにはいかないよな。だが、顔には出さずそっと安堵の吐息をついてるあたり、内心ひやひやしてたようだ
「それでは、次は誰からにしますか？」
「サインの順番でいいんじゃないか？」
「ならば、俺か。特に異論もないから構わんぞ」
「私も構いませんよ」
　青い子に促され、ディアヴロさんから検査を始める。レベル１５０だとどうなるか・・・・・・
　ディアヴロさんが鏡に触れる。しかし、レムさん達のように姿が映るのではなく、どろりと黒い何かが鏡面を染め上げる。さながら、奈落の底へと続くかのように真っ暗で何も映らず、おまけに黒いオーラが漏れ空気中へその版図を広げている
　レムさんも予想外の事態に驚き、シェラさんや青い子はおろか、カウンターにいた他の受付の子もこの事態に悲鳴をあげる。流石にまずいと思ったか、ディアヴロさんが鏡から手を離すと、途端に黒いオーラは消えて鏡が元通りになった
『……被告人、言い訳があるなら聞こうか？』

『ま、待て!?ただ触れただけで、何もしとらんぞ!?』
『触れただけであの反応ですか……この鏡ってそこまで判定できる範囲が広くないのかな?・今度は俺がやってみますね』
　今度は俺が鏡に触れる。案の定、ディアヴロさんと同じ現象が起きて、流石に二回目ともなると悲鳴は上がらなかったが、受付の子達が怯えている。確認は取れたので、すぐに手を引っ込める
「えっと、この場合どういった判定になるんでしょうか?」
「……え、えっと、えっと・・・・・・こんなの、初めてで・・・うぅ～?」
「今の波動、何!?」
　青い子が予想外の事態におろおろしていると、カウンター奥の扉から少女が飛び出してきた。ウサギのような耳としっぽを生やした、ディアヴロさんの話では確か『グラスウォーカー』という種族だったか。やたら布の少ない恰好をしており、胸に布を巻いているだけで肩やへそが露出している。腰にはスカートとすら呼べない薄布を前後に垂らしているだけで、肉付きの薄い脚の大部分が露わになっているという、≪ユグドラシル≫でそんな恰好をしたら間違いなく運営からレッドカードをもらいそうな恰好だ。子供の外見らしい、いたいけな大きな赤い瞳がこちらを捉える
「ギ、ギルマス!・え、えっと、この方達のレベルを判定していたら、鏡が・・・・・・」

まさかのギルドマスターだった。グラスウォーカーという種族は何年経っても外見が変わらないらしいから、この子も見た目通りの年齢じゃないということなのか

ギルマスと呼ばれた少女が、鏡とこちらを交互に見やる

「こんにちわ。さっきのは貴方達が？」

「ええ、まあ。そのようですね」

「受付の子も予想外だったみたいだけど、この場合どうなるんだ？」

「その件も含めて、ちょっと奥でお話したいんだけど、いいかな？」

どうやら俺達の苦難はまだまだ続くようだ。冒険者登録するだけなのに前途多難すぎないか・・・・・・？

◆◇◆

【とある三大魔王の思考会議その９】

『それにしても、≪クロスレヴェリ≫のキャラクターはけしからんな。衣装とか身体のラインとか特に』

『リムルさん、もうそろそろファール取られますよ？』

『イリーガルユースオブハンズか』

『ちょっと待てぇ!?まだ触ってすらないだろ!?』

初クエスト

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：ディアヴロ】

「単刀直入にいうと、ウチじゃ君達を扱えないと思うんだよね」

カラカラと楽しそうな笑みを浮かべながら、ファルトラ市冒険者協会会長（ギルドマスター）『シルヴィ』が告げる。ギルマスの部屋は六畳ほどの広さで、内装の全てが木製だった。応接用の低い机があり、その近くの木製の椅子に俺とシェラとレムが、対面の椅子にアインズとリムルが座っている（アインズの横幅がかなり広いためこの配置になった。決して他意はない）。シルヴィは、俺達が座っている場所から少し離れている執務机に座っている

「それは・・・・・・我々は冒険者に登録できない、という事なのでしょうか？」

「いやいや、むしろファルトラの冒険者としてはありがたいよ？ボクの方じゃなくて、君達の方に不満があるんじゃないかと思ってね」

「どういうことだ？」

「納得してもらえるか、分からないけどね。ウチに限らないけど、冒険者協会ってのは、登録された冒険者にレベル付けをして、そのレベルに応じた依頼を任すんだけど・・・・・

君達の場合、レベルがわからないんだ」
「わからない、か・・・・・・まあ、鏡があんな風になったらなぁ」
「そう、こんな事は初めてだからね。高レベルなのは間違いないと思うけど、どれほど高いのかわからない。どんな依頼を任せていいのか判断できないんだ。そして恐らくだけど、まだ判定していないリムルさんも鏡に触れたら、ああなるんじゃないかなと思ってるんだけど」
「まあそこそこ強いとだけ言っておくよ。やってみてもいいけど、流石にこれ以上騒ぎを起こすわけにもいかないだろ？」
「少なくとも、ここで公開されているクエストなら、全てクリアできると思うがな」
「すごい自信だね。なおさら、評価規格外だ。ギルマスとしては難しいかな」
むぅ・・・・・・俺としてはこの世界での自分のレベルを知りたかったのだが、これはしょうがないのか。ファルトラの街は〝序盤の終わり〟であり、ここから西に広がる魔族の領域に入ってからがＭＭＯのクロスレヴェリの本番。点在する人族の拠点を足掛かりに、魔王の復活を阻止するために必要な強さは人族の限界に近いレベル８０以上。そこから種族の限界を超えるためのシナリオを経て、初めて未到の領域であるレベル１００に至れる。確定ではないが、レベル制限を超えている俺や、課金で能力値を上げているアインズ、そして現役魔王のリムルを規格外と評価するのは間違いではないの

だろう

「こちらとしては、正当な報酬を支払って頂けるのなら不満はないのですが・・・・・・」

「そうかい？多分ボクは君達より弱いよ。その僕に命令されて納得するかな？それとも、ボクに替わって協会会長になりたいと思うかい？」

「待て待て、俺達ってどんな目で見られてんだよ。そもそも、協会会長って腕っぷしだけでなれるものじゃないだろ」

「いやー、一階で屯してた冒険者達を見てもらったと思うんだけど、荒っぽい人が多いんだよね」

「確かに、クエスト一つで争い事になってましたが・・・・・・纏め上げるにも相応の実力が必要ということですか」

「そういうこと。さっきも、何処かの誰かさんが難癖つけてきた冒険者を殴り飛ばしたみたいだし」

　ニコニコと、先ほどのエミールとの騒動を誰がやったのかわかっているような口ぶりでシルヴィがそう告げると、四人の視線がこちらに向いた。

　ヤメテ!?そんな目で見られると胃が痛くなっちゃう!!ていうかアインズとリムルは納得してただろ!?

「俺は組織などに興味はない。それは、そこのリムルとアインズも同様だろう。面倒な

事は、貴様がやるがいい」
「元々路銀稼ぎが目的だしな。アインズが言った通り、正当な報酬を払ってもらえれば文句はないよ」
「あはは、面白い人達だね。それじゃあ、もう一つだけ。キミ達の実力にあった任務は、そうそうないよ?」
その点に関しては、ファルトラでは仕方ない。ここでは『上級クエスト』は数えられるほどで、最後の『初級クエスト』が与えられるような街だ。もっとも、今は『ストーリークエスト』を受けているようなものだろうな。隣にいるレムを見て、そんな事を思う
「任務のレベルは気にしなくても問題ありません。むしろ、様々な事を学べるいい機会です」
「そもそも、俺に見合ったクエストなど、このエリアにはないだろうからな」
「そう? じゃあ・・・・・・これからよろしくね!」
シルヴィが俺の方に駆け寄ってきて、右手を差し出した。どうやら俺がリーダーと思われたようだ。まとめ役としてはリムルなんだろうけど・・・・・・
何はともあれ、話は纏まったので俺は差し出されたその小さな手を掴む
「うむ」

鏡が黒くなった時はどうなるかと思ったが、これで晴れて冒険者になれた。傲慢な態度をとりつつ、俺は内心で安堵するのであった

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：アインズ】

「ねぇ、早くクエスト行こうよ！」

シルヴィさんとの話し合いが終わった後、俺達はクエストを受注するためにカウンターに戻ってきた。シェラさんが息巻いているが、気持ちはわからないでもない。俺も『ユグドラシル』を始めた頃は同じように気分が高揚したものだ

『シェラのテンション高いなー』

『だが、シェラの気持ちも分からんでもないぞ。この辺りのモンスターの強さは興味がある』

『ですね。それに、俺に至っては別ゲームに入り込んでいるようなものですからね。新鮮さが違いますよ・・・・・・ん？』

『どうした、アインズ？』

『ディアヴロさん、あそこにいるのってガラクじゃないですか？』

『何？』

ふと、一階を見下ろした時に発見した人影を指差す。そこには、昨日の夜絡んできた魔術師協会のガラクが、周囲の冒険者達に侮蔑の視線を向けながら、冒険者協会を出ていく姿が見えた

『冒険者協会に依頼を出しに来たんじゃないのか？』

『確かに、魔術師協会は頻繁に冒険者に依頼を出していたな。魔術の実験に使うから、とある魔獣の牙を何本取ってきて、といったようなものが大半だ』

『二人の首輪に関する依頼を出しに来たんでしょうか？でも、あの視線が気になりますね・・・・・・』

あんなに嫌そうな顔をするくらいなら、部下に来させればいいのに・・・・・・そんな事を思いながら、カウンターに視線を向けると受付の赤い子がシルヴィさんと何やら相談しているのが見えた。相談が終わると、シルヴィさんが一枚の紙を持ってこちらに声をかけてくる

「やあ、ディアヴロさん達。早速、やってほしいクエストがあるんだけど」

そういって持っていた紙をカウンターの上に差し出す

「……すまん、レム。ちょっと読んでくれないか」

「えっと・・・・・・これは、『人食いの森』のモンスター『マダラスネイク』の討伐クエストですね。こんな依頼をする者がいるのですか」

どうやらモンスターの討伐クエストのようだ。『マダラスネイク』というモンスターがどの程度の強さなのかはわからないが、レムさんの言い方だと〝普通の〟依頼じゃないように聞こえる

「モンスター討伐は、クエストとしては普通ではないのですか？」

「……あの辺りのモンスターは、冒険者が数人で行って倒せる相手ではありません。普通はウルグ橋砦や、星降りの塔の周りのモンスターを狩るものです」

「そんな事をやっているから、レベルが上がらないのだ」

ディアヴロさんが肩をすくめる。彼の言う通り、ゲームであれば弱いモンスターばかり狩っても経験値効率が悪く、レベルを上げて強くなりたいなら強いモンスターを狩った方が何倍もマシだ。そのあたりに、ここの冒険者のレベルが低い理由がありそうだ

「……仕方ありません。誰もが、あなた達のように強いわけではありませんから。強力なモンスターに挑んで、死んでしまったら、何も残りません」

「・・・・・・・・・・・」

「ふむ」

「うう・・・・・・人食いの森って、すっごい強い魔獣が出るんだよね？」

確かシェラさんは魔術師の判定でレベル３０と言われたんだったな。ディアヴロさんの情報通り、人食いの森が適正レベル６０ならシェラさんが脅威に思うのも無理はな

いだろう。もっとも、俺達がいる以上余程の事は起きないと思うが
「どうやら、依頼主は魔術師協会だね。実験のために、どうしても人食いの森の≪マダラスネイクの目玉≫が必要みたいだ。期間も短いから、強い人を集めてる時間もないし、どうだい？無理にとは言わないけど・・・・・・やってみる？」
　話を聞く限りでは、緊急性の高い依頼に聞こえる。しかし、この依頼を持ってきたのが先ほど冒険者協会を出ていったガラクだとすると
『さっきディアヴロくんが言ってたような依頼の内容だけど・・・・・・ぶっちゃけどう思う？』
『罠、の可能性が高いと思います。先ほどのガラクの態度が気になったのと、過去に似たような襲撃を受けた事がありました』
『ふむ・・・・・・あり得ん話ではないな。大方、昨日の復讐と言ったところか』
　ディアヴロさんも、概ね同じ意見のようだ。復讐するにしても、戦力を整えるため時間をかけると思っていたが魔術師協会から切り札に足る〝何か〟を持ってきたか、はたまた強い協力者を得たか・・・・・・
『うーん、それを考えると断った方が安全なんだろうけど、後でいちゃもん付けられそうだよなぁ』
『ふん、ならば正面から全て叩き潰してこそ魔王であろう。それに魔術の連続使用によ

る影響の確認もしたかったところだ』
『それなら、向こうの依頼ということですしちょっと痛い目も見てもらいましょうか。セレスティーナさんには申し訳ないですけど』
『『ほう？』』
『一先ず、リムルさんにお願いしたいんですが――――』
フッフッフ、ギルド一のえげつなさを誇る『ぷにっと萌え』さん直伝の≪らくらくＰＫ術≫、とくと味合わせてくれる

◇◆◇

【ｓｉｄｅ：リムル】

今現在、俺達はシルヴィが持ってきた魔術師協会の依頼を受けて≪人喰いの森≫の中へ入っている。木々が鬱蒼としており、数メートル先が見渡せない上に空も生い茂った葉が隠してしまっているため、上空から敵を視認する事も難しい。高高度から物理魔法『神之目（アルゴス）』でモニターしてみたが、地面の見える箇所がほとんどない程で、まさに罠を張るにはもってこいの地形と言えよう。ちなみにこの魔法を見せた時の彼らの反応は言わずもがなである。アインズくんは≪ユグドラシル≫で似たようなアイテムがあったみたいで、反応は薄かった。逆に、探知阻害や攻勢防壁等々対策なしでこういった探査

魔法を使う危険性を説かれたほどである。彼がいた≪ユグドラシル≫の魔境っぷりが凄まじい・・・・・・・

そんなこんなで、森の中に原生する魔物たちに注意しながら進むと大きな沼が見えてきた。事前情報では今回のターゲットである『マダラスネイク』は体長２０ｍにも及ぶ大蛇で、普段は沼に生息し近づく獲物を襲うそうだ。

ディアヴロ、アインズ、俺の三人は打ち合わせ通りに襲撃の可能性を考えて、周囲を警戒している。なお、シェラとレムにはこのことは伝えていない。レムはともかくシェラはポーカーフェイスとかできそうにないからね

「リムルちゃんの魔法で居場所が分かればよかったんだけどねー・・・・・・」

「……あれだけ鬱蒼としていたなら無理もないでしょう。住処は特定できているんです。後は囮を用意しておびき寄せるだけです」

そういってレムがクリスタルを構える。確かに召喚獣であれば囮には最適だろう。

さて、こっちも釣れたかな？

≪マスター、こちらを監視する者たちを確認しました≫

シエル先生、流石仕事が早い。気配を探ると少し離れた木の上に１０人ほどの集団を見つけた。敵意マシマシでこちらを見つめているのが嫌でもわかる

≪ですが『リムルさん、そちらを監視している集団を発見しました』≫

『お、早いねアインズくん』
『リムルもそうだが、アインズも中々便利な魔法を使うではないか。こうも相手に気配を悟らせないとは』
　そう、これがアインズくんが建てた作戦である。今ここにいるアインズくん、実は俺が魔法で作った幻影なのだ。森に入ると同時に幻影をアインズくんに被せ、その間にアインズくんが第９位位階魔法『完全不可視化（パーフェクト・アウンノアブル）』を使用し、俺達と別れて索敵を行っていたのだ。この魔法、発動すればシエル先生でも知覚するのは困難を極めた。実際、俺もスキルを総動員したがアインズくんを補足できずにいたくらいである。もっとも、攻撃を行えばその効果は失うらしいが
『アインズの予想が的中したわけだが、さてアインズよ。そこにいる愚か者はどんな奴らだ？』
『えー・・・・・・それなんですが・・・・・・』
　おや、アインズくんの歯切れが悪い。そこにいる襲撃者に何かあるのか？
　そういえばシエル先生も何か言いかけてたみたいだが
『そこにいるの・・・・・・≪ユグドラシル≫と≪クロスレヴェリ≫に相違がなければエルフに見えるんですが・・・・・・』
　……あ、これ終わったかも

◆◇◆

【とある三大魔王の思考会議その１０】

『『／（＾ｏ＾）／』』

一泡吹かせてみる

◆◇◆

【ｓｉｄｅ：リムル】

「さて・・・どうしようか？」

「……どうすると言われてもな」

俺達は今、盛大に悩んでいる。目の前の状況に。魔術師協会から依頼を受けた訳だが、人食いの森に来て早々エルフ達に待ち伏せされていた。冒険者協会に魔術師協会所属のガラクがいた事から、奴がこの依頼を利用して俺たちをおびき出し、手引きしたエルフ達に始末させようと画策したんだろう。シェラはお姫様だし、エルフ達に色々吹き込めばこうなることは自明の理だ。でなければ、こんな森の中で待ち伏せなんかせずに真っ先に俺達に接触してるはずだしな。待ち伏せしていたエルフの数は１０名程で、胸当てだけの軽鎧装を身にまとい、その下に緑の貫頭衣を着ている。ズボンも緑色で、弓持ちが多いところを見ると森の中での戦闘を得意としているのが分かる。

え？なんでそこまでわかったのかって？そりゃもちろん

「くそっ、一体我々に何をした!?」

待ち伏せしていたエルフ全員簀巻きにして目の前に転がしているわけで。
ステルス中のアインズ君からの報告を受けた後、《思念伝達》による話し合いの結果、下手に動かれる前に無力化して話し合いに持ち込もうという少々強引な手段を打つことになり、アインズ君のスキルで数名を麻痺させて向こうが怯んだところを俺とディアヴロ君が強襲して無力化する事に成功した。ディアヴロ君が《バースト・レイン》という火の範囲魔法攻撃を撃った時は少々焦ったが、うまい具合に威嚇射撃兼目くらましになってくれたおかげで難なく残りのエルフも無力化できた。無力化した後は武器を取り上げて、《粘鋼糸》という俺がスライムに成り立ての頃にお世話になったスキルで縛っている。まさか異世界に来て早々このスキルを使う事になるとは思わなかったが
ちなみに、ガラクも捕まえてある。エルフ達を捕縛した後、少し離れた茂みの中に隠れていたところをアインズ君が見つけて、同様の方法で捕縛した。見つけた時点でひどく動揺していたらしく、察するに俺達がエルフにボコられる様を高みの見物しようとしてたら結果は逆だったとかそんなところだろう。なお、ギャーギャーと騒ぎそうだったのでこいつだけはくつわを嵌めて喋れないようにしている
「くそっ、このまま我々もシェラ様のように奴隷として売りさばく気か!?」
「いやいや、飛躍しすぎだって」
「そうだよセルシオ!そもそも、私は奴隷になんてなってないから!」

「ならば、その首輪は何なんですか!?」
「セルシオ」と呼ばれた、見た目女性の男が声を荒げる。まあ、そう思ってしまうのも無理もないだろう。ガラクにそそのかされたと言っても、こちらの見た目はいかにも怪しい黒ローブの魔術師に、目つきの悪い悪人面の混魔族。そして連れているのは首輪を嵌めた少女二人。そりゃ疑いたくもなる
『こりゃ俺の方もいらん事吹き込まれてるだろうなぁ・・・』
『見た目は完全に美少女ですのにね』
『中身はおっさんくさいがな』
　ディアヴロくん一言多いよ。まあ、元のシズエさんが美人だからね
「えっと・・・これは、そのぉ・・・」
「貴様らが、純真無垢なシェラ様を騙して奴隷にしたのだろう!?早くシェラ様の首輪を外せ!」
「外せと言われてもなぁ・・・」
　こちらもそうしたいのはやまやまだが、シエル先生の解析が終わらない事には……
≪……≫
　シエル先生も黙しているし、まだまだかかるんだろう。それを説明しても納得してくれるかどうか・・・

「ふむ・・・・・・セルシオさん、でしたか。少しばかり、こちらの話を聞いていただけないでしょうか？」
「うるさい！シェラ様は奴隷の首輪を嵌めていいようなお方ではないのだぞ！」
「まあまあ、そう仰らずに。むしろ、これは貴方方にとっても悪い話ではないと思いますよ？」
「なんだと!?」
　うん？アインズ君がセルシオと交渉する姿勢を見せる。何か、考えがあるのか？
『どうする気だ？アインズよ』
『いえ、彼らにも決してメリットがないわけじゃないと思うんですよ。この状況』
『と、いうと？』
『このまま彼らに彼女を引き渡しても、彼女が黙ってついていくと思います？』
『……あー、成程』
　アインズ君の言いたい事は分かる。ディアヴロ君も少し間をおいて、察したようだ。彼女の性格を考えると確かにメリットもあると言えばあるが、さて・・・・・・
「まず、大前提として言っておきますが、我々は奴隷商ではありません。そこにいる混魔族の彼は元素魔術師で、私ともう一人の彼も、系統は違いますが魔術を扱えます。そして、彼女の事情も本人から聞いております」

「それを知って奴隷にしたのか!?」
「いえいえ、あの首輪は事故でついたようなもので、その所為か普通の方法では外せない状況にあるのです。むしろ、我々はその方法を探している最中なのです」
「くっ、例えそれが本当だとしても、それのどこに我々に益のある話だと」
「落ち着いてください、話はここからですよ。考えてもみてください。仮に彼女の首輪を外して、国に帰らせたとします。ですが、彼女がその程度でおとなしくしていると思いますか?」
「む・・・・・・それは・・・・・・」
「セルシオ!?」
　アインズ君に問われてセルシオが目をそらした。うん、なんとなくそんな気はしてた。レムも呆れた顔をしている
「それに、聞けば彼女はずっと王族としての生活に息がつまっている様子。ならば、いっその事外の世界を歩かせて息抜きしてもらう方が精神的にもよろしいかと思いますが?」
「むぅ・・・・・・」
「そして、事故とは言え彼女には隷属の首輪がついています。それはつまり、彼女の行動をこちらである程度制限する事ができる、という事にもなります。極端な話、『我々から

離れるな』と命令すればどこかへ勝手にいくこともないでしょう」
　アインズの提案にセルシオが迷いを見せる。悩むあたり、シェラの事を大切に思っているのは見ていてわかる。他のエルフの連中も、ざわざわと相談し始めている。
「ですが、こちらが怪しいというそちらの言い分ももっともな話。ですので、そちらから一人監視役兼連絡員を付けることを提案します」
『アインズよ、そんな事いって大丈夫なのか？』
『こちらも少しは譲歩しないと交渉とは言えないですよ。ぶっちゃけ、見られて困るような事なんてしてないでしょ？』
　うーん、そういわれると後ろめたい事なんてやってない・・・・・・いや、ディアヴロ君がやらかしてるな。事故にせよ、こちらが気を付ければいい話ではあるんだが
「……仮に監視役を付けたとして、お前たちが寝静まったころにシェラ様を連れ出す事ができるわけだが？」
「それはあまりお勧めしません。どうやら彼女は城の警備を抜けてファルトラの街に来たご様子。ザルだったとは思いませんが、そんな警備を抜け出せた彼女が、また城を抜け出さない保証もそちらにないでしょう。むしろ二度手間になると思いますが？」
「ぐっ、それは・・・・・・くやしいがその通りかもしれん」
「えっと・・・・・・これ、褒められてる・・・・・・？」

「……どうしてそう思うのか、理解に苦しみますね。どうみても呆れられているでしょうに」

レムも呆れながらシェラの勘違いを正す。シェラは不満そうに頬を膨らませているが、弁護の仕様がないな、うん。それにしても、アインズ君の交渉術は流石というべきか。伊達に営業マンやってないね

「だ、だが、シェラ様の警護はどうするつもりだ?元素魔術師など、一体なんの役に」

「ほう?この俺を前にそのような戯言をほざくか」

あ、ディアヴロ君に火が付いた。そりゃ、極めるほどにやりこんだ元素魔術を馬鹿にされたら怒りもするか

「せっかくだ。そこの小物にも、もう一度わからせる必要がある。貴様らが侮っている元素魔術の恐ろしさというものをな。アインズも付き合うといい、貴様の力もあの程度ではあるまい?」

「まあ確かにそうですが・・・・・・ほどほどにお願いしますよ」

そう言って、ディアヴロ君がセルシオ達の背後の森に向かって杖を向ける。どんな魔法を見せるのかわからないが、念の為結界を張ってこっちに被害が及ばないようにしておく

「しかとその目に焼き付けるがいい!これが、貴様らが軽んじてきた元素魔術の神髄で

あり、異世界から召喚された魔王の力だ!!」
　あっバカ、と思うのとほぼ同時にディアヴロくんが魔法を放った。何も自分から堂々と言わなくてもいいと思うんだが・・・・・・
　主に余計なトラブル回避のために
「《フリージア》!!」
　ごうごうと風が鳴り、ターゲットとなった森が瞬く間に氷漬けにされていく。その様子は正に、氷の花が咲くかのように幻想的でもあった
　セルシオ達は勿論、ガラクも絶句している。あれだけこき下ろして来た元素魔術が、このような光景を作り出すなんて夢にも思わなかったのだろう。中にはひどく怯えている者もいる。当然、森の中にいる野生動物ならびにモンスター達も逃げ出している。中には森から飛び出してくる奴もいて、そこにはターゲットでもあるマダラスネイク姿もあり、沼の中に飛び込んでいる。まあ、魔法の威力もそうだがモンスターといえど蛇なんだし、寒いのダメなんだろう
「全く・・・・・・そのようなものを見せられては私も負けてられないな」
　アインズ君もノリノリなようで、連中が唖然としている間に『スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』を取り出している。どうやら、ガラクへの当てつけに塔で見せた『アレ』を出すつもりのようだ

「ついでに氷の処理もするとしよう。いでよ、《根源の火精霊召喚（サモン・プライマル・ファイヤー・エレメンタル）》!!」
　アインズ君が叫ぶと、スタッフの宝石が光輝いて根源の火精霊が召喚される。エルフ達やガラクは勿論、一度見たはずのシェラやレムも驚いている。シェラに至っては一度見ているはずなのに、「すごい、すごーい!」とはしゃいでいる始末だ
「根源の火精霊よ、木々に火がうつらないよう注意しながら目の前の氷を処理せよ」
「アインズ君、力を示すためとはいえあれだけの精霊を氷の処理だけにつかうのってどうなのよ?」
「いえ、別にあれが切り札って訳でもありませんしね・・・・・・それに、火系統の魔法は確かに習得していますが、あの氷を処理するとなると加減の問題で適当なのがないんですよ」
　うーん、そうなるとあながち間違ってもないのか。というか、今の会話を聞いてガラクがこちらから目をそらしてひどく狼狽している。大方、昨日の一件に加えてあれほどの精霊を使役している現実を受け入れないでいるのだろう。多分、くつわを外したら
「馬鹿な・・・・・・そんな馬鹿な・・・・・・!?」とか呟いてそうだ
『さて、実力の程はこれで伝わったはずだが、標的のマダラスネイクが沼に潜ってしまったな・・・・・・』
『ああ。それなら大丈夫だ』

『『え？』』

《思念伝達》で二人にそう伝え、俺はマダラスネイクが逃げ込んだ沼の方に向かう。沼の淵一歩手前で止まり、先ほどすれ違った際に仕掛けたものを手繰る。大分深くまで潜ったようだが、あえて言おう。

大魔王からは逃げられないと

「ソォイ!!」

掛け声とともに、両腕を振り上げる。すると、大きな水しぶきとともにマダラスネイクが空中に放り投げられる。

アインズ君が「おおー」と感嘆の声を漏らしている傍らで、ディアヴロ君が『そこは「フィーッシュ!!」ではないのか？』と《思念伝達》でツッコミを入れる。だって蛇だしねぇ、合わないと思った

そう、すれ違ったあの数秒の間に粘鋼糸を巻き付けて文字通り釣りあげたのだ。割と簡単にやっているように見えてるが、糸の強度とか結構気を遣っていたりする。必要なのは目玉という話だが、皮とか牙とか普通に売れるだろうから、傷の少ない方が絶対に高値で買い取ってもらえる事だろう

「……あ、そうだ。《真なる死（トゥルー・デス）》」

空中に放り投げられているマダラスネイクに、アインズ君が魔法を唱えた。名前から

して即死魔法のようで、マダラスネイクが地面に落とされた後、一向に動く気配がない。俺の感知スキルで確認してみたが、間違いなく死んでいる

「相変わらずえぐい魔法だな」

「あらゆる魔法を跳ね返す貴方がいいますか・・・・・・それよりも、無傷で仕留めたのはいいんですが、剥ぎ取りとかどうします？持って帰れない事もないですが・・・・・・」

「ああ、その辺も問題ないよ」

そういって、死体となったマダラスネイクに触れてスキルを発動する。

まずは、究極能力（アルティメットスキル）《虚空之神（アザトース）》の権能の一つである虚数空間にマダラスネイクの死体を収納する。この時、みんなの目にはマダラスネイクが一瞬にして消えてしまったように見えた事だろう。現に、俺のスキルに関心を示しているアインズ君とディアヴロ君以外（未だに現実逃避しているガラクを除く）全員目が点になっている。まあ、そんな事お構いなしに目玉、皮、牙ｅｔｃと売れそうな部位は一寸の無駄もなく分解して外に出すんだけどね！

三分どころか三秒クッキングである

『これは・・・・・あれだな、某狩猟ゲームのリザルト画面を見ているかのようだな』

『この場合、物欲センサーが機能しなさそうですね・・・・・・それはそれとして、これで一応クエストは達成ですね』

『まあ確かにそうなんだが、この際だしもう少し稼いで行こうじゃないか』
『『え？』』
「時に、レム君」
「……ハッ!?え、あ、な、なんでしょうか？」
「今回のクエスト、『マダラスネイクの目玉』が目的だった訳だが、必要個数までは記載されてなかったよね？」
「……ええ、確かに数量の記載はなかったと思います。元々、あっちもエルフを使って三人を始末するつもりのようでしたし、適当だったんでしょう」
そう言って、レムが冷たい視線をガラクに向ける。まあ、俺もそんな気はしてたよ、うん。死んでしまえば、依頼料も払わなくていいんだし
だが、こうして目的の物を手に入れた訳だし？おまけにノルマも明記されてないんじゃねぇ？
「魔術師協会の思惑はどうあれ、数が足りないと難癖つけられても困る訳だし・・・・・」
「……あー、成る程」
アインズ君は察してくれたようだ。ディアヴロ君もくつくつと笑っている。セレスティーナさんには悪いが、クエストとして出された以上はしっかりとこなさないとね。別に、ガラクへの意趣返しでやってる訳じゃない。ないったらないのである

「既に他のマダラスネイクの位置は掴んでるから、後は狩るだけだ」
「ならば折角だ。次は一人一殺で狩ろうではないか」
「いいですね。今後もこう言ったこともありそうですし、ある程度はこちらの実力の証明になるでしょう」
「よーし、それじゃあ俺は最初はナビゲートと周囲警戒に徹するから先に行っててくれ」
こうして魔王三人による蛇狩りが敢行された。結果は言わずもがな、アインズ君は先ほどと同じく即死魔法で、ディアヴロ君は風魔法で首をきれいに切断してマダラスネイクを狩っていた。当然、俺も二人の後で一匹狩りましたとも
こうして、指名依頼による俺たちの初クエストは幕を下ろしたのであった。因みに、アインズ君がセルシオに提案した件は、最初の敵愾心は何処へ行ったのかと思うくらいすんなりと通り、監視役には彼自身が来る事になった

◆◇◆

【とある三大魔王の思考会議その１０】

『『一狩り行こうぜ!!』』

『未来に生き過ぎててネタがわからない・・・』